青鞜

小説號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

靑鞜

小說號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小說號目次

田草とり……一……山田わか
新らしき生命……九……野上彌生
合奏……二八……國分まさを
紅き木の芽……七一……川田よし
蝙蝠……八三……濱野雪
京人形……九八……松井靜代
夜汽車……一二一……齊賀琴

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

佐渡節……………………………………一三九……安田皐月
別れての二三日……………………………一六九……加藤緑
惑ひ…………………………………………一九二……伊藤野枝
編輯室より…………………………………二〇四…………………
小說號について
伊達虫子さんの紹介
德田秋江氏と平出修氏
報告其他

附錄

女性間の同性戀愛……………………………一……エリス
野母譯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

田草とり――山田わか――

朝から女房のお光と二人で田の草を採つて居た吉藏は晝食後、先づ一服と云ふ風に悠然と椽側へ腹這ひになつた。幾本かのすつきりした竹と堂々と生ひ繁る樫木は煎りつくやうな熱い日光を其の椽側から遠ざけて居る。彼は蟬時雨を耳にしながら、時々風の工合ひで樫の葉をもるゝ華やから日光の色をうつとりと地上に見詰めて居た。

『ホラ、父つあん、父つあん居た。見えるか。オー、ヨシ〳〵まだオッパイ、慾しいか、ヨシ〳〵』

生後三ヶ月計りの赤子をあやなしながらお光が來た。愛嬌のある丸顏へ笑を湛へ、白い胸を開いて子に乳房をふくませながら亭主の足の方へ腰をかけた。そして

あの時に、お前さんはよく勘辨して呉れなすつたよなア。もしもあの時お前さんが何處迄も頑張つたら此の子はどんなに迷ふたか知れめえよ、なア』

と云つて彼女は膝の子に頬ずりした。胸の中の満足は満面に溢れ出て居る。が『あの時』を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

聞かされた吉藏の顏は急にくもつた。彼は煙管持つ手に頰杖ついたまゝ女房の方をふり向きもせず、唸るのだか、彼女への答へだか分らぬ聲で唯

『ウーン』

と云つた。そして去年の夏、隣村の祭禮の晩に起つた出來事を彼は思ひ出した。

可愛い新妻と二人でテレックテン〳〵テン〳〵と若者がたゝく太鼓の音や鎭守樣の內外を飾つた赤い提燈を後に、松や杉の欝蒼した宮の境內を出て、屋臺店のカンテラの光が此の二人にとゞかない位の處迄行くと吉藏は二三人の友達に出逢つた。思はず立止つて二言三言もの云ひかわしてから

『さア、行くべいよ』

と云ひ乍ら、自分の後に妻は立つて居ると思つて振り向いた。處が意外にも貰つた許りの大事な〳〵花嫁の姿はケロリと見えない。彼は宛然狐に魅れた風であつた。始めは自分の目を疑つたが矢張り其處に居ないのは事實だ。暫くは腹が立つのだか、驚いて居るのだか、又は悲しいのだか自分にも分らなかつたが其のうちに、打捨つては置けないと云ふ事だけは明瞭と意識して來た。で混雜して居る頭で一寸考へて見た。

『事によると何か買ひたい物でも思ひ出してお宮へ戻つて行つたのかも知れない。夫にし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ても己に默つて行くとは妙だ」

とは思つたが、先づそうとして、無理に自分の心にそうと信じさせて一目散に今出た計りの宮をさして駈け出した。無限に大い黑い空間へぽつかり明を見せて居る其の明みの中へ彼は跳び込んだ。と同時に目のとゞく限りを見廻した。が其らしい姿さへ見えない。老人子供の群は大分歸つてしまつた後で、彼方に三人此方に五人若者が笑ひさゞめいて居る計り、太鼓の音さへ今は止んで居る。

『それ見た事か』

と自分の心が自分に云ふた。胸に釘を打たれたやうにどたりとした。わく〳〵する心を强て押へて宮の周圍をぐるりと一廻りして見た。けれども居ない。目は尖つてしまつた。何處かで女の聲がするやうに思ふので、段々其の聲に近づいて見ると、其れは並んだ屋臺店から少し離れた處に葭簀を張つて甜酒を賣つて居る村の茶屋の女共であつた。

もう何處も探す處がない。彼の心は暗黑な疑ひに閉ざされてしまつた。と不圖思ひ付いた事がある。其に勇氣を得て彼はもう一度走出した。走り乍ら獨言した。

『そうだ、其れに違へねえ。馬鹿な奴だ。その舊の友達に顔を見られるのが其程耻しいか。已に默つて先い一人で歸る程。馬鹿な奴だ。餘計な氣を揉ませやアがる』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

半里の道を瞬く間に來てしまつた。家は既う戸閉りができて、ひつそりして居る。叩いて戸を開けさす間ももどかしさうに外から
『お母々(つかア)や、お光は歸つてるか、ヱ、お光は歸て居べいなア』
大聲で喚鳴つた。
　彼の母はがた〳〵音を立てゝ戸を引き
『何(あん)だア？　お光は歸えてるかッて？　だつてお光はお前と一所ぢやなえのか？』
最後の望は絶(た)たれた。室内の明へ背を向けて倒れるやうに椽側へどかつと腰を下した。母親が何か云つて居るけれども、唯ガン〳〵頭へ響く丈けで意味は取れない。彼は重い體をもう一度起して歩き出した。種々尋問する母親には答へもせず、腕組をしてのそり〳〵今來た道へ引返した。
　先刻(さつき)お光と一所に此處を通つた時には自分等は祝福する囁きのやうに聞えた、風に戯れる稲の音が今は自分を呪ひ、自分の足許へ押寄せて來る黒浪のやうに思へた。路傍にある墓場の大きな公孫樹(いてふ)はニヨツキと立つた大入道のやうに彼を脅(おど)した。彼は『何の糞ッ！』と云ふやうな顔して其を睨みあげた。其處を通りぬけて思はず行くさきを見ると尺除になつた稲と稲の間の田圃道をぼかしたやうな白い者が動いて來る。お光が白い浴衣を着て居た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のを覺へて居た彼はもしやと思つて胸を躍らせ乍駈けつけて見ると果して暗夜にも明瞭り分る大事の〳〵花嫁だ。

　彼は吻として嬉しく思ふたのは束の間、忽ち胸を鎖して居た黑い疑が憤怒と變つて燃え上がつた。

『ウヌッ！』

同時にばかッと女の柔い横面を打つた。女は打たれた頰を思はず掌で押へたなり、聲も立てなければ逃げ出しもしない。男はどう云つて、むか〳〵浪打つて來る胸のむしやくちやを吐き出さうかと思つて敦圉荒く仁王立になつて、竦み上つた女を睨んだ。急き込んで居たで言葉が閊へてしまつたので。其をぢれて、もう一度大きな拳を上げやうとした時、此れも祭りの歸りか、今女が通つて來た松林の向ふにがや〳〵と人聲がした。男は突然女の腕をむづと掴んで引摺る樣にしてとッとゝと家へ急いだ。吉藏の母は伜の樣子の唯ならぬを案じ、提燈をつけて途中迄出て居た。

『お前等は、まア、どうしたと云ふだ』

呆れて尋ねる母の前を無言で彼は通り過ぎた。座敷へ上るや否や男は女の腕を掴んだまゝ一ッこづいて其處へ彼女を投り出した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『サア、此の阿魔！　此畜生！　今迄何處に居やがつた？　エー！　巳の目を晦まして何處へ失さつた？　さア、たつた今白狀しろ！　さア、たつた今云つて見ろッ！』

返答によつては掴み殺しも爲かねない權幕でまくし立てた。女は倒された體を靜かに起してもぢ〳〵し乍ら

『信念寺の……裏に……』

『何ッ！……あ何んし、わりや、そんな處へ行つた』

男はいよ〳〵氣色ばんだ。女は恐る〳〵

『だつて、半次さんがちよッくら話があるからつて引ばつたゞもの』

と云つてのけた。男は今更乍血相變へた。

『何だと！……………ウヌ！』

獅子の吠えるやうな唸聲と共に全身に有らん限りの力を蠑螺のやうな拳に集めて立ち上つた。此の時迄樣子如何にと猛り立つ倅と、鷲につかまれた鼠のやうに小さくなつて居る嫁とを等分に見比べて居た母も、亦唯事でない物音に目をさまして、床の中で、息を殺して事の成り行きを見て居た十三になる妹も激怒の極に達した吉藏に縋りついた。

『此れ！　吉！　そ、そんな亂暴したつて仕樣が有んめえ、まま座れ！　落ち付け！　落

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ち付けッて事よ！」

『あ、何に！　このすべた！　ひ、人を……馬鹿に………』

『兄さん！　よしなよッ！　そんなに、ぶんなぐつちや、死んでしまアべい！　よう！』

母の怒鳴り聲、妹の絶叫が隣人の目をさゝました。三四人が馳せつけた時には吉藏は兎も角も母と妹に押へられて息を喘まして居た。哀れ、嫁は髪振り亂し頭から膝へかけて血を流して居た。

と此處迄思ひ廻して吉藏は重い何とも云へない、いやな心持ちになつたが、それでも彼は其時の腹立ちまぎれに其の時お光を逐ひ出してしまはなかつた事を喜んで居る。彼は其の夜彼女から受けた恥辱のために彼女に對する愛を捨てる事は出來なかつたのだ。又後に二人の媒介者であり、吉藏の伯母である人がお光に

『何たつて又あの半次さんは亭主と一所に居るお前を引張つたもんだ？』

と聞いた時に彼女は何の躊躇する處もなく

『やつぱり、半次さんは、おいらを思つてるからだんべよなア。だけど、おいらの亭主は誰が何と云つても吉さんだよ』

と云つたと云ふ事も思ひ出して腹が立つやうな嬉しいやうな妙な氣持ちになつたが結句自

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

分の手にお光がある事は限りない彼には滿足であつた。此の時赤子を妹の脊にくゝしつけて居たお光が

『出かけやうかな、ちツと無理だけど今日はあの田を終やすべいよなア』

『おう』

と答へて吉藏は元氣よく立ち上つた。

綠の毛氈を敷き詰めたやうな稻田の中に二ツの菅笠が睦そうに並んで居た。（をわり）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新らしき生命　——野上彌生子——

　兼子は何處とも知れず身內に異樣な苦しい感覺をおぼえながら、それでもまだうと〳〵してをりました。痛い痛いと呼び出し度いような氣がしてゐても、何が痛いのだか、どう苦しいのだか、自分でも分らぬなりに、又うと〳〵した淺い眠りが續きました。何處か險しい坂見たいなところを汗を流して悶えながら登つてゐるような氣もしてゐました。けれどもだん〳〵薄れて行く眠りの中に、それが腹痛である事が分ると共に兼子は一時に目が覺めて、意識もはつきりになりました。同時に頭の中に閃めいた事は

『いよ〳〵生れるのか知ら。』

と云ふ待ち設けでありました。

『お近いんですから催してからで澤山で御座いますよ。たゞあわてないでね、お車でゆつくりゐらつしやい。』

とかね〳〵さう云つてゐた病院の親しい女醫の言葉も胸にありました。兼子は氣だるく重

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い身體を起して蚊帳の中に座りました。而して暫く自分で自分の身體を檢査するような心持ちでゐました。もう何時だろうと思ひながら次の間まで時計を見に行くのが大儀におもはれました。痛みは時を作つて靜かに來ました。

痢を催したから後架に行つて見ると、凡ての苦惱を散ずるような快い通じが多量にありました。

『矢張りたゞの腹痛だつたのか知ら。』

と思ふと、兼子は寢しなに食べた燒栗の事が思ひ出されました。丁度その夜は近所の氏神の祭典でありましたから、女中のしげに茶番を見せにやつた歸りに一と袋の燒栗を買はせて來て香ばしい風味を悦びながら、いつまでも意地汚なくその木の實を食つてゐたのでありました。

『もしかこの夜中に病院まで出掛けて、たゞ燒栗のせゐだつたら隨分滑稽だわ。』

と兼子は暗い眞夜中の廊下を歸りながら、つい一人で笑はれました。けれども痛みは直ぐとその後から追つかけて來ました。兼子は不安な迷ひの中にぢつと息を詰めたまゝ、その腹痛が單なる痛みか、それとも生みの苦しみの前驅か見定めようといたしました。

一人の男の子の母として、四年前に一度苦しい經驗を味はつた彼女は、その點には十分

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

判別を持つてゐていゝ筈でありましたが、それでも一向たしかな感じが捕へられませんでした。頓て次の部屋の柱時計は一時を打ちました。兼子は思ひきつて書齋に臥せつてゐる良人を起しに行きました。茶の間と座敷の瓦斯にも明るく灯を入れました。

『しげ、しげ、一寸起きてお呉れ。』

と二疊の戸の前に立つて高く呼ぶと、しげもびつくりしたように起き上つて、白い浴衣の寢卷の上に帶を締めました。

『奥さんが病院に行くんだからね、お前は御苦勞だが芳爺へ車を呼びに行つて呉れ。お前もついて行くんだから二臺入るんだ。』

『少し病氣なのだから大急ぎで來るやうにつてね。怖くはないかい。怖かつたら裏の爺やを起して賴んでもいゝよ。』

『いゝえ、大丈夫でございます。』

『提灯をつけておいでよ。』

『はい。』

しげは奥の押入から取り出して來た古い丸提灯を抱えて暗い表へ駈け出しました。兼子はその提灯に火をつける時の蠟くさい匂ひが妙に鼻につきました。座敷に歸つて着換えを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しようとすると、どの着物にも蠟のぢりぢりと焼ける重苦しい匂ひがありました。

『餘程病的になつてゐるんだ。』

と思つて兼子は化粧臺の香水を取つて着物にふりまきました。

『澤山着てゐなくちや車の上が冷えるよ。』

『コートを着て參りますわ。』

良人は緣側の籐倚子を半分疊の上に引つ張つて來て、寢卷のまゝそれに腰かけてをりました。

『僕は明日お午頃に行つて見ることにしよう。』

『えゝ。』

『おちやあちやま。』

獨りで蚊帳の中に取り殘されてゐた友雄が目を覺まして斯う呼びました。

『坊や、起きてゐらつしやい。』

子供は蚊帳をめくつて出でながら、

『まだ夜なの。』

と尋ねて、部屋々々の明るい灯をまぶしそうに見廻しました、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『え〻、まだ夜よ。』

と兼子は優しくその手を取りました。而してお母様は少し御病氣でこれから病院へ行かねばならないから、おとなしくお留守番をしてゐなさい、と云つて聞かせると、たゞ一言、

『うん。』

と云つて承知いたしました。

『お父様と二人だから大丈夫だねえ。』

と良人は彼を膝にとりました。平常の外出によく留守をする習慣はつけてあつても、この場合もし聞きわけのない事を云はれたら、と云ふ氣遣ひは充分兼子の胸にありました。それが斯う素直に出られて、母親は却つてうら悲しい氣分になりました。

頓て門のベルが鳴つてしげは車と共に歸つて來ました。夜中に病氣と聞いたからなのか、芳龜は主人が自分で支度をして一人の曳子と一所に、愼しんだ顏をして來ました。而して

『今晩は。お加減がお惡くてゐらつしやるそうで、御心配でございませう。』

と丁寧な挨拶をいたしました。良人は一寸と返事に困つた樣子で

『何アに。』

と云つたなり默つて玄關に立つてゐました。そこへ急病と思つた兼子がコートを羽織りな

がらさつさと出て來たので、芳龜の主人は不審らしい顔付きをしたまゝ急いで門口の車の方へ參りました。しげは鬼子に手傳はせて後の車に蒲團や行李などを積んで自分はその横に身を縮めて乘りました。

『ぢや靜かにやつてくれ。』

と云つて良人は式臺の上まで下りてゐました。兼子はその右手に並んで見送つてゐる子供を幌の間からすかして見ました。車の動き出した時、

『失敬。』

と叫んで擧げたその小さい手は、暫くの間彼女の目にありました。

森とした眞夜中の通りを過ぎて行くうちに、家の中の種々な氣配りで昂奮してゐた兼子の頭はだん〳〵靜かに醒めて行きました。落ちついた思慮のうちには、痛みの波の、時を刻んで絞りよせるようになつたのも、明らかに陣痛の特長を現はして來た事が分りました。熱い夏の日の明け暮れに、兼子はバランスの失はれたただる重い身體をもてあつかつて、幾度その痛みの來る日を待つたでせう。息苦しいその重荷を取り去つてくれる安らかな產を望んだでせう。けれども初めての時に可なり辛い經驗を味はされた兼子は、生みの苦しみに對して烈しい嫌惡と恐怖を持つてゐる人でありました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『摩耶夫人つて羨やましい方だわ。パンドーラでもイヴでも持つ事の出來なかつた女の祝福をあの方だけが持つたのですものね。』

と云つて、兼子はお產の事を思ふと直ぐこの摩耶夫人の傳說が思ひ出されました。摩耶夫人は春の半ばの頃で、熱帶地の花と樹木と鳥と、あらゆる色彩、あらゆる歌、あらゆる芳香を集めた藍毘尼園をそゞろ歩きしながら、大きな眞紅の花で、天に傘したようになつてゐる樹の下へ足をとめました。而して花の一枝を手折らうとして左手をさし伸ばした時、その腋下から小さい悉多太子が生まれました。——

『お釋迦樣のおつ母さんなんて名譽は入らないわ。たゞそんなお產が羨やましい。』

兼子はこんな事も云つてゐました。それに今度の胎兒には不思議な迷信的の疑懼がつきまとつてゐた爲めに、一層もの怖ろしい不安が絕えませんでした。それには譯のある事でありました。

兼子は去年の秋の末から西洋神話の大部な書物を讀んだり譯したりする事を日課にして暮らしてゐました。その天の際から地の底まで有らゆる新羅萬象を人格化して、絕大の美と力と光明と、恐怖、暗黑、醜惡を作り出した古人の想像力は毎日兼子の頭に强い刺戟を殘した。凡てが極端から極端を象徵化（シンボライズ）した物語だけに美しさも哀れさも、勇ましさも、又

悲しさも、怖わさも物凄さも悉く飛び放れした力を以つて迫りました。丁度兼子の肉體に變化の起りかけた時でありましたから、尚と異常な響きを示しました。取り分け彼女の病的になつた神經をおびやかしたものはその物語に現はれて來る妖怪變化でありました。火焔を吹くキメーラ、ミネルヴァの怒りにふれて黒髮を蛇に變せられたメヂゥサ。女面鳥身のハーピース。毒蛇のハイドラ。全身に百の眼をつけたアルグス、と云ふような怪物はしば〳〵兼子の怖ろしい幻影となりました。それにその頃兼子の机のあたり集めてあつた繪畫や彫刻の書物は、きつとそれ等を題材にした古藝術の寫眞で充されてありましたから、時によると異様な惑亂から、自分の身はそう云ふ變化の群から取り巻かれてゐるような氣さへしました。殊に色んな話の中に出て來る蛇の事を思ふと兼子は毛穴が寒くなりました。

『こんな氣持をしてい丶だろうか。私は畸形の兒を生むかも知れない。』

夜中にふと目覺めて強い胎動を感ずる時などは、よくこんな事を思ひ廻して怖ろしくなりました。

『いけない。いけない。こんな妄想は皆んな拂ひのけなければいけない。』

兼子は美しい神々や女神の上ばかりを思はうとしました。すると矢張りいけませんでした。アポローとダイヤナの双生兒の事が氣になりました。白鳥に扮したヂュピターとレダ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の間に生れたカストルとポルラクスも亦双生兒でありました。

『先生、二人なんぞでしたら前以つて仰しやつてゝ下さいましよ、決して驚きはいたしませんから。』

と兼子は病院の女醫に眞劍な、ヒステリカルな顏をして聞いて見た事さへありました。

けれどもいよ〳〵生みの痛みの初まつた今となつては、却つて日頃に似ぬ安らかな落着きがありました。あれほど氣になつてゐた怖れも疑惧も、凡てが夢のあとのような淡い陰影になりました。それと共にこの痛みの中からは今新らしい生命が現れて來るのだ。エルサレムの厩の中で生れたと同じ生命が出て來るのだ。而してこの世界に一つの生命が加はるのだ。我が兒。自分の肉と自分の血とを分けた我が兒と云ふ小さい人間が生れるのだ――と云ふような事は倒底想像がつきませんでした。凡てが信じられぬ嘘のように思はれました。斯うして深夜車で病院に行くと云ふ事も、何かの病氣で不斷診察を乞ひに行くのと變りのない氣がしてゐました。全くぼうつとした取り留めのない氣分で、兼子は久しく外出せぬうちに取り擴げられた通りの有様などを物珍らしく眺めたりしました。見馴れぬ家並みや淋しい眠つた町の姿に、何處か旅でもしてゐて、夜立ちの車を遠い停車場に駈けてゐるような心地にもなりました。何處かで虫の音のしてるのなども耳に入りました。

門柱から傳はるけたたましい電鈴に驚かされた病院の中には、忽ち深夜の活動が初まりました。四五人の看護婦たちはまだ眠りのくッついてゐるような顔はしてゐながらも、悉く白い服になつて粂子の用をたすためにあちこちしました。女醫も早速起きて來ました。主人のドクトルも手術服になつて顔を出しました。粂子はこの場合そんな人々に取り巻かれてゐる事が何にも増して心丈夫に感じられました。いつもは滑稽に聞きなされる女醫の、種々な用意を命ずるカン走つた高い聲も、却つて威勢よく頼もしく響きました。

『さあ、一寸此方へ。』

と女醫は男のような足どりで手術室の方へ導きました。粂子は顔をしかめながらその後に續きました。明るく開いた戸に近づくと、リゾールの匂ひが幽かに鼻にしみました。

『痛みますか。』

『えゝ。』

粂子は又顔をしかめながら微笑しました。

『まだ、まだ。ずつと間がありますよ、落着いてゆつくりお寐つてゐらつしやい。』

女醫は斯う云つたけれども、もはや痛みはそんな眠りを許すほど手緩いものではなくなりました。其處から自分のと定まつた病室まで歩いて行く廊下でも、粂子は二三度身をす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

くめて立ち留まつたほどでありました。白いベッドの上に横になつてゐても、ぢつとしてはゐられませんでした。兼子はきり／＼歯を喰ひしめました。そこらを片付けてゐた一人の看護婦は、

『お苦うございますか。』

と側に依つて來ました。けれどもその女の腰を押して呉れる手は他愛のない居眠のためにともすればぐつたり動かなくなりました。

『もちつと強く押して――。』

と兼子は幾度も腹立しげに呼びさましました。耐えられぬまで猛烈になつて來る痛みの中に、外に出よう、外に出ようとしてのた打つ狂暴な力の塊りも感じられました。それが火焔の玉のような勢ひを以つて咽喉許を壓する時には、窒息させられるような息苦しさを覺えました。兼子は汗にまみれながら獸のような唸呻き聲を出しました。

いつの間にか看護婦は二人になつて兼子の悶ゆる身體を押しつけてゐました。

『もう何時』

と眼をつぶりながらきくと、

『五時でございます。もう夜が明けました。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と新らしい方の看護婦の聲が響きました。こんな一言の問答を取りやりする間もない程に痛みは後から〳〵と迫まりました。ところへ障子が開いて

『どとです。大分お苦しみのようですね。』

と云つて院長が這入つて來ました。それについて二三人の看護婦が來たかと思ふとまたリゾールの強い匂ひがぷーとしました。廊下からお湯の事か何か命じてゐる女醫のカン高い聲も亦此方へ近づきました。兼子はこんな人々の環現の裡にもう張りも我慢もなく聲をあげて唸呻つたり泣いたりしました。けれども痛みはそれほど猛烈な發作を持ちながら、ぶつり〳〵と棒をぶち切つたような痛み方で、前の痛から後の痛の間に横はる一二秒の間は、爪の先ほどの苦痛も留まらずひつたり休止て了ふ事を兼子は不思議な驚きを以て見出しました。それは煮え沸る熱湯が瞬間に冷水に返るような有様でありました。苦惱と惑亂にばーつとなつた頭は、その度に反動的な明晰な意識を盛し返しました。

『この人の顏は誰かに似てる、誰かに似てる――。』

こんな事を思つて、兼子は兩手ですがりつゐてゐる看護婦の顏をぢつと見入つたりしました。でもその後から直ぐと

『痛い、痛い、痛い――。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と悶絶するような叫びが出ました。

『アンは超人を生まんと云つた。超人でもなんでもこんな苦しい思ひには更えられない。』

こんな事を思ふ余裕もありました。ショオの長い、眼の笑つた肖像畫が見えたりしました。而してよくこんな苦悶の裡にこんな事が思へるものだな、と自分で自分を不思議がつたりました。それと共に又

『痛い、痛い、痛い――。』

とあらん限りの聲をあげて泣き悶えました。

『これが生みの苦しみと云ふものだな、一體どんな樣子をして今自分は寢てゐるのだらう、さぞ見つともない樣だらう。』

こんな事も閃きました。

『痛い、痛い、痛い――。先生どうにかして下さい。』

『もうすぐだから我慢なさいまし。』

『弱くいきんぢやいけません。靜かに落ちついて。』

と女醫と良人の院長の聲が交る〳〵耳に入りました。

『おや、廣目屋の樂隊が通つてる。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

粂子は、號叫して悶え悚いてゐる肉體とは丸で無關係に、こんなのんな氣な意識の走り去る一刹那を感じました。續いて、

『痛い、痛い、痛い――。』

と呼ぶと同時に、粂子の下半身はなまゆるい水に浸されました。看護婦達の俄かに出たり這入つたりするのがよく分りました。頓て小時間の苦悶と惱亂、阿鼻と叫喚との連續の後に、その體內に封じられてゐた、狂暴な大きな力の塊りはやつと外に絞り出されました。

粂子は長い息を吹いて看護婦が口に入れて吳れた吸ひ飮みから、芳しい冷たい藥をひたすらにむさぼり吸ひました。そのうちにも子供の泣き聲のしないのが不審に思はれました。

『泣きませんね、なぜ泣きませんの。』

と粂子ははつきりした聲でききました。人々からは何んの返事もありませんでした。目に見えぬ裾の方ではざわ〳〵した、それでゐて妙に鳴りをひそめたような沈默がありました。暫くしてやつと產聲が聞え出しました。初めは弱く力のない聲であつたのが、だん〳〵勇しい活き〳〵した聲になりました。

『お坊ちやんですよ。』とこの時女醫が初めて聲を出しました。

『どうも大層大きな赤さんだから中々お骨が折れました。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と前の廊下でドクトルの挨拶を受けてゐる相手の聲をきくと、良人の來た事が分りました。

『どうだ。』

と彼は産婦の枕許に這入つて來ました。

『苦しかつたかい。』

『苦しかつたわ。』

兼子は眼をあげて、割合に元氣らしく答えました。苦しかつた、苦しかつた、あれほど苦しかつたものが、今そう聞かれてどれ位ゐ苦しかつたか思つて見ようとすると、凡てが怖ろしい夢の後のようなぼんやりした記憶になつてゐる事が分りました。何處の肉を探してもどの筋肉に尋ねても、僅か十分ほど前の死ぬばかり悶えた惱亂の感じを覺えてゐるものはなさそうでありました。頭から爪の先まで凡ての四肢五體は、食物に飽滿した白痴のように、たゞぐつたりして快い困憊に浸つてゐる計りであります。兼子はよくも斯う忘れ盡されるものだと呆れました。その意味の事を話すと良人は

『そりやそうさ。いつまでそんな苦痛を覺えてゐて堪るものか、二度と子供を生む氣になりやしない。』

と答へました。そんなら彼女は本統に子供を生む積りだつたのだろうか。過去の日の如何

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なる時、如何なる場合、如何なる瞬間をふり返つて見ても兼子はそんな事を自覺的に考へた事は決してありませんでした。兼子はこの意味を良人に語りました。

『併し Life force が生ませようとするのだから仕方がない。そんな意味で凡ての赤ん坊は神の子だよ。』

と云つて笑ひました。

『神の子はいゝわねえ。』

と兼子も笑ひ出しました。そんな話をしてゐると、今自分がそんな大事をくゞり拔けて來た當事者のような氣は少しもありませんでした。矢張り書齋で書物の中の事や人の噂をしてると同じ離れた心持になつてゐました、そこへ前の部屋へ産湯を使ひに連れて行かれてゐた赤ん坊が、華美な友仙のおくるみに包まれて歸つて來ました。

『どうも大した赤さま。も少しで一貫目ございますよ。』

と看護婦からさし出された時、父と母は初めて新らしい我兒を見ました。まつ黒い髪を持つた圓い顔はまつ赤でありました。その看護婦の言葉に依つて、生れた時直ぐ産聲のしなかつたのは、胞衣を首に卷かれて假死狀態に陷つてゐたのだと分りました。生から死へ、死から生へと、數分の間に轉換し來つた小さい、新らたな生命の事が、不思議に、又あ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はれに思ひ廻されました。
『色んな事を考へると何んだかもの怖ろしくなるわ。』
と兼子はぢつと思ひ入つたように申しました。
『さあ、俺はもう歸る。』
頓て良人は斯う云つて披いでゐた羽織を着たりしました。
『余計な考え事はよして暫く馬鹿になつた積りで寢てゐなくちや駄目だよ。』
『えゝ。』
『そうだ。』
と良人は何か思ひついたやうに側にあつた風呂敷をあけました。
『何アに。』
『坊主のお土産さ。』
あゝそうだつたと兼子も思ひました。風呂敷の中からは化粧箱に這入つた西洋菓子と、一組の色鉛筆とノートが出て來ました。よかつたら夕方にも女中と一所に見舞に寄越させるから、その時これを與るがいゝと云つて置いて良人は歸つて行きました。
これは赤ん坊からのお土産としてその兄の友雄へ贈られる筈なのでありました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

友雄にはいつか其の内に小さい赤ん坊が彼の友達として現はれるかも知れない、と云ふ事が知らされてありました。その赤ん坊は天から來る。而してその時、お土產としてお菓子と色鉛筆とノートを屹度持つて來ると堅く約束されてゐたのでありました。

『その赤ん坊が天から何に乘つて來るだらう。』

と云ふ事は友雄の奇拔な空想の的になつてゐました。鶴、孔雀、雁、鳩、雀、彼は自分の知つてゐる翼あるものを數えて見ました。どれかこんな鳥に乘つて來るのだと信じてゐました。

『飛行機でせう。』

ときくと、

『いやだ。飛行機には坊やが乘るんだ。』

と云つて不平らしい顏をしました。

今日夕方、いよ〳〵この新らたな小さい人間を見た時、何處からどうして來たと尋ねられたら、兼子は矢張り天から鶴に乘つてと答えなければなりますまい。嘘を云ふつもりもなければ欺ます積りもないが、今の場合それが一番適當な返事だと思はれました。本統の意味に於て兼子自身にだつて、この事が何處から來たものかは絕對に分らないのですもの。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

――何處より來りて何處へ行くを知らず――

聖書の句だの、それから又『春の目ざめ』の中のウェンドラとそのお母様の對話だの次ぎ〳〵に取り留めのない思ひが頭の中を通り過ぎました。でもそれも一瞬の間で粂子は頓てうと〳〵と眠つて行きました。

（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青 鞜

合 奏

平素から琴の出稽古に行つても其儘直ぐに我家へ歸つた事のない桂子が、今日は不思議にも二三軒の家を廻つて急しげにして歸つて來た。白髪染めに半日を費して仕舞つた母親は次第に深くなつて行く夕暮れに追ひ捲られ、慌たゞしげに勝手許で働いてゐる。

『おや、もう歸つて來たのかい、不斷とは早いぢやないか、何うしたのさ。』

と桂子の白い顔を視上げながら、道草を喰つたり、遊びまわつてゐる平素の事を少しも氣の注かない樣な顔をした。

『だつて己う濟まして來ちやつたんだもの仕樣がないわ。いやあな阿母樣だ。』

コートを脱いだり、外出の足袋を木綿のと穿き替へたりは爲たが、桂子は其お召づくめの派手な衣服を着込んだ儘で目に立つ位ゐ嬉々として二階へ上つたり茶の間の火鉢へ來て中腰になつたりした。

『お汝さん、今から出掛けるんぢやなからうね。阿父さんが歸つて來るといけないから濟

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まないが衣服を着替へたら、些とそこいらを掃いてお呉れな。』

などと母親は怪訝さうに娘の擧動を偸み見ながら此麼口を利いたりした。

言ひわけばかりに桂子は茶の間から狹い廊下を掃き清めると、ついと又此度は店先きへ來て座つた。商賣が商賣だからさう無止みに細かなお客はやつて來ない。硝子戸の嚴めしく列ぶ陳列棚の前の大きな陶器の火鉢の前へ腰を下すと、桂子は慵い春の夕暮れを眺めてゐた。けれども表通は小急しさうだ。終日の營みに疲れて歸る腰辨や何か一つの用を有つてゐる往來の人達ちは、綺麗な桂子の店番姿に只一瞥を送つたゞけでさつさと軒端を過ぎて行く。けれども桂子は熱心に外を見詰めてた。父の歸つて來ない以前に、夕飯の濟まない先きに、早く太田が來て呉れれば此儘直ぐに出掛けて行くんだのに。といやに心は焦慮として、確かに言ひ交して置いた約束の辭までが疑はれ出したりするのである。然し時計を見ればまだ五時だ。六時までに、と言つた筈の男の姿はまだ一時間近く待たなければならない、其內父が歸つて來たら何うしやう始めて訪ねて來る男と一緒の外出を許して呉れるだらうか、然う思ふと今少し早い時刻を言ひ渡して置くのだつたのにと桂子は幾度となく心で悔ゐた。けれども夫れは太田の罪でもなければ自分の迂濶の失策でもない。或る家の演奏會が七時に始まるから。其ついでに何處かを散歩して來やうと何の意味もなく二人は口

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から出任せに約束して仕舞つたのである。夫れから次ぎに廻る家へ行つて、まだ手解きの肩の懲るような稽古をやらせられてゐる間に、太田と約束した事が次第次第に不思議な位な興味を感じ出し、然うした事をする二人が何か別の意味でも秘めながら態とお互に知らずにでもゐたかの如く思ひなされて來て、薄暗い家の茶の間へ這入つた時なぞはまるで戀人を待ちわびるかの樣な氣になつて仕舞つた。夫れがために尺八と合奏して呉れと言つて居た友人の許へも行かず恁うして心を一方に奪られてゐるのである。

桂子は幾度となく時計を見たが、其止み間断れ間もなく押し倚せて來る、不思議な情緒もいつか又疲れて來て、二階の自分の室で何かひとつ調て見度い氣にもなつた。で段ばしごを驅け上ると、次の間から放射する電燈の仄明るい下へ琴を寐かせて爪も穿かせず調子を整へた。ふと下から、客でも來たのか母が呼び立てる聲がする。店の客となると殆自分に相手をさせ樣とするのが惡い癖だ、などと沈着いて好きな『大内山』を彈き出すと不思議にも聲が乘つて來た。桂子は樂器に向うといつも是れだ。次第に我知らず熱心に其緒に噛り付いてゐた。すると、

『お客樣ぢやないか。』

と薄暗がりの階子の中途から覗き込んで母親は急がしげに呼びに來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『おや、然う。』

と少し茫とした心持ちを感じながら急しげに降りて行くと、果して太田が先刻見た時とは違つたみなりをして立つてゐる。母も機嫌よくして迎へたりした。

『まあ隨分お待たせなさいましたわねえ。』

と桂子は馴れ馴れしい口を利いた。

『阿母さん、此方が平田さんのお友人よ、ピアノもなさるし長唄もお上手だし……』

と言はれて太田は母の手前恥しさうに面を紅らめた。茶の室へ請じ入れやうとする母を遮ぎつて桂子は直ぐ二階の自分の室へ案内した。太田は靜かに廊下を曲つて暮れ行く外を眺めたりした。

『佳いお住居ぢやありませんか。』

『太田さんはお世辭が好から然麼事を仰しやるのよ。私、本當に此麼處にゐたかあないのよ。旅行でもしたいと終始思つてるんですもの。』

『旅行は此れからが好いんですね。』

と太田は其若々しげな眼を睜つて、

『來週にでも伊東邊りへ行つて見度いと思つてゐますがね。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

などと直ぐ心持ちを海や空に持つて行つた。桂子は寐かせた樂器を立てかけて縮緬の派手な油單を被せると、そつと鏡の前に立つて見たりした。其處へ母が茶菓と座蒲團を持つて上つて來た。

『太田さん、此方へ來て少し沈着いて話しませうよ。』

『然うですね。』

と音も立てずに室へ入るともてなし氣味に出して呉れる寫眞帖を開いて見た。些(ちよい)とした擧動にも氣取らずに靜肅な處が此太田の男ぶりを一入床しくさせて見せた。乘り氣でもなささうに一枚づゝさつさと繰り開けて見て行く内に衣裳好みな桂子の種々な姿をしたのが挾まれてゐる。

『一枚載いちやいけませんか。』

などと戲れ氣味に語つて見たりした。

『已う行きませうよ。何處かへ廻つてりあ晚くなりませう。』

桂子はおちつかぬ氣味を見せて顏を直しに下りて行つた。

出(だ)し澁(しぶ)る母親を說きつけて上つて行くと太田は不安氣(ふあんげ)に浮かぬ容子をして待つてゐた。

『お宅の都合は好いんでせうね。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『阿母さんなんか何と言つたつて、私些とも構つてゐない事よ。』
と言つた時、父親の歸つた氣配がして次に桂子を呼び立てた。

二

電車を下りると二人は兎も角も池の端の方へと歩いて行つた。何處かへ入らねばならないと二人の心は急ぎ立てられ乍ら何處と言ふ目的もなかつた。而も折角店先きまで行くとつい羞恥が先き立つて俯き加減に通り過ぎて仕舞つたりした。けれども最後に入つた鳥料理と籠行燈の吊るされた家は桂子が先きに立つて入つて仕舞つた。

氣を利かせて通された寂しい位ゐ森閑とした室に向ひ會うと、二人の他の何者かに誘惑でもされた樣な妙な不安が襲つて來たりした。

『おや、已う七時だわ。』

慌う小さい金時計を取り出して見た桂子は媚びの多い訴へる樣な眼を見せたりする。

『何うせ晩いでせうよ。先方の連中と來た日にや夜更しを得意にしてゐるんだから。』

などと好加減な出任かせを言つて引止める樣な事を言つて見た。

『あなたは慶應でしたわねえ。矢張り私の阿兄も慶應に居た事があるのよ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『いゝえ、あなたに阿兄さんがあるんでしたか？』

と太田は其額に皺をよせて問ひつめたりした。今は京都に暮してゐるが自分に性の合はない大嫌ひな兄が一人ゐるときも眞實らしく根もない事を述べ立てた。

『放蕩もすれば、音樂か好きなのよ、今は宗教の方を研究してゐます。』

と自分自からの話に乘り込まれて喋つてゐる間に、母の甥の澄善の身が、いつか眞實の兄でありでもする樣な氣がして來たのである。

『宗教といふと？』

『あら、坊さんぢやありませんか。』

と桂子は笑ひ倒れたりした。

此對ひ相つてゐる桂子の阿兄ならば定めし美しい青坊子であらう。その人があの杳深い蕭條たる京都の東山の麓に籠つて、日夜木魚の音に親しみながら、淨界生活を營んでゐるのかと思ふと、太田は不思議な物語りでもきく樣な氣になつた。

『放縱生活をやつた後の心持ちは、そんなものになるものでせうかね、ぢや今は實に超然としてゐるんでせうね。』

『已うそんな話しは止しませう。あんな嫌な人の事を思つたゞけでも氣分がわるくなる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わ。』

　と桂子は答へにゆき詰ると巧みに話題を取上げて仕舞つたりした。其處へ髮の薄い女中が料理を運び入れて來たので、少時くすると太田は不思議に心をおちつかせて、此女の身に起る事ならすべて知り度い樣な氣になつた。

『ぢやあなたはお宅の後を相續する人でもないのですね。』

『否、父は私にさせる意りよ、だけど私夫れが何うしても嫌なの。』

　恁う言ひながら澄善を還俗させて養子に迎ひ入れやうとする兩親の心持ちは、今茲で夫れを考へたゞけでも涙ぐまれた。今日まで戀を言ひ倚せた幾多の好きな男がある。今より後とても、何麼良緣が自分を待つてゐるか運命の僥倖は推測出來るものではない。從來自分が殆めしたの者にする樣な心の侮辱を與へて來た男に妻として侍しづかれるものか何うか、然うした運命に縛られぬ先きに早く自分の幸福を獲得して仕舞はねばならない。桂子は其瞼を潤ませて何うかして他へ嫁入して終い度いといふ意味を語つた。

　其語だけをきいてゐると、まだ十九だといふ女としては恁うまで前後の分別が付いてゐるものだらうかと太田は寧ろ心で惘れんだ。

　相手の男が品良く無言つて話の折々さも同情する心持ちを現はして頷いて呉れたりする

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のを桂子は又とない機會の樣に思はれて、比較的巧みな誇張と表情とで桂子は敎ひを需める樣な容子を見せて語つた、嫁入先きが何れ位ゐに複雜な家系や家風を持つてゐやうが舅や姑には必ず愛撫(かあいが)れて見せる覺悟だ。だから少くとも自分の氣心に犇と適合した愛情の豐かな男でなければならない、などとつねづねに心描き碎いてゐる樣な事を殘る隅なく曝らけ出して語つて仕舞つた。

　汲み交してはゐるが相手が女だから太田は一人で赤くなつた。

『なかなか女の空想は行き屆いてゐますね。』と太田は自分に語る樣に口を辷らした。手紙にしろ話にしろ只々愛の憧憬にばかり飢え凍えてゐる樣な此れまでの女を相手としてゐた其頭に、ある違つた疑問に行きあたつた樣な氣になつた。

『貴郎なんか何んな女(ひと)と結婚しやうと思つてゐらつしやるの？』

『僕、いゝえ、何も考へた事はありません。』

　と顏色まで變へてゐるのを見ると桂子は其美しい微笑を口元(くちもと)に浮べながら。

『隨分呑氣だわねえ。男の方つてものは、そんな風でせうか。』

『えゝ然うですとも。』と眞面目らしく口を拭ふと。

『男は女と違つてね、結婚以外に志望がありますからね。家庭を作るといふ事は寧ろ第二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ですからね、つまり勉强する方が肝心ですからね。』

『まあ、然んなものでせうか。』

とは言つたが、夫れは然し女の身にも容易に想像の出來る問題だつた。

電燈傘から垂れ下つてゐる氷柱の樣な硝子棒に春の夜の光りはきらきらと反映して、其先端の細かい球は涙が凝結つた雫の樣に光つてゐる。餘りに語りすぎた樣な心持ちで桂子は靜かに天井を見仰ぐと、逆上たのか夫等の光に輕い刺戟と暈眩とを感じて其儘其處へ倒れさうになつた。

『何うかしましたか。ぢや少しお休みなさいよ。』

と太田は悩ましげにしてゐる桂子の凄艶な姿態を見ると思はず其からだに自分の手を借して何うかして見たい氣にもなつた。

『已う彼處へ行き度くなくなつちやつた。』

『あゝ、止しても差支へありません。』

と云つてふと思ひついた樣に。

『平田なんか實にあなたの天才に舌を捲いてゐましたよ。音樂に對しては別な頭腦を有つてゐるんですね。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

などゝ力を籠らせて賞め讃へた。

『だけど偉くなつたつてつまらないわ。』

と差しさうに謙遜すると、桂子は頭痛でもする樣に白い顳顬の處を小指に力を加れて押えながら、誘惑する樣な美しい瞳を見せてゐた。

池の上を渡り過ぎて行く樣な春らしい靜かな風もある夜でいやに媚めかしい感じを與へられた。

三

桂子は午前中に自分の師匠の許を濟ませ、其足で二三の稽古廻りに歩いた。日曜には午前でも午後でも好いといふ事になつてゐるので成可く其れ等を早く濟ませやうとした。師匠が弟子として讓つて吳れた邸方の令孃達は中々靜かに琴を搔き抱く樣な心持ちを有つてゐる人は少ない。けれども桂子は子供の時分可愛がつて吳れた西洋婦人から敎つた少許りなたしなみの爲めに、ピアノなぞに嚙り付く人々の面前で何うか彼うか恥を搔かずに濟ませた。全く桂子の生れ付いたまゝの稀才な指は、殊更ら琴一つに向つて發達して行つた。それは父と母との系累から來た遺傳でもあつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

父は世渡りにかけては、冷酷と殘忍な奥の手を有つてゐるに拘らず、又其趣味にかけては關西人剝き出しの陰氣な因襲的な處があつた。

『私は近來の人みたいに開けてはゐないからな。』と言う父自己の語がよく說明された。東京で生營ひの苦勞を爲し始め、爲し終るまでに、實に二十年の餘にもなる、夫れでも今日なほ生れ付いたその土地の言葉を保守してゐるだけでも男にありがちな剛情な而して魯鈍な性格が現はれてゐた。

で桂子には琴と、三味線は長唄を許して淸本も新内も斷乎として止めてゐる。只々良人と娘の爲めに自分の身を認める樣な母親はいつも二人の隔離のなさすぎる我慢な爭の仲間に立つて困つたものだ。

けれども女に對する節操は固持してゐる人で、妻以外には人に知られる樣な身持ちもしなかつた。夫れだけ家庭の人としては寧ろ小面倒な人で、早く起き出た朝などは夜具の掃き拂ひまで其手で働かせた。

其日も父が沸かして呉れた湯に入浴つて桂子は直ぐ家を飛び出したのである。

最後の家を濟まして出ると桂子は本鄕行きの電車を目がけて乘り込んだ、久し振りでさあちやん小母さんを尋ねるつもりでゐたのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女のためには何よりも中心となる貞操こそ種々の非難の的と風說の種とはなつてゐたが、人としては至極淡白な可懷しい慕はれ易い人だ。自分の家の隣へ未亡人然として寡してゐた頃は桂子の兩親から敬慕と同情とを享けてまるで親類同樣にしてゐたものだ。それがある外國人と浮き名を流してからは俄然として父が倚せ付けなくなつた。ばかりか桂子までも嚴しい警戒をし始めた。けれども桂子は父のめを偸んでは逢つた。弱々しい女らしい嘆願的な態度を持つてゐるさあちやん小母さんはどんな娘もみな惹きつけられたものだ。

桂子は長い電車の中の時間に惱みながら辛じて三丁目で吐き出されると、天神樣まで小走り氣味になつて駈けて行つた。湯島に移轉してから始めて訪ねたのだから桂子は行く人の袖を止めて其番地を聞いたりした。

漸くにして解つた家は表構への蕭洒な如何にも一見でおもひものか、放縱な女の栖居と知れる樣な工合だつた。

『今日は、小母さんわ。』

と勝手の方まで聞える樣な細い透明な聲で呼ぶと、小婢の見知らぬ顏が障子越しに現はれた。

『さあちやん小母さんは。』

と再びきくと、奥からは慌しい氣配がして

『あら桂ちやんなの。好いからお上りなさいよ。隨分しばらくね。』

と寢てゞもゐたのか亂れ髮を掻き上げたり襟を掻き合せたりしながらつかつか上り込む桂子を茶の間へ入れた。そこは清楚りと片付いてゐて火鉢にも幽かに火の粉が光つてゐた。

『おや、お湯も冷めちやつてるぢやないか。』

などゝ舌打しながら小婢を叱り付けてゐた。桂子は自宅を出かけに持つて出た地味な半襟を布久沙に包んだまゝ其處へ置くと、訪ねて來たくとも足場が惡くなつたのだ、例の父が喧しくて自由に外出が叶はないからだのと多少は嘘も混みながら長々と其辯解を述べたてた。

『あたしもよ。』

と小母さんは火を移した煙管を口のわきへ辷らせて、小聲で桂子の耳へ近來厄介になつてゐる旦那が今日來てゐる事を告げた。

『まるで自宅へ歸らないんでせう。』

と美しい眉根を倚せて煩げな樣子を現はすと、拔けた胸を小寒げに掻き合せる。よく見

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ると帶も締めてゐないやうだ。けれども其廣い袖口から剝き出しに見える眞白な太い腕や柔かさうな胸元などを見ると桂子は其美しさに惹き入れられる樣な氣になつた。小母さんは少し中音の聲になつて、何時かも桂子の家の表を通つて逢ひ度い樣な見たい樣な心持ちに迫められ、幾度び勝手口へ廻つて覗き込んだか知れない。など丶哀れげにさも温かさうな心持ちを巧な口吻りで語られて見ると、桂子はつい心から涙ぐまれた。

『そんなに思つて下すつて、小母さん忘れない事よ。』

と桂子はそつと赤い袖口で瞼を押へた。

『だつてさ、此處に一人ぼつちなんだもの、お汝さんの樣な妹でもあれば好いと何度に思ふか知れやしないわよ。本當よ。おとこといふものはね、心底から打開けて話しの出來るものぢやないからね。』

と小聲になつたり、優しい眼元に微笑を漾せたり、小母さんの語は一句一句人を惹き入れる力が籠つてゐた。で桂子は例の巧みな虛飾澤山の辭を用ひて太田と戀仲に沈入つて了つた事や、相手の男が廿三といふけれども何處か沈着いた老け氣味な意思の强固な男らしい男だとか、一目見ただけでも大抵な女ならまゐつて仕舞ふ事などと、何處一つ落ちめのない程一つ一つ並べ立てた。小母さんの眼にも、それが何ういふ相手で何れ位ゐ桂子に打

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

込んで來てゐるといふ事が其ことばに依つて大凡そ描き見る事が出來た。

『ぢや何だね、表面に誰人か一人媒介して吳れたら好いんだね。』

と小母さんも叶はぬと知りつゝもつい乘り氣にならずにはゐられなかつた。けれども桂子の次の言葉は夫れを不結果ならしめるに充分な事情を告げた。それは母の甥のあの澄善がいよいよ養子として乘り込むがために近々還俗して京都からやつて來るといふ事である。

『矢張りそうなんだね。』

と小母さんも失望せずにはゐられなかつた。又それはかりか不可能と知りつゝ次第に陷つて行く若い二人の無鐵砲が今更らながら憫れまれもした。

話が妙な處で挫折すると小母さんは自身の生活も何の興味もない事や、故鄕に殘してある老母のために、身に重すぎる程の金を送らねばならぬため、此麼みじめな醜劣な境涯に我慢をしてゐるとか、今厄介になつてゐる旦那はあまりに萬事が稠密すぎて、此放縱な自分とは折衝が出來ない。夫ればかりか、家内が四十九だといふのに二つになるかならぬの初兒があつて、其人の嫉妬だけでも今に何麼騷動が持ち出されるやも知れないなどと、桂子の曾て目擊した事もない樣な空恐ろしい身の上話を次の室の枕に通はぬ程の小聲で泌々と涙さへ浮べて物語る。總ての事を輕く受け流てし仕舞う淡白な小母さんが、今日位ゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

沁々と身に窮迫する悲しみを披瀝した事は殆ないと云つて好い位ゐだつた。桂子は他人事であり乍らどんなにか眼を潤ませ小さい心を慄はせてゐた。

けれども二人は然う何時までも語つてはゐられなかつた。午後に廻る稽古もあり、其他三四人の友人から申し込まれてゐる合奏の時刻も迫つて來た。で桂子は出された笹飴を僅かに摘んだ儘で晝の御馳走をするからといふ小母さんの聲もきゝ流した儘で家を出た。其歸り際に格子の處から白い顔を突き出しながらそこまで深くなつた人なら、自分にも可懐しい、此度旦那のゐない日を知らせるから、二人で悠々遊びに來たらよからうなどと、小母さんは諄々として繰り返した。

外へ出ると、嬉しさと哀れさとに已う其紛糾し易い頭は屑綵の樣に亂れ合つた。何が何だか而して自分の爲すべき事も分別が付かない。儚ない小母さんのかこち言は、ふと自分の未來の運命の片影を暗示したものでゞもあるかの樣に、桂子の怯え易い心を戰はせた。

此麼時には一入太田のあの溫かい軀が戀ひ慕はれた。男らしい靜かな而して健やかに發達した心持ちに、面と對ふと泣き訴へてゐる暇に不思議な安愉と悅樂が油の湧く樣にして其悲しみをかきさらつて行くのがつねだつた。あゝ又今日も太田に逢ひ度い、と桂子は火の付く樣な戀で心に煽てられて三田行の電車に乘ると其儘乘り替切符も取らずに濟ませ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。で須田町に來ても桂子は白紡の絹肩掛に顋を埋めて折々怨しい小母さんの言葉を思ひ出しては心で泣いた。
太田の下宿は塾の眞下の四國町のある小淸楚りとした家だつた。

四

澄善との緣談を折があれば兩親から突つ込れるとか、二人の間を一日でも早く絡めて欲しいとか數がぎりなく訴へ泣き告げでもしなければならぬ話しは其小さい心にあまる位い充滿してゐる。けれども甞て澄善は賓の阿兄だとも云ひ慶應にゐた事もあるとか根もない出任せを言つた爲、今更らそれが養子になる男だと訂正しても太田は輕くあしらつて、皮肉に笑つてばかりゐた。
『だつて少し位ゐな嘘なら好いでせう。』
と泣き混りの笑顔で拗ねられると男はつい其手に乘つた。
『何うかしますよ。本來ならあなたにそんな心配をさせる筈がないんだ。』
などと太田は何處までも桂子の苦痛が其小さい心にありあまる程の事に思つた。然しさう輕佻に受け合ひはしたものゝ、まだ故鄕の母親の意志も糺問しなければならない、夫れ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に卒業期までにはかなり半季足らずの日數がある。父の遺産を賴りに卒業後も容易に實世間へは手を出さずとづつと此永遠的な志望を遂行して行かうとするには、社會に出るからといふ口實もない者がさうさう早まつて結婚して仕舞うわけにも行かない。夫れに故郷にはあり餘る位い女の系類がある。自分に娶せるには格好な娘もあるに違いない、母の因襲的な胸中には何んな企圖があるか明からぬそれやこれやで迂濶に相談しても遣れなといふ思ふと太田は母に對する責任と羞恥とで心の塞がるのを覺えた。

話が他道へ外れると又引戻し、繰り返したり潜々涙を流したりして桂子は容易な事で歸らうとはしなかつた。

けれども朝出たきりで晝餉も外してゐる事を思ひ出すと桂子は惹き止められる樣な心を殘しながら思ひ斷つて七時近くに下宿を出た。

夕闇は寂しい春の軒端を襲ふ樣に迫つて來て白晝の反動の寒さは柔かい肌身を撫でまわした。銀座行きの電車を撰んで乘ると、俄かに兩親の驚いて訊ね捜してゐる姿や、あの小さい母親の眼が愚痴つぽい父の影に慓えてゐたりして、描けば描くほど心は取りかへしならぬ失策の前にゐすくんだ。

逢つての後は今少し早く別れたらばと思ひ歸つて仕舞うと戀しさに涙の流れるのが戀す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る心のつねだ。不圖桂子はあの小母さんの樣に一生失戀の傷手に泣き浸りながら次第に恐ろしい墮落へ陷つて行くんぢやあまいかと常に思つた事もない不安に脅かされたりした。

我家へ歸ると安心と怨恨とで氣の狂ひ出しさうな母親の形相がまづ其心を奪つて仕舞つた。次ぎにはかの怖ろしい眼であつた。けれども可憐らしい而して餅例の巧みな嘘の多い辯解は、いつか兩親の怒りも和げた。

『本當に、身體が疲れて、お終には病氣になるよ。』

と慈悲と不安で身の措き場もない樣な母親は此麼事を言つて取つて置いた餅菓子やチョコレイトを出して來た。

『久濶だから阿父樣に何かきかせて呉れ。』

父も終に恁麼崩れた顏を見せた。で少し疲れを忍びながら二階から抱き下して來ると改まつて爪を嵌めた。勢よく掻き鳴らす調子が父や母の眼には日每月每上達して行く樣に思はれた。

『此間俺は好え處で已う心に直然りと叶うた品質を見て置いた。あれなら家の寶にもならうと云うもんや、是非とも其內に手に入れんならん。お汝さい確乎として呉れたら何時で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も買うてやる。』

と一曲が濟むと父は此麼事を妻と娘の前で言ひ出した。あらゆる苦勞の下で生まれた金の總てが此只一人の娘に、其好きな樂器のために消されても憾む處でなかつた。然して其氣に入つたと云ふ琴はむかし祖母が京都の高貴の方の御邸へ奉公してゐた頃、其夫人の寶物の一つとして保存されてゐる平家時代の琴があつた。其模寫だと言つて三月雛に飾り供へる樣な小形の玩具を貰つて來た。夫れは十六菊が一面に散り亂れてゐて、見るから清涼殿の宴の席へ抱き据えられてゐたもの丶樣な俤が殘つてゐた。其玩具は祖母が靈柩に入れた位ゐ後生大事の愛藏物だつた。今自分が尾張町のある大きな古物商の店頭で見付けた品は全く其記憶に彷彿としてゐる。亡母のためにも自分の愛玩のためにも第一手に入れ度い品だ、と例の靜寂な趣味を愛する眼を瞬つて父は獨りで悦に入つた。けれども妻も娘も次第に其心に唆かされて、其夜の夢に見るほど悦び騷ぎたてた。

『夫れでは明日でも價格の交渉をつけて見やう。』

と我と我心に誘惑されて店頭を納入に立つ際まで其事を言續けた。

桂子も兩親に挨拶して自分の室へ上つて行くと一日着通してゐた琉球對の上下を脫いで衣桁にかけた。すると其處へ母親が細長い封筒の手紙を持つて上つて來ると、無言で机の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上へ置てをりて行く。父に秘密の人から倚來したのかと思つて驚いてそれを取あげると。あの見るさへ嫌な澄善の音信だ。けれども何が書いてあるかを知らねばならない、桂子は心で唾棄しながら封を開いた。するといつもの定り文句として、兩親に孝行をせばならないの、琴は上達したであらうとか、自分も昨今あの「椿づくし」と始めかけてゐるとか、近頃は寶生流にも手を出して來たとか、殆どその藝自慢が並べられてあるのにすぎない、而して最後に東上する日の差し迫るのを何より唯一の愉樂(たのしみ)にしてゐる。同居した上からは何卒平和にお互の目的を傷けない樣にしなければならないとか認められてある。其何等の潤も新味もない手紙は此の慘ない戀に狂う身には何のひゞきも與へない。

五

結婚する考へなのか戯れの意りなのか太田とは逢ふ毎に桂子は疑はれて行つた。けれども自分の稽古を濟ませると弟子廻り(でしまはり)の方は隔日が二日置き三日置きになつて行つても太田の下宿へは殆毎日通つて行つた。

次第に卒業の支度に追ひ責められ乍らも太田は一日でも避けやうとはせず柔馴(おさな)しく下宿の一室に待つてゐた。濃密な感情と不安な刺戟とで精力はひどく消耗するにも拘らず太田

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はなくてはならぬものゝ様に桂子を待つた。時としては湯島天神わきの小母さんの家へ揃つて出掛けた事もある。二人で帝劇のマーチネを見に行つたり池の端のある家の二階へ伴はれて其處では小母さんが先きに歸つて行つたりした。

　次第に春は晩けて行つて、都會は花で狂うが如く陽氣だつた。澄善からの音信は殆三日置きに桂子の机に投げ込れた。東京の花だよりを見る毎に彼は靜寂な東都の隱遁生活には一日と雖も停まる勇氣はないらしい。又桂子の父からも結婚は第二として商賣の情勢を一日も早く覺え込んで貰うが爲めにでも、東上を促すという風な手紙が頻りに飛んで行つた。其父の開いてゐる樟腦販賣は、非常に多方面な特意て持つて居て時としては自身で出張しなければならぬ事がある。然し本店は別にあるので、若し澄善が入り込むとすると、差しづめ小賣り向の我家の店だけを彼に一任する考へでゐるのだつた。

　けれども澄善も小寺ながら後繼住職の定らぬ內は輕卒に勝手な行動を取る事も能きず殆二日以上も整理に費してゐた。けれども愈々其日はやつて來た。

　結婚は二年三年の後でも構はないと云う三つ兒を欺す様な父と母との言葉に吊り込まれて、桂子も其日の迫つて來るのを流石に好奇心半分で待つてゐた。

　而して兒供時分にした遊戯の様にあらゆる方法で苛め拔いて思ふ儘の殘忍な目に遇は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

してやれば其內、彼は彼自身から逃避して行くだらうと云ふ考へも桂子の其おさない心にあつた。

電報が着くと母は鮨を拵へたり平素使用しない茶の間の次の間を掃除したりして賑かな幸福が一つでも增えた樣に喜々としてゐる。桂子は其日も自分の師匠の許で悠然りと稽古を濟ますと又三田の太田の下宿へ廻つて仕舞つた。

成可く晚く歸つて行つて、兩親の不平と澄善の失望とを深くしてやらうと思つて腰を据えてはゐたが、自分にも不思議な好奇心はまざ〳〵と澄善の取澄ました面影が現はれて來て、遂々彼の女は歸り仕度を始めた。

意地の惡い皮肉な表情を粧ひながら、桂子は勝手口から足音を偸む樣にして這入つて行つた。茶の間を覗くと母親は一人ぽつねんとして火鉢に凭れて父の姿も澄善の來た容子も見えなかつた。

『阿母さん。只今。』

『おやお歸りなさい。大層遲かつたね、相變らずだが。』

と午後三時を指し示してゐる時計を見仰ぎながら、母親は立上つて戸棚から書餉の料理

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を持ち運んで來た。

『御飯なら好いのよ。だけど阿母さん、阿父さんは。』

『え。お父さんは澄三郎とお湯に行つてるのよ。』

『おやさう。』

桂子は呆れ乍らよく其邊を見ると、成程澄善の澄三郎が持ち物らしい旅行用の化粧箱なんかゞ置いてあつた。

『おや、此麼洒落れたものを持つてゐるのよあの男は。』

と言うと母親は其後に尾けて、

『何うして、夫れ處ぢやない、悉り人が異つた様になつてね、贅澤な衣服なんか澤山持つて來てゐるよ。何うも京都人も馬鹿に出來ないね、寺に引こもつてゐたといふ人があんなだからね。』

『何うせ坊さんの衣服だもの。好いものがありやう筈がないや。趣味の低いあの男が何うして流行なんか知つてゐるものですか。』

と桂子は頭から慍つて見せた。

『だからさ、一度室の押入に這入つてゐる鞄を出して見て御覽よ。まだ本當の荷物はあと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から來るんだと言つてゐるがね。』

と母親の嬉々しい調子はなほ更ら桂子を焦だたしめた。

『なんだつてあんな男の鞄なんか開ける必要があるのです?嫌な事だ。私しは決してあの男の用事はしないから。』

と言つて桂子は已う瞼を潤して仕舞た。

『おや、氣を惡くしちや不可ないよ。私しや決して用事をしろと云つたんぢやない。佳い衣服を持つてゐるからおもしろいから些と見て來て御覽と言つただけだよ。氣におしでない。』

と和らかく出られて桂子はついと立上るとさつさと二階へ上つて仕舞つた。其心には遣り處のない怨恨やら悲愁やらが紛糾した。而して湯から歸つて來た澄善に向つて何ういふ侮辱を與へてやらうと思つたりした。

衣服も着更へずに茫然として机に凭れて考へてゐると、ふと其琴の傍に立派な袋に包まれたマンドリンがあるのに氣がついた。手に取つて見るとそれは澄善が持つて來た樂器に違ひない、まだ稍新らしい縮緬の袋だ。桂子はつい興味に唆かされて其紐を解くと中を開けて拔き出した。成程可なり高價に拂つたものらしかつた。けれど態々是れを自分の室に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

据えて行つた馴れ馴れしい彼の態度が巳う其肌にぞつとする程嫌だつた。

軈て父と今一人の男の聲がして俄かに階下は賑になつた。

『お歸りになつたよ。下りて入しやい。』

と言ふ聲もした。と思ふとみしみし階子を上つて來る氣配がするので桂子は恐ろしい跫音でもきゝつける如く胸を騒がせ乍ら其方をふり返つ

『やあ。』

徒う言ふ聲をかけながら澄善は其細い姿を現はした。成程、母の言つた通り六七年見ぬ間に悉り容子が變つてゐた。髪も短かいが伸してゐれば金歯の嵌つた美しい前歯を見せて笑顔する處なぞは女の樣に愛嬌があつた。琉球絣の對を着て、綺麗な高貴織の羽織なんか引被けてゐる處は何う見ても若い商人風だ。

『お互に大きくなりましたね。』

と發音の關西調を少しながらまるで飲んでかかる樣な口を利いた。

けれども其内に何處となく可懐しい謙遜とお世辭とを含んでゐるし、又男らしい威權もあるので桂子も知らぬ間に心の締まるのを覺えた、

『巳う東京にづつとゐる氣になつてゐるんですね。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と桂子は眸を避けてさつさと威張つた口を利いた。

『えゝ。ゐるんですとも。桂ちやんが置いて下すつたら。』

などと附け加へた、桂子は其口を態と重々しくして、幾度び惹き入れられさうな眼を避けたらう。けれども澄善の容子は何處までも隔離を取りながらさも淡白な何げない態度を取つてゐる。夕餉には四人が食卓を圍んだ。あとの三人は一人の澄善を中心にして談しを取交した。澄善の長い京都の生活は其處を故郷に有つた母や父の心の奥にかき消てる樣な思ひ出をあばきたてた。

其關西調の緩やかな辷る樣な發音を出して澄善は頻りに面白い土地の話しを聞せた。其中には彼自身の追懷や經歷やらが挾まれてある。桂子は父や母から抑々斷片的にきいてゐた澄善の身の上談しは態うして本人の口からきく程興味がなかつた。

今の寺を小寺ながら非常に富裕な檀家を有つてゐて、それに只一人の衣食は寺男(てらをとこ)のを語を加へてもありあまつてゐた。彼は夫れで法會の間々を種々遊戲に消費してゐた。他の多くの住職が遊廓に忍んだり、素人娘との密會に浮身を窶してゐる間に澄善は琴や謠曲、時としては洋樂家の懇意な一人に馴染んでゐたためピアノなぞも弄んだりした。

春は小鳥の樹の繁に訪れて囀づる他には木魚しか響かぬ森閑たる寺院の奥の一室を閉ぢ締

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

締めて、澄善は白衣の上から紫紺の羽二重の被布なぞをきて琴を彈いたり、點茶をたてたりした。

施我鬼から得る收入は其衣服道樂と貯蓄に投げ込んでも優に樂器を購ふだけの餘裕があつた。けれども其花やかな青春の、日陰の樣に消えて行く衝動の怨恨は何うかして早く還俗し度いとばかり焦せつてゐた。桂子の父から養子にと言ひ込まれた時は思ひ計らぬ僥倖で身が慄えた、などと夫れは母ばかりに打明けてゐた。

六

一日三日と經つ度に桂子は次第に快よく寧ろ自分から需めて澄善と對ひ會つた。太田へは稀に訪れても一時間と腰を据えてゐなかつた。何か知ら待たれる樣な心持ちに唆かされては急いで家へ歸つて來た。美しい男の澄善は、戀も心もかきさらつて仕舞つてもなほあまりある大きな玩具だつた。父も始めの事だと思つて二人を大目に見て店の用事もあまりに言ひつけやうとはしない。二人は夫れを好い事にして二階の一室で琴を挾んで向ひ合つた。生田流の澄三郎と、山田流の桂子とは何うかすると互に相手をはじき合つたがけれども澄三郎が他の笛とかオルガンなぞを持つ時は、興が乘つて吻とする處まで續けて行つた。

晩春の寐惚けた樣な光線の射し入る二階の室で桂子は其日も正午から引續きに澄三郎を相手にして居た。澄三郎の琴の彈調（ひきかた）は音は強いが平坦な穩かな階調で、行き詰りもせず輕くやつて退ける樣な處があつた。其處へ行くと桂子の氣分の儘に搔き鳴すやり口（くち）はまるで音譜を無視して、時とすると相手の間拍子まで狂はせた、甲（かん）の處へ來ると勝手に手を加へて、まるで息の吐絕える程纖細な技巧をつけたりした。

『何うも叶はない。』

此麼事を言つて途中から澄三郎は膝を外した。

『ぢや私の三味線と合奏（あは）さないこと？』

と言つて彼の女は久しく手にしなかつた黃色い袋を脫がせて輕く其膝に抱き上げた。

『是れあ優勢だ。笛が入ると越後獅子も佳いものだが。』

などと澄三郎は品の良い撫肩（なでかた）を波だたせて悅んだりした。

『おい、おい、巳う好加減にしないか。』

と父親は珍しく苦い顏をして上つて來た。

二人は呆氣にとられて思はず眼を覗合つた。

『白晝中にそんな事を男がしてゐるものやない。店のお客に對してでも間がわるい。是

れからは夜店を閉めてからする事にしたらよからう。』

と言はれて澄三郎は桂子の眼にも半ば可笑い位ゐいぢらしくして父の後に尾いて悄々と降りて行つた。桂子の方では又、そういふ事のあつた時は必ず其復讐を母の方へ持つて行つた。直ぐあて付けに泣き聲を立てゝ我儘をふるまつたりする。

『けれどお汝、澄三郎は店が急しいから招んだのだからね、お汝のお相手にばかり使つてゐちや澄三郎は些とも店の用事が出來ないぢやないか。』

『だから私は何處か友人の處へ行つて來るわ、一人ぼつちぢや技が上達りやしない。』

などと言つては當てこすりに何處となく出掛けて行つた。

けれど邸方の稽古廻は頻りに電話なぞで呼びに來られても、何と思はれても行く氣にはならなかつた、只々強烈な合奏の刺戟が欲しいばかりだつた。

太田の下宿へも三日目に一度五日目に一度と云ふ風に忘れてゐた人を夢心地に見るやうな調子で茫やりと訪ねて行つた。次前の樣に留守ならば待つて行くといふ風な心にもなれなかつた。又我儘になれた男は、そうされながらわざと無語で辛抱して待つてゐて呉れた。

けれども妙に其日は興が乘つた。電車を降り　と小走りになつて心を急がせた。すると太田は留守だが湯に行つたのだから間もなく歸る筈だ。他にお客があるが構はいだらうと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新参の慣れぬ女中が取次いで來た。客とは誰人だらうと思ひ乍らづんづん這入て行くと、硝子越に黒の紋付姿の女の横顔が見えた。はつとして桂子は勢よく夫れを開けると、先方でも思はず此方を振り返つた。其顔を見合すなり桂子はつねづねがきいてる故郷の母だといふ事が疑ふ餘地もなく直覺された。

『何方樣ですか。まあ此方へおすゝみ遊ばせ。』

と品の良い小さな丸髷の頭を俯かせ愼ましやかに出られると桂子は腋下から汗を流して縮まつた。太田に用事ときいて母親は坐蒲團を薦めたり、お土産らしい立派な干菓子出したりした。桂子は慄えながら折々夫を偸み見ると、太田にそつくりな顔の輪廓やら人懷こい眼の愛嬌を有つてゐたりする。

母親も大方それを知つてかさも隔なく談しかけたり、まだ挨拶をしないが太田の母で、自分はあまり進まなかつたのに、あまりに人々から唆かされて春の東京を見物のために東上したのだとか、信州なまりの靜かな語で物語つてきかせる。何と言つて話を交したものか分らず桂子は只々小さくなつて慄んでゐた。すると其處へ太田はまだ湯氣の立つ樣な濡れた髮を光らせて這入つて來ると、其場の事件に思はず心を驚かせた。而も心措きなく母親の歡待しゐるのを見ると彼は取濟してもゐられなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あゝ桂ちやんでしたか、是れは僕の母です。昨日訪ねて來て呉れましてね。』

『今其お話しを伺ひました。』

『お汝がゐないから御挨拶のしやうがなくつてね。』

なあに、よう御座んすよ、僕のよく伺う家のお孃樣です、非常な箏の名珠といふ評判を有つてゐらしやるんですよ。だからよく合奏を願つたりしてね。』

『夫れは何より。』

此ゝ言つて母は又改めて挨拶をしたりした。太田はすべてを瞞着する手段なのか、頻りに他愛のない冗談を言つたり、笑はせたりしてよく喋つた。けれどもあまりに長くゐる時でもないと思つたので、桂子はそこそこにして歸り支度をした。』

『ぢや玆で失禮を致します。お汝さん玄關までお送り申上て…………』

と云はれて太田は仕方なく立上つた。

『些とも來て呉れませんね。』

太田は廊下の曲り角で些と其指先きで背の中央（まんなか）を突いて見たりした。

『だつて多忙しいもの。』

『好い人が出來たんでせう。僕はよく知つてゐる。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ぢや湯島のさあちやん小母さんの處へ行つたのね、其處できいて來たのでせう。』

『何うだか知らない。毎日お樂しみな事でせう。』

未だ何か言ひ交したいと思つたが女中も見れば他の下宿人も其處を通る。二人は素氣なく別れなければならなかつた。

外へ出ると桂子の氣分は又亂れた。此儘で久しぶりに湯島まで訪ねやうと思つては見たが、それも妙な臆劫を覺えた。夫ればかりか近來は外へ出るといやに澄三郎の何げない些とした印象がつき絡つて、そんなもので心に描いてゐる內にいつの間にか歸途の電車の中で尾張町までの乘り替切符を切らせてゐる。

太田との結婚はうまうまと自分が一杯欺かれた樣な形ちにはなるが、今となるとそれも襲はれた夢の醒めぎわの樣に、却つて輕い安心が現はれたりする。此まま味もない替りに大して男の苦勞をもせずに何となく湯氣に包みさめられてゐるかの樣な愉樂に浸つてゐられゝば、他に求めるものゝないやうな、極めて女らしい柔かな氣持でゐる事ができるかのやうに思はれた。

夫れだからか今の心の有樣はあの澄三郎を捨てた儘で結婚して仕舞う樣な勇氣は何處から見ても見現はせない。あの兩親の前に唯々諾々として自分の相手をする他はまるで小僧

のするやうな仕事まで言ひつけられても心の反抗一つ見せやうとしない素直な男を思ふと、熱い涙さへ催された。夫ればかりか今日まで長い間子供心の因襲で彼を獣の様に憎くんだりあらゆる企みさへした事が次第次第に悔ゐられて泣いて謝罪でも仕兼ねない様な心にさへなつた。況て今日の父の冷酷な言葉の下に顔を赤くして悄々降りて行つた容子を見ると、桂子は意地づくでも澄三郎に權威が有せたいやうな氣がされた。

熱して行くのは桂子の矯められない生れつきだ。次第に彼の女は自分のあらゆるものを投げ出してまで澄三郎を庇つて遣る事に逡巡しない決心を自分の心に強ゐたりした。よく考へると太田と陥つた事の一つまでもあの澄三郎のために最大の凌辱を與へたやうなものだつた。自分が眞實、澄三郎を思ふのなら、今日かぎりあの太田とは絶交しなければ自分の心のあかしがたゝない様な氣にもなつた。

家に歸ると丁度兩親が夕餉をやらうとする處だつたが澄三郎の姿は見ゐなかかつた。夫れを母にきくと、店の用事で京橋まで使ひに行つたのだといふ。

是れ迄にも彼はよく商用で各方へ歩いて行つた。注文を取つて來る筈の處で的が外れる事もあつたり、思はず時間を費したりする事もあるといふ話し、それは彼の地理の不案内から來るのだらうと思ふのに、中々父は然う考へなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『京都と違うて遊ぶ處は多いからな。それをひとつひとつ見てあるいてゐたらやりきれたきのやない。』

恁う皮肉を浴せかけると澄三郎は昔の其師匠に遇つた樣な調子で手を支へなりした。小意氣な姿をしながら、何處か氣の利かない不活潑な擧動が次第に父の眼についた。

其日も夜に入つて茶話で倚り集つた時、父は澄三郎の紺博多帶の腰付を眺めてゐると、

『お汝は木綿の衣服がないのかい。家にゐる間は斷じて絹物は廢める事にして貰へんかな。』

是には本人も苦笑した。而して夫れをきつかけに自分が東上當時の辛慘な商賣振り、小僧も措かずに細かく溢く、而して堅實に玆まで爲し遂げた事を、酒の力で諄々として說き出した。父の眼に映つた處では澄三郎の性格は迚も辛辣な商賣の人ではない、隨て是が他人なら自分の生涯の身血を注ぎ込んだ此店をさう容易で讓るわけのものでないが、と口に出さぬばかりの容子を仄見めかした。

『まあまあ辛抱して下さいよ。是れから先はまして肝心の店だからね。お汝さんに取つちや。だからまあ一苦勞やる氣でね。』

と詮方なく母は其間に入つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『阿父さんの樣に小面倒な事を言つたつて、慣れないうちは駄目よ。衣服だつてさうだわ、澄さんには木綿が似合はないから此れで好ぢやありませんか。』

此桂子の調子破れの挨拶には父を始めみな笑つて仕舞ずにはゐられなかつた。

七

斷じて太田には遇ふまいと定めてから三日四日經つて後だ。女の聲で電話がかゝつた。出て見るとそれは太田で、池の端の例の家へ湯島の小母さんと一緒に來てゐる。都合がよければ直ぐ駈けて來て貰ひ度い、非常事件に逢遇して二人は今凝議してゐる最中だなどと脅かしつけた。桂子は其騒ぎ易い胸を戰はせて俥で駈けて行つた。

なあに、それは太田の巧妙な策略だつた。

母が故鄕に歸る時に、太田の話を一部始終きいてから又となない良緣の樣でもあり。而も其處まで關係のついた上は萬事此方の責任だ。表面の仲介者を容れなければならないなどと諄々と云ひ含められ、今は已う母の許可の下に二人は安心して逢ふ事が出來る、などと太田は打つて變つて此度は反對に桂子に迫つて來た。母の心には思慮もあつたが、夫れでは桂子をむざ〳〵と欺いた事となる。他人の娘を傷つけて其儘見すごすわけのものでない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

限り早く事を運ばせたい、恁うさも心を急がせて行つたとか…………。

『今そんな事を持ち出したつて駄目よ。』

と桂子は意外な結果に寧ろ恐怖に慄え乍ら眞蒼になつて伏し沈んだ。

『桂ちやん、お汝さん、そりあ意氣地がないにも程があるよ。いつかあんなに一緒になり度いと云つてゐたんぢやないか。今更ら躊躇する事があるものかよ。』

小母さんは横合ひから此麼口を容れて同じ樣に攻めたてた。

『だつて阿父さんが頑固で承知する筈がないから。』

『さあ、夫れあ最初から解つた事さ。何をお汝さん言つてるの。あんなにお汝さん剛情ばつて、まさかの時は出奔しても好いなんかと言つてゐてさ。』

『だつて今となつちや夫れあ無理よ。』

恁う言ふ内に、桂子は其勝手極まる太田の遣り草が恨まれて來て、何もかも掻き破つてまで泣き悶えてやり度い樣な氣になつて行つた。

けれども太田の言ふ事も條理が立つてゐた。母がまさか許すまいと思つた事が何等の否定もなくさもきれいに理解して呉れて、寧ろ祝福して呉れた位だ。其の意外な結果に自分は狂喜する程に思つたが、然し近來あきたらない桂子の容子は今一度確めて置く必要があ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて却つて母の急き立てるのを制止して置いた位だ。眞際に迫る試驗を控へてゐながら此の不安な迷雲に心を閉されて終日何が手につかう、今日も思ひ立つて湯島へ驅けつけ二人で手詰めの談判でもするつもりで桂子を呼び寄せたのだと、まるで今日が吉凶の最後のやうに彼は其大きな全身に力を込めて說いて行つた。

此場合の男の調子は合意でなくつて脅迫のやうだつた。ひとつひとつ涙をふり落しながら桂子は恨まずにはゐられなかつた。

逆上せつめた時の後先き見ずに誓(ちか)つた夢のやうな語を眞向に振り翳して、まるですぎ去つた隔世のやうな問題をつきつけられても、桂子は其前に戰えるばかりだつた。

次第に濃い涙に咽び入つて桂子は小母さんの氣をきかせに持たせて與れる箸も取らず、折々其眼を上げて男の顏を睨めつけたりした。

『泣いてゐるばかりぢや僕には分らない。結婚する氣がなくなつたのなら明斷(きつぱり)さう言つて下さいよ。』

怎う太田は太田で不思議な相手の容子に何う解釋して好か分らず、好みもしない酒ばかり飲みほした。而して益々蒼くなつた。

『まあまあ、よう御座んすよ。女は氣が小さいものだからね。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小母さんは一人で困つた。

此儘進んで行けば太田は憤つて撲り付けもしかねない様に小母さんには直覺れる。かと思ふと彼は自分を嘲る様な口吻になつて、

『嫌だと明斷り言つて貰つた方が僕には解り易くつて好い。其宣告を受けたからつて僕は失望する權能を最初から有つてゐない筈なんだ。要するに女は相手までも玩弄する事を無意識にやつてゐたんだ。』

想う言うなり彼は其顏を赤くしたり蒼くしたりした。其險惡な氣分が又少時く續いた。自分にも解らぬ位に剛情な涙がたて續けに流れ出ては止まぬ。桂子は次第に冷たく固くなつて行つた。

『ぢや今晩は此儘で元々通りにしときませうよ。ね、然して桂ちやんは家へ歸つて今一度考へなほして御覽なさい。ね、さうなさい。太田さん好いでせう。』

想う言はれて桂子は辛じて涙の中から頷いて見せた。呆氣に取られた樣な太田を頻りに撫だめすかせて小母さんは桂子を歸らせやうとした。此氣の毒な若い男心はあとで何うとも自分がしやう、それよりは移り易い女心をしづめる方が此場合のためだ、と小母さんは思ひつゝけた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『一度自分一人で考へて見ると又思ひ直すものですからね。其方が確り(しっか)してよう御座んす。』

と言つて小母さんは俥を言ひつけたり、送つて出たりした。

桂子はまるで虎口を逃れる様な言ひ知れない感謝で小母さんに詫言(わびごと)をつゞけながら冷たい夜氣の迫る外へ出た。

『よくお考へよ。男一人を死なせるなあ餘程大きな問題だからね。』

小母さんは俥の梶棒の持ち上るまま耳元にささやいた。

俥に救はれた様にして其處を離れたが、已う輕い眩暈が其頭に上つて來た。

只々恐ろしい一幕が下された様な氣持で何を思ひ何を考へるひまもかつた。而していやが上にも感情ばかりは暴君の様に頭の中を亂れ狂つた。

何と言つたつて心の變り目に移る男の姿は、只々醜劣で而して脅迫的だ。是ういふ事件がありとも知らず夜の合奏を樂しみに終日働きまわつてゐるあのいぢらしい澄三郎が、ああ、今晩も桂子の歸りを待つてゐる。桂子は幾度俥の中で昏倒しやうとしたが、秘密な其俥を降り捨てるまでは、萬事自分でゐなければならないと齒を喰ひ縮めた。

けれども其翌日も翌日も桂子は二階で一人戰えてゐた。電話がかゝると留守を使はせた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

而して惡夢に襲はれてゐる樣に小さい唸り聲を出して仰向けに寐轉がつて悶えたりした。

思つたつて、考へたつて、其小さい理智と剛情な感情とは何うする事も出來なかつた。而して四五日も經つと多く俥で師匠へ通つた。而して小面倒な新作ものに沒頭して一意に其れへ心を集めやうと考へた。演奏會に誘はれると救助舟に逢つた樣な調子で勇んでそれに出席しては滿場の喝采を一身に集めてゐた。

久しく行かなかつた帝劇へ友人を誘つたりしては、只々怖ろしい運命を一瞬間でも忘れやうと努力した。あらゆる刺戟に浸つてあの怖ろしい太田の印象を全然心からかき消さうと、つとめてばかりゐたのである。

其心には澄三郎の他の男といふ男はみなある獰猛な執着がある樣に思へて元來から好きな男の交際も需めて拒避して歩いた。太田の有つてゐる匂の一部分が、何ういふ男の身軀にも何處か仄かに隱くれて匂つてゝもゐるかのやうにおもひなされた。

「澄さん、あなた踊はやらなかつたのね。」

恁麼事を不意に彼の女は口走つては其いとど放縱になりまさる感情をみつめた。音樂の他になほ此心の歡樂を悦び歌ふ別な表現がありさうなものだ、と彼女は透徹するやうな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

發達した直覺で何等の理解もなく、踊なんかに憧憬したりした。

而して夜になると澄三郎との合奏で身も心も沒入して行つた。

慈うして次第に太田の幻影を忘れきる樣な日に向つた頃は、已う世の中は初夏だつた。ま青な光りが樹の繁る街道にも、家の中にも流れて來てゐた。(完)

――一篇の醜作ながら忘れられない高子さんにさし上ます――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

紅き木の芽 —川田よし—

送別會といつても、極家族的な、同僚十人許りの會合で、炬燵を圍んでの宴會であつた。武井を除いては大方下戸なので、僅の酒にもうほんのりした眼付をして居るのであつた。禁酒家の鳥羽は、さつさと蒼白い顔を引き上げて、温泉に行つた。

今夜の主人公の美佐代は、名殘がつきぬといふ風をして、河瀨と話をはづませてゐる。過去三年間の追憶が追憶へと、つゞくのであらう。

芳江は愼しく兩手をくみながら、武井と島田との若々しい口調に、聞き惚れてゐた。

『此頃の若いものにやかなわないよ。ノラだのクラだのつて騒いで居たかと思ふと、いつの間にかお引き上げして、此度は、ギギーとか何とか云つてるぢやないか。ハ……一體ギギーつて何のことだね。』

武井は何を考へ出してか、急に眞面目な顔をして、

『ギギー？ それなら芳江さんがよく知つて居ります。』

芳江が島田の聲に瞳を上げた時、引きつけねばやまぬといふ、强い强い眼付を知つた。そして眼を背らした時、妙な身内の震えを感じるのであつた。

引き上げた時は、彼れ此れ十一時近くになつた。星がぽつとして、なつかしい彌生の空である。大丈夫だらうと思つてゐたのに、島田の步みは、しどろもどろに、ひどく亂れてゐた。路地迄來ると、考へごとをしてゆく芳江に追いついて、酒くさい息に云つた。

『芳江さん。肩をかしてくれないか。』

手をかけ樣とした時、駈けつけた武井は、

『笑談をいふな。さあ俺の肩をかしてやる。』

といゝながら、いたわつてやつた。

小さな溫泉町の溫氣を脫けると、廣い芝原道につゞく。遠く街の灯が、華々しく一樣に爛いた。そして上氣した人達の面ばせに、心よい風がさあつと流れて、島田も『もう大丈夫』といつて、武井を離れた。

大方は、美佐代をとりまいて、繰り返し繰り返し、いふのであつた。

『でもおめでたい。旦那樣のところへ行くのだからね。』

『若い時はいゝな、美佐代さんが實際美しいよ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

男にとりまかれて、美佐代は返事に窮してゐた。しかしプライドは、暗い瞳に充分漲つてゐた。

芳江は、もう何とも云へぬ寂しい氣分につゝまれてしまつた。

島田の意味あり氣な樣子を、思ふともなく思ひつゞけるのであつた。また美佐代が結婚して、大學在學中の夫と同棲すべく、上京するといふことも、家付きの娘として、日頃晴れやらぬ胸に、羨ましくも寂しくも亂れるのであつた。笑ひさゞめく人達の殿(しんがり)をしながら、涯しなく思ひつゞけて首垂れてゐた。

夢心地に見る町の赤い燈は、何かの暗示を運ぶやうに、たよりなく、さみしいように思はれ出して來た。

何うして、滅入るほどの寂しさに、どんどん流れて行くのであらう。

『あゝ』と我にもあらず溜息をして、面を上げた時、間近に島田が歩いてゐたので、ぎよつとした。

島田は、急しくなる呼吸を耐へるらしいけはひに、芳江によりそつた。よりそつて左の手を、しつかり握りしめた。——ありたけをこめた力に。と同時に熱い唇はその頰に觸れた。

彼女は息つまる程の動悸に惱された。足は、力なくよろめいたのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

性に目覺めた肉體は、微妙な戰慄を體中に送つた。全ての實在は空、只熱い唇と、手に殘された男の力とが、生々しく彼女の全部となつた。

彼女は、始めて男のにほひを知つたのである。異性の力を知つたのである。そして唇も――。

『大變おくれましたね。』

と美佐代に聲を掛けられた時も、まだ物が言はれぬ程の鼓動であつた。もし月かげがあつたなら、どんなに彼女の面は蒼白かつたのであらう。

宿の門を入つた彼女は、漸く籠を逃れて小禽の自由にほつとした。けれどそれは一瞬間時の焔に過ぎなかつた。

この心、この體、その全てには如何しても拭ひ切れぬ異性の香が染み込んでゐる。執念く染み込んでゐるのだと思ふと、衷心したやうに恐怖に打たれて倒れた。涙が止め度もなく、疊の上にぽと〳〵と流れた。とみ子――從妹――の寢返りに我に返つた時は、怖しいほどの靜寂の氣が身邊を周つてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昨夜の星の下――と思ふだけでも、もう彼女は、わく／＼するのであつた。何も手につかない妙な心持に浸つて、炬燵によつてぢつと考へ込んでゐる。しかし、『何を考へてゐるの？』と聞かれても、彼女はおそらく返事に窮したであらう。

不圖何に驚いたか、霑れた瞳をきつと向けて、伺ふらしい樣子をした。

『まあ、何でもないんだわ、矢張氣の故。』

彼女は、從妹を無理に一日早めて歸省させたことが、心苦しくなつて來た。昨夜のために、ひどく衰へた心を見られるのが苦しいし、ぢつと考へ込みたい心持をかき亂されるのが怖しかつたので、あまり氣の進まないとみ子に、强いて用事を持たせて歸したのである。

とみ子の笑顏が眼に浮く つゞいて父の顏、母の聲、――しかし、それは熱湯に解ける氷程に、間もなく消えてしまつた。そして矢張島田のことを考へてゐた。昨夜の別れ際に、『女だけれど我黨の士ですよ。』と無邪氣に呵呵と笑ひながらも、深い想を込めて武井に誇りがに云つた島田の張りのある聲は、明瞭に耳底に印象されてゐる。

恐怖となつかしさと不安さにたぢ／＼しながら、其心を解剖する程に彼女は世づれては居なかつた。一人娘として、大事に大事に育てられた彼女は、初めて知つた異性にほんの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りと眼を暑ませて、只五里霧中を彷徨するに過ぎなかつた。

一度こんなことがあつた。それは芳江が女學校を卒業した時である、乳兄弟になる人が、『芳江さんのところでも、大變養子を心配してゐる。僕にも話があつたが。芳江さんは僕の妻になつてくれる氣はないかしらん。』

煮え切らぬひとだと、日頃物足りなく思つてゐた彼女には、あまりの意外であつた。異性に對する憎惡が一時にぐつとさしせまつて、握られた手を振り離して、がた〳〵震えながら階子を下りた。男が一心に訖を云つてるのも、殆ど耳には入らなかつた。かうして彼女は異性に對する墻壁を高くしてゐたのであつた。

『お酒に全てを忘れておしまひなされてのことだもの。』

と自分に辯解して見ても、それは決して絕對の安心を齎してはくれなかつた。昨夜の所業を、はしたない氣まぐれとして打ち消すとしては、彼女はあまりに弱味が多かつた。

やりどころない想ひに亂されて、琴を取り出した。埃及模樣の袋を疊みながら、また彼女はぶる〳〵と强い肉體の戰慄に侵された。

琴爪をはめやうとして落した眼さへ、異性の風味に慄えた。調子はなか〳〵合はない。シヤーンと爪を合せる。

シャーン　ルレ　シャーンシャーンシャーン

『矢張いけない。どうしたんだらう。』

でも、どうとかまはずに歌迄つけて見た。

しほ——の——や——あ——あ——ま

聲は心の戰きをそのまゝに震える。靜に暮れゆく離れ舍の空氣は、もの淋しい波動を起す。永い合の手がすんだとき、投げ出された樣な疲勞に、ほつとして爪をとつた。數分時前迄もつれもつれてゐた心の波は、漸く平穩に歸つた。

『芳江さん。　芳江さん。』

彼女の瞳は輝いて恐怖の色を漲らせた。慄く足にどう障子に寄つたか、開けたが殆ど夢中であつた。

島田は彼女に隣つて炬燵に倚つた。

『琴を聞いたよ。よほどむづかしいのが出來るね。』

心の慄ひを見せまいとするパスであつた。

彼女は小やつ口からそつと乳の下に手を忍ばせて、動悸を押へてゐた。よほどしてからいつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『おひとの悪ふございますこと。よほどいらつしやいましたの？』
諾く島田の瞳とはつと合つた。闇夜の眞赤い花火のやうに。ともに眼を下した。怖しい沈默が來た。女の呼吸と男の香と、――

……………………………………………………………

『綾子さんかと思ひましたの。』
『綾子さんが來るの？』
『二人で久田先生をお訪ねして行かうと思ひますの、丁度美佐代さんもいらつしやるんですからお送りしながら。』
『僕も逢つていゝ？』
『えゝ』
約束の時間がせまつても綾子は見えない。
『どうしたたらう？』
『さうね、五時半といふんですものまだ少し時間がありますよ。』
置時計を見ながら芳江は幽に云つた。また沈默が押しよせて來た。電燈の線が赤くなつたので、そつと彼女は目を上げたが、直ぐ頭垂れてしまつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『僕がほんとに惡かつた。許してくれ。』

と暫く經つて云つた男の聲には、强い力と寂寞とがあつた。彼女は今更のやうに島田に出された手紙を取つた。しかし讀む勇氣はなかつた。どうしてよいか意識は朦朧としてしまつた。そして故ない涙がしとしとと心へ流れ落ちるのであつた。

『芳江さん見て下さい。ほんとに眞面目に見て下さい。』

一度讀んだ彼女は、何も解らなかつた。同行を幾度か繰返してゐた。三度讀み返した彼女は、逼り來る寂しさに、音を忍んで泣きくづれた。其意味を了解したのでもない。何物かに苦しめられてゐるのである。

『許してくれますか。』

男はやさしく彼女の肩に手をかけたけれど、彼女はそれを拒みはしなかつた。

『許してくれますか。芳江さん。』

肩を搖られて彼女は反射的に諾いた。男は狂ほしく引きよせて唇に觸れた。しと〳〵と流れる涙と、息ざしの烈しい女の呼吸とに男の眼鏡は曇つてしまつた。

夢から覺めたやうに、茫然と力ない眼を電燈に上げた時は、男の歸つてから程經てゞあ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。六時五分前であつた。左の手に力一杯に握り占められてある手紙を、不思議さうに讀み出した。

芳江の君

昔ではたゞ一人の同僚であつたが、今はそんな簡單な考へで接することが出來なくなつた。僕がわるかつたのだ。僕がつまらぬことをしたからだ。どうか勘忍してくれ。

僕自身では神聖な心意である。さりとて心の深い叫びは消えない。近頃僕の意識の全部を支配してゐるものは、親愛なる汝が靈である。僕は自身で作つた罪として、その煩悶は甘じてゐるが、君が萬一同じ涙にむせぶとしては申わけない。弱き女の心として、更らに弱からしめたとあつては、君をして更に寂寞の情を增さしむる所以である。如何にして慰むべきぞ。僕は最近に進化した心的活動に對して、反省せずには居られぬ。反省して新らしい生命と、清い泉とを求めねばなるまい。しかし、まだどう思つても純潔である。清廉である。けそど現實の世に隱れねばなるまい。壓迫と束縛とを感じる。僕がかう考案した時、止むなく筆をとらしめたのである。

僕は自ら湧いた戀(敢て云ふ戀と)に對して、自識しないやうなものではない。そして明識した時、心の血潮を汝が心中に傳へ得ぬやうな弱き心でもない。燃ゆる焔を悉く見せ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て、お互に自覺ある態度で進みたいと思ふ。獨でたゞ考へたり、迷つたりしてゐて解決が出來るとすればよいかもしれぬ。しかし、そんなに冷かに腦裡に動いてゐない。芳江の君　お互に熱烈の情を宿しても、靜平の狀態でありたいではないか。行く末如何に發展され、改造されるかは追窮する必要は現在はなからう。

遂に心中を披瀝して、汝が心に訴ふことになつた。要するに此處で斷然思ひ切らうとしても、毎日顏を逢はせればそれは不可能である。たとへ戀でも、また戀でなくともお互に自ら覺悟して、常道を行きたい。虛心平氣で行きたいとの一念である。僕は常識を逸して、汝を捕へんとする程の愚でもないから、決して君に迷惑の及ぶ行爲は制してゐるつもりである。

今日君の所へ行くのである。この機會を得て我が口から話せればよい。話せぬ（人が居て）とあつては、後々の心殘りであるから、出かける前にこれを書いた。

條理の立たぬ不可解のところがあるかもしれぬ、急いで書いて情がむら／＼してゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なほ最後にいふ。男女の人格の交通—どんなに簡單なものでも——は、戀を離れて超越し難いことであるとの信念が、確になつた樣に思ふ。所詮は泣かねばなるまいが、君を泣かせたくはない。

S生

芳江樣

尼僧生活——それは彼女のファンタヂーであつた。親の手に甘かされ、教師間には讃め稱へられて育つた彼女は、いつか大きい虚榮と我儘との奴となつてゐた。「糠三合持てば養子に行くな。」といふ俚諺も默して耳に藏してゐた。勢ひ尼僧生活を夢みないでは居られぬ境地である。N(乳兄弟)に對しての憎惡はやがて全ての異性に對しての憎惡であつたのに、島田との經過は意外であつた。比較的理解してはくれる一人として殊に兄弟の愛に飢えてゐる女のやさしさとして、兄に對する心持と、妹らしき態度になづいたのは、爭はれぬ事實ではあつたが。

手紙の中に「戀」といふ字を見出した時、どんなに怖しさと不安とに戰慄したであらう。し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かし妙なことには、島田との關係については、考へれば考へる程、泥濘に踏み込んだ足の様に、一歩一歩深くなるのを覺える。

『離れられない、離れられない。』

と胸に云つた。離れての寂寞は、現在の芳江には、とても堪へられぬ思であつた。

『姉のところに急用があつたものですから。』

『ほんとにお待ちしましたわ。』

と云ひながら、ひどく亂れてゐる前髪を梳し上げて椽に芳江は立つた。

『時間は大丈夫でせう。』

綾子はしめやかに、薔薇の紅い木の芽を折つた。

停車場には、見送の人で隨分の賑はひであつた。美佐代は縮緬の小紋の裾を長く着て、ハンカチに涙を拭き拭きして挨拶をしてゐる入場切符の人達の中に交つて、芳江は綾子に續いて改札口を出た。美佐代を待ち受けて、乘車しやうとした時、間近に島田の居るのに瞳が吸はれるやうに止つた。幽にものを云はせた。二等客車は、女の客三人を乘せるとバタント扉を閉めた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美佐代は上氣した頰を抑へてクッションに寄ると、またハンケチを取り出して別離の涙にくれた。遅れた馳けつけた方々の奥さん方が窓によつたので、綾子は靜に美佐代を呼んだ。一言云ふのにも、もう咽喉が塞つてはらはらするのを、誰も誰もあはれ深いものに思つた。

芳江は一人離れて光りをさけて窓によつた。直ぐ向ふの柱に身を委せてゐる島田の眼鏡はたよりなく光つてゐる。

高原の夜氣に餘韻を響かせて、もの悲しく汽笛がなつた。見送人の瞳は一樣に美佐代に集つた。

『では御機嫌やう。』

『美佐代さん、お大事に。』

女の聲は多く霑んでゐた。

美佐代は今更のやうに歔欷した。歔欷ながらも、つきぬ名殘は寸時でもなつかしい人達の面影を見守りたいといふ風に、顏を外に出した。

其時芳江と島田とは、強い瞳の輝きに、無量の心を語つてゐた。

（一九一四、二、六夜）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蝙蝠

——濱野雪——

振返ると仲店あたりの空は、恰度赤テルでも燃したやうに、何處かしめつぽい空氣の中に、ぼうと炎を滲ませてゐた。人いきれに火照つた頬を池から吹く風が撫でると、すつかり忘れてゐた底冷えが、亦脇あけから足袋の裏にまで忍びこむ。あわてゝ下駄をかたかたとやると、一寸法師のような影がおどけて踊つた。氣がつくと、二十日餘りの眞白な月が、まん上に凍つてついてゐた。

『さむい？』

『えゝ寒いわ。ねえさんは？』

『あたしも』

でも姉さんの唇は、こんな夜にもくつきりと赤かつた。銀杏返しの淺黄のちんころがけにつけた鈴が、物言ふ毎に可愛く鳴つて、摘みの蝶のモールの髭が、髪の中に慄えてる。其頃はやつた紫いろの羽衣ショールにくるまつた撫肩に、羽子板の包み紙がさら／＼と囁

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いてゐた。

眼がしらがかすかに痛む。しびれたやうな爪先きへ、かさ〳〵になつた落葉がじやれかかる。遠い遠い處で火の番の拍子木がなる。もの〻半町とも隔つてゐない仲店の年の市のどよめきは、追駈けるように背後に迫つて、眼を上げるヾ六區の灯の街も、つい眉に映つてまぶしいほどだのに、ほんの一瞬間だつたけれど、突放されたような心細さに、私は思はず姉さんの袂にすがつた。ひいやりとする黃八丈の手觸り、ふりむいた姉さんの眼は笑つてた。

濃く、うすく、墨をこぼしたような人影が一固りづ〻になつて、しつきりなしに動いて行く。玉乘りのあたりから、活惚れのお囃子賑かに流れてゐた。

姉さんの『い〻とこ』は、樂しんでゐた玉乘りではなくて、そのお隣りの娘芝居であつた。けろりとした私の頰をつ〻き乍ら、姉さんは聲を立て〻笑ふ。せか〳〵したせいと、又人ごみにはいつたせいで、しつとりと汗ばんだきれいな面を見上げ乍ら、『そうを』とだけ答へた。そして、初めて見る物珍らしさに、『お半』の羽子板をそをつと膝へおろして、吉野紙でこさへた濃色の櫻の吊枝が、少し汚れてうつむいてる、小さな舞臺の上をながめた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

狂言はいつか新富町でも見た玄治店であつた。けれど、淺黃幕が下りて居て、火鉢の他はなんにも道具らしい物のない舞臺が、いかにも見すぼらしくて、與三の白い胸のあたりが、蒼味さして寒さうだつた。私はお富の泣濡れたような霑ひのある眼や、朱羅宇の長煙管を眺めてゐた。多左衛門をした役者はお富よかも小さかつた。みんな鬘が重さうで、その鬘には何故かわざ〳〵襦子が冠せてある。幕が引けないのでみんなぞろ〳〵引込むと、黑衣を着た肥つた人が、後ろを見せて木を拍つた。安をした人の細そりした頰が、どうかするとぴく〳〵と動いて、そのたんびに蒼黑い蝙蝠が羽叩きでもしさうなのが、妙に私の心に殘つた。掠れたようなひくい調子も、却つて深い餘韻を與へた。すつぼりと頭からきものを引被つた時、胴裏の褪めた紅絹がちらと覗いて、踵のあたりがしなやかに細かつた。

細いあゆみを辿つて裏手へ出ると、ラムネや駄菓子を賣る店があつて、袖無しを着たお婆さんが、安火を抱えて圓くなつてゐた。其處から左へ折れて蔴の葉模樣ののれんをくゞると、樂屋へ上る階子が在つて、その裾に、五つ位の女の子が腰かけて、ちやん〳〵ぼいづきの先きをしつけ糸で結へてた。ぺしやんこのお煙草盆に結つて、紺足袋をはいてる。此方を見るとにつこりした。姉さんが何か囁くと又につこりして、とんとんと階子を上つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て行く。たしかつうちやんとか云つた。

『あの子も役者?』と、私はそうと聞いた。そして、自分の方が三つも上なのにと思ふと自分が恥かしくなつて、その時も大切に持つてた五色の羽子の、青いとこを指でこすつたら、むくろじの金箔がぼろ〳〵とこぼれた。私は少しあかくなつた。

とんさんと階子が鳴る。ふと振仰ぐと、何處からか忍ぶようにさすうすら明りの中に、青味を帯んだ瀧縞の廣袖と、少し汚れた緋ぢりめんのしごきが、暗い陰翳(かげ)をひいて浮いて出た。突掛けた二枚草履がけだるげな音を立てゝ、素足に朱の鼻緒がだるんでる。

『おつちやん?』

姿の聲だ。とんとんと下りきつたその人は、ふところ手にあごを埋めて、羽目板にすとんと凭れた。羽二重もそのまゝな額へ、ほつれ髪がねばりついて、淺くほゝゑんだ頰の蝙蝠が、脂ぎつて小氣味惡く光つてる。私は姉さんの小蔭から唯まじ〳〵と眺めた。

並ぶと姉さんの眉が其人の耳朶あたりにある。黑い和らかさうな髮の毛から覗いてるその耳朶は、紅さしたように色づいて、髱下地ががつくりとなつてゐた。

『あのねえ、ちいちやん。お約束のもの』

斯う言つた姉さんは一寸私の方を見て、そして抱えてた羽子板の一枚をさし出した。但

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

み紙をとるとその人は頬をすりつけるようにして眼をつぶつていたゞく眞似をした。姉さんも笑ふ。その人も笑ふ。笑ふと口尻がちよいと凹つて、糸切歯のほの見えるのが莫迦になつかしかつた。二人はぴつたりよりそふて羽子板を見双べてる。襦子の髪をくゝつた紫縮緬の鉢卷と、黒地に雪の松を大きく散らした袖とがかつきり浮いてゐて、松の葉は生々しく青かつた。吉右衛門の松王である。私は息もつまりさうだつた市の騒ぎを思起した。そして、自分のもそつとあけて見た。前髪をいはへた鹿子、欒玉模様の振袖、眞白な頸をくるむ半襟、何處も彼處も燃立つ緋に、目覺むるような華かさを、飽かずうれしい胸に抱いて、しやがんだまゝ柄のびろうどをそつと撫でてゐた。

二人はよりそふたまゝひそ〳〵と語り合ふてゐる。松王の袖の雪が黄八丈にわんわりと包まれて、凛とした眼と眉が折々覗く。近ちやんといふ其人は、肩を落して組んだ両の袖にいとしげに抱きしめてゐた。

お囃子裏で二丁を打つ。のれんの右のひらきがあくと、白粉と香油の香がむせぶように流れてきて、朝霧のようにたちこめた湯氣の中から、湯をはねかす音だの、輕い笑聲だのが氣持よくあふれでる。湯上りのしどけない姿のままで、足の指の爪をとる人もあつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おぼろに霞んだ鏡の面から、結んだ露がほろ〳〵と落ちる。鉢前の葉蘭の下に萬両がぽつちりと紅かつた。

『今晩は』

辨慶の茶がかつたどてらを内から摘みあげた、肌のきれいな人が鼻唄で通りかかつて、濡れ手拭で近ちやんの頰を叩いて『わあい』と囃した。高すぎる程の恰好のいい鼻、睫毛の濃いい妖艶な眼許に、與三をした人だとすぐ知つた。

『岡燒筋かい、野暮め』

近ちやんは姉さんの頸へ腕を絡むと、反身になつてとんと足拍子を踏んだ。姉さんは頰にさつと紅を刷いて、笑ひたさうな眼尻に睨んだ。

『お紋ちやんがよろしくつて』

『おや、はゝかりさま』

むつちりした足首を見せて、また鼻唄で二階へ、うすら明りに頸おしろいが銀のようだつた。

『おつちやんに妹があつたの？』と、近ちやんは自分の足の上へ私のを重ねて體をゆさぶる。妙にくすぐつたいのを我慢して、私は固くなつてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『さうぢやないの。その子はね、親類の子なんだけど妹にしてるの』

姉さんは鬢をかき乍ら『ね』といふ。私はうなづいてじつと近ちやんの面を見上げた。下唇に櫻の花片のような筋がかつきりとはいつてる。肉のうすい鼻筋が素直に通つて、眉根に近くほくろが一つぽつりとあつて、細いきれの長い目が情深げに霑つてた。能く物を言ふ眼だ。水色した白眼が更にしつとりと優しみを添へる。けれど寂しい面だ。底の底の方に寂しさを包んでるような表情が、いつそ忘られぬ印象を與へる。

『さう』とうつむいて私の指と指とを絡む。暫くして『あたしには姉さんも妹もない』としんみりと言ふ。

『あたしにも』

『だから?』

二人はひたと眼を合せた。

『男兄弟なんてない方がさつぱりしてるわねえ』と、暫らくするとうつちやるように近ちやんが言つた。姉さんはだまつて強くうなづく。私は意地わるな宗ちやんを考へて、一人つ子の自分の方が幸福なのかしらと思つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

次ぎの幕には近ちやんは出なんだ。姉さんと私は恰度チョボのうしろに當る、その部屋の長火鉢の傍で、蝕んだ古い藝題づけを見ながら、辻占豆を食べてゐた。座頭の與三になつた久さんと近ちやんだけは、狹いながらも部屋を持つてる。緣喜棚の隅から初卯の繭玉が下つてゝ、簞笥の上にはガラス箱に入つた男人形が、熨斗目のきものを着て立つてる。其前に御祝儀袋が重ねてあつて、淺田飴の罐がお皿の上にのつてゐた。紅筆だの、さまざまな刷毛だの、ごたごたに並んでる鏡臺は、古いけれど朱塗で、裏梅と祇園守が散らしてあつた。唄三味線のかゝつてる下に、ぬぎすてた部屋着が草色の裾を見せて、白粉の染んだ黑襟を此方へしんなり浪を打つてる。壁にはつた江戸繪に交つて『金五圓也　梅昇さんに』『金三圓也　梅昇孃に』などゝ大きく書いたのが、赤い『のし』に飾られて眼についた。

衣裝部屋では、頭痛膏をやけにはつたお婆さんが、鎧のおどしを綴くつてる。紺の日傘を持つた粋なお内儀が、牡丹くづしにかけた水色ちりめんを見せて、ぐいと褄をはしよつて上手の方へ下りてゆく。舞臺からは賑かな騷ぎ唄が聞える。私は眼蓋がたるくなつて、小ちやな欠伸をした。でも『ねむくなつた?』と姉さんに覗かれては『うゝん』とにつこりして首を振つた。ふと忍ぶやうな笑聲に其方を見ると、大部屋の一隅に四五人固つたのが、座布團に、さらしをしいてお花を引いてた。火鉢の上へ押冠さるやうにして、低いいびきを

立てゝてる人は、縞の羽織に紺の前垂れの町人妻で、髷の上には畳んだ手拭さへ上せてゐた。

障子がすーつとあく。湯上りの近ちやんが手拭を啣へて、ちと逆上せた額髪を濡らして這入つてきた。

『笊を持つてかうかと思つた…………てえな面をしてさ』と賑かに笑つた。

『氣がしけますかね』と姉さんも笑ふ。鏡にかけた手拭から細く湯氣が上る。近ちやんは大切の雙面(ふたおもて)の法界坊の面をこしらへる。牡丹刷毛が辷るやうに動いて、見る見る中に羽子板の押繪のやうなきれいな娘が出來た。眉根と眼尻へ細く紅をさして、合せ鏡をするとそのまゝにつこりして、うすく腕へ流した白粉をすりこみ乍ら、火鉢のむかうへとんと座つて、『先づ一吹といふとこだけど』と言ふ

『さういへば花ちやんは吸ふわねえ』

『あゝ。あの人はおませだもの』

『お近さまは?』

『そちも知りやるとほり』

火鉢の上へ六つ手が並ぶ。近ちやんのは白くて細い。姉さんのも白いけれど圓い。私の

はくるくると赤かつた。

『さうさう。あの光ちやんねえ、一昨日だつたかしら來てよ』

『へえ?』と、姉さんの眼は輝いた。

『そしてどうして?』

『どうしてつて』

近ちやんは頬杖をついて灰に字を書く。『光』と言ふ字が五つ並んだ。

『――恰度千本の御殿が切れる時だつたの。あたしがね、狐忠信で宙乘りになる時にひよいと二階を見ると、左りつ手の薄暗い所に光ちやんがさ、斯う人の蔭になるようにして、じつとあたしを見詰めてるぢやないの。あたしは吃驚したわほんとに。だつてねえ――』

合方の新内らしいしんみりした節廻しが、遠い處からのように漂ふてくる。私は姉さんの膝に凭れて、ぼかしになつた羽子を一つづゝ前歯で嚙んで、さくらばねにしてた。

『それから?』

『――ひよいと見た時にあわてゝ横をむいちやつたの。あたしは涙がこぼれたよ。それでねえ、幕になると直ぐ金どんに呼びに行つて貰つたけど、もうその時には見えなかつたつ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て。あたしはなんだか泣けてしようがなかつた』

『わざとらしくほほゑんだけれど、伏せた睫毛はうるんで見えた。

『…………』

『花ちやんなんかはそれを聞いて、二人とも莫迦だつて笑つたけどね、だつて笑つてすまされる事だらうか、ねえ、これが。あたしはあの時もさ、あの人の叔母さんて人が、お前さんの爲に大枚五圓てお金を盗まれたつて怒鳴りこんだ時にさ、そりやあ腹も立つたわ。口惜しくて〳〵唇を嚙切つた位だけど、だけど襟髮を引擦られるようにして、眼をつぶつて慄えてる光ちやんを見ると、涙が込上げてなんにも言へなんだ。人一倍强情なあたしがあの時ばかりは齒を食ひしばつて、これんばかしも口答へしずに、言ひたいまゝな雜言をじつと辛抱してた。ねえ、それもこれもみんな光ちやんへのせめてものお詫びだわ。それが莫迦なんさ。さうだらうか、え？　おつちやん、心意氣つてもなあそうしたもんぢやなからうか？』

しんみりと、言葉の末を自分と自分の心に囁くやうに落すと、きつと振仰いで姉さんを見る。火照つた頰がびく〳〵と動く。私は思ひがけずうつくしい『娘』の頰に、幻のやうに蒼黑い蝙蝠の羽翼を見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『――生意氣なやうだけどね、あたしにやあ忍んでまでも見に來た光ちやんの心持ちも、逢はうとした近ちやんの心持ちもようくわかるわ。そして、うれしいと思ふ、それでこそと思ふ。近ちやん、あたしも光ちやんに逢ひたいよ』

『でも、もうきつと逢へまい』

『さうだらうか』

二人とも無言つて火鉢に眼を落す。たどんのじようがくずれて赤いのが覗いた。

『底冷えのする晩だ』

ふところ手をするはづみに、乳の上をきりりと卷いた白布が見えた。

『こんだは?』

『春になつたら……』

麻の葉模様ののれんを絞りながら姉さんが振返る。階子の二段目に立つた近ちやんは、紫裾濃にしのぶ草を染めた裾を長く引いて、振りの袂をきうかり合せながら見送る。

『ぢや、お半ちやんも連れてね』と、聲が笑ふ。

『あたし、お半ちやないわ』と、羽子板のかげからきまりの悪い眼を出した。そして淺黄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の手甲をはめた手首が幽霊のやうなしなをして、紅で染めた舌を長く出したのを見て、あわてゝ姉さんの袂にかくれた。

『法界坊のお化け――』

近ちやんはそろそろと近づく。私はきやつきやつと聲を立てた。

……………葱買はんせんかいなあ

同じやうな葱賣りのなりをした松若とおくみが、打連れて下りて來た。白い面、圓い唇、美しい人の群を私はうつとりと眺めてゐると、さらさらと葉ずれの音がさびしくひゞいた。

『あら、雪が！』

松若が草籠に添へた小手をかざして、斜に軀をくねらせた。

みんなの眼が一時に庭面にそゝぐ。と、湯殿から流れる火影の仄なるあたり、鉢前の葉蘭へ、乾いたやうな粉雪がばらばらとこぼれた。

『年暮だわねえ』

近ちやんが誰にともなくつぶやく。姉さんはそつと私を抱きよせた。

その時、おつた姉さんは十七だつた。

粉雪は音もなく中空からこぼれる。――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

京人形

——松井靜代——

『さよなら』
『ぢやさよなら、身體を大切におし、よ、よ』
汽車は動き出した。男はぎゆつと握りしめた女の手を漸く離して、
『では』
と傍に立つてゐる友達の方へさし出した。
『もういゝよ君、行つて來たまへ』
その友達は素氣なく云ひ放つて懐手をしたまゝ身動きもしなかつた。男は一寸氣まりの惡さうな顔をしたが、
『いゝか三枝子』
と未だ思ひ切り惡さうに半身を窓の外にのりだしていつまでも〳〵半巾を振つてゐた。女はだん〳〵自分の前から遠ざかつて行く男を見送りながら丸い眼に涙を一ぱい貯めて我を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

忘れたやうに立ちつくした。やうやく車の一番後にある赤い燈がうすくぼやけて見えたり隠れたりする頃、われにかへつた。と、プラットホームはもういつしかガランとして、殘つてゐるのは自分とその友達ばかりだつたので今更のように吃驚し、あはてゝ改札口の方へと歩いて行つた。

外へ出て　友達はいつまでも〳〵默り切つて一言も云はなかつた。不圖、女のそつと使つた上眼が生憎その男の意地惡さうな皮肉な瞳に出逢つたのではつと女はあわてて眼を外らした。このまゝ自分まで默つてゐては惡いような氣がするので、涙をとめて押しかくすやうにしながら

『あゝ到頭行つてしまつたわ、之からほんとうの一人になれるんだ』

斯う云つてわざと蓮葉な笑ひ方をして見せた。けれども友達はたゞ例の紫色の厚い唇をそらせて一寸頰の肉を動かした許りだつた。依然懐手をしたまゝで、地を見つめたまゝでどこまでも歩いて行くやうに見えた。實を云へば女はもう今、男と別れたと云ふかなしみで一ぱいになつてゐて、こんなむつつりした、昔の幻影を追つてゐるやうな男と何の話をする興味をも持つてはゐないのであつた。其上、日頃から何か含むでゐるやうな親切、底の底まで見破るやうな深い眼付を危ぶんでゐる女には、今一人になつてこうして並んで歩く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふことさへ怖しかつた。が、色々な義理や人情にからまれた上から、どうしても、もうすこし此男と連れ立つて行かなければならないのが苦痛でならぬ。

『ぢや銀座通りでも少しぶらついて行きませうか、それともまだ早いから水天宮の緣日でもひやかして見ますか』

機嫌をとるつもりで、つとめて斯う云つてもまだ男は何にも云はなかつた。それは女が男と愈々別れると云ふ段になつて、あの男の顏をいつまでもぢいつと見詰めてゐたことや、あつい涙をながしたりしたことが氣に入らなかつたのだらう――。女はむいつとした。何もこの人の戀人ぢやないではないか――自然と湧いた反感から女も默り切つてしまつた。

いつとは知らず二人は新橋を通り越して博品館傍のうす暗い川緣を歩いてゐた。漸く芽ぐむで來たらしい柳の細い枝を渡つてまだ春の淺い川風は冷たく二人の頰をなでゝ行つた。向ふ側の煉瓦塀に添ふた所にはぽつつり豆洋燈をたよりにした繪葉書屋や、カンテラの火の淋しげな草花の苗を賣る男やが乏しい店を展げてゐる。

二人はもうお互の瞳の出逢ふのをさへ恐れるやうに俯目勝にして別々の事を考へながら步いた。

『別れやう、今度こそはほんとうに別れやう』口にこそ出さないが今の今しがたまで、胸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の中にすつかり決めてゐた女も、いざ斯うなつて別れてみると、今更のやうにその男のことが思ひ出されて來た。

あの男らしい思ひ上つたやうな眉、キリヽと締つた口許、小柄な若い力の充ち溢れるやうな身體つき、立じまのマント、つい先刻までカフヱーの片隅にぢつと眼を伏せては思ひ屈してゐた顔付、さうした俤が偲ばれた。

昨日までのまゝごとのやうな築地の住居も云ひやうのないほど懷しかつた。少しでも形づくつてゐた二人きりの世界、たはむれに張つた壁の千代紙までもまざ／＼と眼のまへに浮び出るやうに思はれた。

『何故あんな美しい夢を破壞してしまつたらう』

『彼女は、もうとりかへしのつかない事をしてしまつたのを悔ひずには居られなかつた。しかも男は何にも知らずに只女のことを思ひつめて、ただ國許へ歸り更に女と新らしい世界を作るために資金を作らへて來ようとしてゐるのである。――感傷的になつた今の女の心持ではもう他の男の何物をも受入れる氣力はなかつた。どうにもやるせないこの淋しさを强ひ手でしつかり摑へて貰はなければどうなることも出來ないやうな狀態になつた。それもやつぱり今しがた別れて行つたあの男の青白い胸でなければならなかつた。女はも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

う傍に友達のゐることすら忘れつくしてゐるやうに見えた。暫くすると男の方から突然

『こうして歩いたところで仕様がないからぢや御わかれにしませう』

と云ひ出した。女は豫期してゐながら流石にはつとした。

『まあ變な方ねえ』

口の先では何氣なしに云つたもの〻、心の中では不意に出し抜かれたやうないま〳〵しさと腹立しさに赫とした。男はぢいつと側の白眛の勝つた鈍い眼で、『どうです』といふやうないやな、表情をした。

女は思はずゾッとした、自分の心を見すかされたように。

然し此破壞は何も此友達の爲ぢやない、また此の男にすがらうとも思はない、どんな事情があらうとも戀の破れのきりぎしに至つた今、女として泣くのはあたりまへではないか、斯う女はむら〳〵といま〳〵しい思が湧くと同時に、またしても浮ぶのは今別れて行つた男の俤である。

『さよなら』

女はだまつてお辭儀をして、すり拔けるやうに三田の方へと歩いて行つた。男は暫らく呆然と見送つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『みいちやん、義太夫へ行かないか』

何にも知らない叔母は斯う云つて、近所から貰つて來た素人義太夫の入場劵を出して見せた。

『左樣ですね、行つてもいいけれど……………』

實際、今の心持では女はどうするわけにも行かなかつた。もすこし落付いて、もう少し、しつかりして出なほさなければならないと思ひながら、男とわかれてからは、何一つ手につかないやうな狀態にあつたのである。叔母は今夜の語り物がいゝとか、東華と云ふ今度の金主元は、何でも日本橋區の豪商の隱居だとか、そこへ出る見臺が千圓だとか、與にのつたやうに色々のことをくはしく話してはその豪奢を羨んだ。

氣が進まぬながらも到頭引張り出されて、天野と云ふ貸席の軒をくゞつたのは彼是九時近かつた。席では丁度可笑と云ふ色の生白い若い男が堀川のサワリをやつてゐる所だつた。

此頃はわけていたみ易い彼女の胸に浸みこむやうに響いた。女はぢつと眼を伏せて涙ぐんだ。お互にずゐぶん苦しい算段をして一所になつた二人はさう容易に別れらるべき性質

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のものでないのを彼女は今更のように感じた。そして今はもう、とても一時でも男に逢はずには居られないような氣がしてきた。彼女は彳を向いてそつと鼻をかむだ。間もなく、御簾は下りて今度は愈々東華といふ男が床に上つて來た。彼女も千圓といふ見臺につりこまれて、そつと涙をふきながらそゝりたつ好奇心の眼を見はつた。今度の語り物は二十四孝十種香の場から狐火で、鳴物が入つたり、白地に朱で野火を染め出した精巧な引ぬきや、殊に得意な態度が嫌味でならなかつた。それも一時で彼女の胸は又しても昔の夢に引入れられて行つた。

『あゝ自分は離るべからざるものに離れた』、一人で行かせてはならない所に行かせた、あの男はもうほんとに淺間しい自分の心を見破りはしなかつたらうか。

終には左様したことまで考へられた。蒔繪に象眼をはめこんだ高價な見臺に見惚れてゐる叔母や、頻りと感心して耳を傾けてゐる近所の老人たちや、あたりのむれ切つた空氣も、今の女にはたゞ空寂としたものだつた。

そこに浮び出るものは、たゞ遠い旅にやつれて、青ざめた男の顔ばかりであつた。女がふざいだりしてゐる時には、よくおどけた身振りをしては笑はせた姿であつた。『これはかり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は着せておいてくれ』と女の紫の長襦袢を肌につけながら微笑むで見せた口許であつた。
女は自分でどうすることも成らない自分の心持をはがゆがつた。
『みれんもの………』
思はず呟いた口の下から、再びあつい涙がぽつ〳〵とこぼれた。もう床の燭臺の火のゆらぎも、語り手の阿笑しな顔付も何も見えはしなかつた。耳にきこえてくるものは、流れ入るやうなしめやかな三味の音ばかりであつた。
『あつ、また引抜きだよ、みいちやん、御覽と云はれて女は漸くかほを上げた、今度は麻の葉形の緋鹿の子であつた。女にはさうした東華といふ男の浮氣つぽい、いやみな趣味が腹立しいやうな氣がした。
『もう歸るわ叔母さん』
森となつて見惚れてゐた周圍の若い娘達は自分達の感興をさまたげられたといふ風で、云ひ合したやうにヂロッと立上つた女の方を見つめた。
『まあ、何だね、今が肝心のところぢやないか』
舞臺裏では太鼓の音まで響き出した。女はもう此上の物うさに堪へられなくなつて、語り主を待つてゐる抱車夫の新らしい紺法被を横目に見ながら外へ出た。雨がぽつり〳〵と落

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ちて來た。

旅のやどりに
ふと眼さむれば雨のおと
淋しきまゝに
又しても思ひ出す君

京よりとした葉書を受取つても、前ほどの感興も起らないやうになつた。ひとりねになれるに從つて、女の胸はうすれるともなく、男を懷ふ心がだん／＼とうすくなつていつた。

『さうだ、ほんとうに今度こそ一人の新らしい道を歩いて行かう』

再びこう決心した女も、多くの友達からは二人が別れた事に驚いて、みんな云ひ合せたやうに彼女に同情した手紙を送つて來たのを見ては淋しくないでもなかつた。女はさう云ふ中に立つて、一層自分の誇りを充すと同時に、さうなると却つて男をあはれむといふ心が元にかへつて來た。殊に、あの晩、あゝした嫌な心持で別れた男の友達が繁々と寄越す手紙になほ／＼自分の男のことを惡しざまに書いて、

早く別れてしまつた方がいゝ、でなければあなたの本當の心の芽はいつまでも世に出す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ことは出來ない、あの男のあなたに向つて虐待した事實を考へなくてはならぬ、あなたに再びあの男は引かれるやうなことがあつたら、それこそ一大事だ。その時こそ、あなたのその純な、オリヂナルな芽は直ちに枯れ切つて終ふだらう』

と細々と注意した末に、

いま、私はどうにもしやうのない狀態にゐる、これを救ふと否とは貴女の勝手だ、私は一寸でも貴女に逢へればそれで幸福だ

といふやうな文句の附足してあるのを見ると今まで思ひもしなかつた何物かを更に背負はせられたやうな氣がした。あの友達はこうして離間策をほどこすのではあるまいか――あの男は自分たちの破壞を心から喜んでゐる。こうおもふと、背後から水を浴せられたやうに顫然とした。

だれも〳〵みんな自分があの人と分れるのに贊成して一人だつてあの男を被つてやるものはない――と云ふのも女にとつては物足りない、それはいゝとしても裏切りをしたる友達に面當てでももう一度一所になるのが道ではあるまいか、それが自分の義務であるやうにも考へられた。こうなるとあの男がいつも

『俺は僞惡者だ』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云つてゐたことを思ひ出した。僞惡者？さうした適當の言葉は外にはない、實際、世間の凡てから誤解されてゐるあの正直な男を救ふのはもう自分より外にはない、その自分さへ誤解してゐたといふやうなことまでも思はれて來た。せつかくまとまりかけた女の決心が又もや、ともすれば、くづれかけてくるやうになつてきた。女はもうどうすればいゝかわからなかつた。

『從姉ちやん、小包が來たよ』

斯う云ふ渦卷のまんなかにたつて途方にくれてゐる女のまへに、九つになる糸子は小さな油紙に包むだ箱を置いた。怪しみながら開ひてみると、中にはたつた三つ京人形の首が入つてゐた。それは云ふまでもない、別れた男のやさしい情であつた。女の眼には柔かい涙が浮んだ。

『まあ、可愛いい、姉ちやん一つ頂戴』

狂喜したやうに小さな從妹は手を出してそれを取らうとする、女ははつとした。どれも、どれも、この情のこもつた贈りものを他人の手に渡すことはどうしても出來なかつた。

『糸ちやん、之はいけないの、ね、それよりも之をあげやう』

常々からひどく欲しがつてゐてもこれ許りはやれなかつた市松人形の小さいのを机の引出

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から出して遣つた。女の今の心持ではどんな大切なものでも、此の粗末な京人形の首には代へがたかつたのである。

『嬉しい、嬉しい』

幼い糸子はもう大喜びで、それをおもちやにしながら母親の方へ見せに行つた。それを待ち兼ねるやうにして、女はそつと、人形の首をとりあげた、よくみると、その一つ一つに小さな紙きれが結びつけてあつた。

『治兵衛、おさん、小春』

一つ一つを讀んで行つた女の手は怪しく顫へた。氣をつけて男髷の首を見つめてゐると何だかそれが治兵衛から關聯して男の顔付に似てくるやうに思はれた。すると紙治崇拜で、毎晩のやうに、淨瑠璃を語つてゐたその聲さへも聞えてくるやうな氣がした。

心持上つた眉、深く澄んだ瞳、

『あゝ何てやさしいことをするんだらう。

女は思はずその首を自分の頬にすりつけた。

『こうして〳〵あなたは、折角きまりかかつた私の心持を搔き亂さうとするのですか』

生ぬるい涙が熱した頬を傳はつて、ぽた〳〵と流れ落ちた。

『もうだれが何と云つてもいゝ、矢張り私はあなたをいつまでも待つてゐますよ』

固く人形を胸にすりつけて泣いた。(了)

夜汽車

―齋賀琴―

汽車はR驛を出てから最早二つ三つの小停車場を過ぎて大分進行を速めて居た。蒼白い洋燈の光を浴びて客車の一番片隅に腰かけてゐる敏子はややしばらく身動きもしないで石のやうに固くなつてゐた、膝から下は冷えきつて氣味惡い感覺にしびれるのをそれでもいくらか覺えられた。

敏子のとり亂れた心には色んな追想、想像、空想、妄想がしつきりなく繰り返し繰り返されて行つた。これから歸て行く家の有樣、東京の今日のしまつ、今までの成り行き、將來の變遷、とりとめもなく是等の事を考へると頭の中がごちやごちやになつて只譯の分らないいらいらしい氣がするばかりだつた。一團の大きな黑い不思議な物が激しい動力に引きずられて頭の中を驅け暴れるやうで一寸でも纏つた感想を捕へる事が出來なかつた。一つの場面が表はれたかと思ふと何時の間にかすぐ別な色彩に變つてしまつたり、まるでかけはなれた夢の世界みたやうなものが不意に眼を遮ぎるために今までの感じを何もかも一掃

された思ひがする。事件の發端から今日までの經過をハッキリと意識へ上せて一々細かにあれはあゝこれはかうと丁寧に嚙み碎いた上それに就ての最高の所信を統べくくつて確かな根本義を造らうとしても、事件に纏ひつく込み入つた事情や問題を惹起するに到つた抑もの遠因に就て徹底した解釋を考へると只際限もない深い懷疑に落ちて行くばかりだつた。そして惑亂の末、遂には疲れきつた心に只斯樣してたつたひとり故郷へ歸つて行く物寂しい自分の姿が無暗にいたましく可哀相に思はれ出してしみ〴〵情ない賴りない感じに襲はれた。

　併しどんなに感情が亂れはてたにしても敏子の心が絶えず東京へ東京へと牽かれてゐる事に丈は決して何の變化もなかつた。一刻一刻に遠ざかつてゆく程その執着は劇しくなつた。自分と共通な思想を持つ若い友達や明瞭な理解と熱い同情を注いでくれる先生の心持に憧れるやうな感謝と喜悦とを感じて子供らしい可愛い純な感情が温かに身内を流れ渡るそして自分の一切をその感情に沒頭させて死に身になつて働きたい心からの慾望が起つて來た。熱し切つた血の滴りさうなその感激は新らしい潑溂とした力をつかれた敏子の心に蘇らせた。そして多くの敵を相手に自分の力試しをするやうな痛快な心持も起つて來た。

　曇つた硝子窓へよりかゝつたまま敏子は今年になつてから東京で起つた色々の事を夢の

やうにじつと回想つてみた。

しかけた齒の療治を口實に叔母から父に話して貰つて無理矢理に上京したのは丁度正月の七日だつた。姉の病死以後丸二ヶ月片田舍の小ぽけな家に引籠つて暮した身には停車場から寄宿舍へ行くまでの車上で、春めいた市中の賑はひがもの珍らしく眼に映るのが我ながらあはれに思はれた。谷町の通りからあの坂を昇つて學校の質素な門構へを見た時には我しらず涙の滲む程深い歡びを感じた。二階の廊下へ昇つた時は眞の故鄕へ歸つたやうな懷かしさが一時にこみあげて來て聲一杯叫んでみたかつた。そして東の端の自分の室へ這入つて使ひ馴れた机や本箱や座布團などを見た時には『最早此處を動くまい』と思ふ程つよい愛着に責められた。可愛がつてやつたあどけない下級の人達がいきなり胸へとびついて『おとうさん、もう歸らないかと思つてよ、――だつて姉さんがおなくなりなすつたんですつね、どうするゐのおとうさん』

と心配相に云ふのを聞いて優しくその下げ髮の毛を撫でゝやりながら一言も口がきけないで馴染深い窓の柱にもたれたまま暫らくは默つて葉のボロ〳〵に朽ちた梧桐の木をみつめてゐた。一目に見渡される冬枯れの運動場もこひしかつた、坂下の家々から立ち上る白い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

煙、よく椿の花をむしりに行つた向ふの墓地の森、暮れてゆく空に輝やく四谷の街の紅いともしび、二ケ月前と殆ど同じ様なそれらの姿を眼にすると今更ら自分の境遇が夢のやうに顧みられて來た。

その晩運動場からすぐ續いてゐるM先生のお家へ御挨拶にあがつた。暗いけはしい階段を昇つて勝手の分つた御書齋の扉を開ける時は何となく胸一杯になつてゐた。敏子は默つて一つおじぎして洋書のギッシリつまつた書棚の前に立つたまゝしばらくは懐かしそうに室の様子をながめてゐるばかりだつた。明るいタングステンの光の下で書き物をしてゐらつした先生がペンを擱いて快よく椅子を勸めて下さるまゝに座につきはしたものゝ何から先に口を開いていいのか、御挨拶の下手な敏子には少しも見當がつかなかつた。今朝まではあのさびしい家に窮窟に暮してゐた自分が今かうして遠慮のないやさしい師の前に相向つたのがあまり不思議な事のやうで云ひしれぬ感慨に胸が塞つた。

自分から進んで話を始める事はとても出來さうになかつたがやがて先生が三言四言時候の事など云つたあとで姉の死後家の整理について何んな話があるのか、兩親に取ては只一人子となつた敏子の身の上に新らして加へられた要求があるのかとしみ〴〵した調子で尋ねられるままおぼろに推察する兩親や親類の意向を語り、引續いて自分の決心を披瀝し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て敏子は覺えず涙を流した、その晩の會話は忘れ難いものだつた。
『――姉さんのなくなられた事を伺ふと同時に跡に殘つたお家の問題からあなたの身の上に迫つて來る運命を考へて私も色々心配してゐた。何にしても二人きりの姉妹だつた處を姉さんがなくなられて、そして義兄さんはまだお若いんだしするからお家の方や御親類の人達の御心を大方推察してみてもゐた――』
パッと燐寸を擦つて徐ろに巻煙草をくゆらし乍らいた〳〵し相にみつめられる先生の御眸もかなしかつた。
『何もまだ具體的な話は起らないの――いくらか想像位は出來ますか』
『それは最早分りきつて居ります、母なんぞの口吻で見ましても。ほんとうにお目出たいので御座います、あの土地の人たちは誰でも私がこのまんますなほに家にゐて姉の代りになつて滿足して、否、それを幸福として一生終るものだときめ込んでゐるんでございます、あの人達から見た私がどんなにひねくれた性質なのかそれはお構ひなしで、只さうするのが世間なみだからと云ふだけの話なのでございます』
『だがいくらお家の方がきめてかゝつた處が義兄さんには義兄さんとしてのお考へもおありだらうし左様單純には行かないだらうがね。一面義兄さんはどんなお方なんです』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

左樣云はれて見ると敏子にはハッキリした返事が出來なかつた、四年ばかりの間休暇に歸省した折々に只顔を合せるきりで同じ家の人となり乍ら曾て一度も親しくものを云つた事のない義兄の性質を急に考へ出して見た。

『滅多に話しする事もございませんからよく分りませんけれど――をとなしい内氣な人とでも申すので御座いませう。なんにも別に特色のある人ぢやないんでございます――』

思はず笑を含んだ聲になつたもの丶すぐもとの沈んだ調子に返つて、

『――そんな人權を無視した話が御座いませうか、姉が死んだからどうでもその夫に妹をつて、人間をまるで道具扱ひにするのでございます、そんなそんな理不盡な事はないはづだと思ひます、世間の習慣が如何あらうと私は厭でございます、尊い自分の魂を殺すわけにはまゐりません、もう話のきまるまで家へは歸らないつもりで出てまゐりました』

『まあそう一圖に思ひつめないでもいゝさ、だがお家の方達からすればまた無理もない話なのだ、悟つた人ならば家を繼がせる者老後を養つて貰ふものが自分の子だらうが他人だらうがあへて差支ない事だけれど、種の蕃殖を願ふ多くの人の本能はやつぱり自分の子であつて欲しいのだ。現在あなたと云ふ實子があるからはみす／＼他人に家を繼がせる事は忍び難い處へ義兄さんには義理があるんだから從來の個人を無視した家本位の考から

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すれば義兄さんにあなたをめあはせてと云ふのもらして不思議な話ぢやない。畢竟は立脚地が違ふから衝突が起るのだ。併しあなたは若くしてその妻を失はれた義兄さんに同情しその事業を援けて共に生涯を契らうとは如何しても思はれないか、義兄さんに對して全然愛情を持てないのか……』

敏子は默つてうなづくばかりだつた。

『全く愛情がないものなら仕方がないが――併しまた考へ様に依ては、あなたが自發的に自己を犧牲にして一切を負うて立つ氣になれば其處から新らしい自我が芽榮えて來る事になる、自我を沒して自我を生かして行く工夫をしやうとも思はれないか……』

『今の處ではとてもそんな氣にはなれさうもございません、考へられるだけ考へてみますけれど――』

『左樣、落付いてよく考へなきやいけない自己中心の我儘な感情から割り出した判斷でなく自分を客觀して冷靜に公平によく考へてごらんなさい、今までのやうな假空の話と違つて實際問題なんだから、自分に都合のよい勝手な理窟ばかりこしらへないで必死になつて徹底して考へた上で如何してもいげなければいげない理由をはつきり云はなければならないからね、あなた一人の問題としてばかりでなく一般女性と云ふものの立場からも愼重に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

考へてごらんなさい、いゝ試煉の材料だ』

先生は幽かな笑を浮べてこの最後の一句を仰有つた、敏子は眼を伏せて燃えつきた灰皿の吸殼をぢつと見すえてゐた。可なりに晩くなつた冬の夜のとげ〳〵しい寒さが室の隅々から次第に襲つて來るやうに覺えた。

その翌日から敏子は齒科醫學校へ行かうともしないで休んでゐた英語の私宅敎授へスケツチブツクを抱へて通ひ始めた。六十日の月日を取り返さうとして一生懸命になつてゐた、前から考へてゐたフレンチの稽古を愈々始めたいと思つて內密に先生を探しても見た。一日歩きくたびれて棒のやうになつた足を引きずりながら谷町の通りを歸る時血のやうに紅い落日を見るとわけもなく熱い涙がこぼれた。

敏子は物心地ついてから今までの自分の生活をそれからそれと手繰りよせて見てしみ〴〵寂しい氣分になつた、幼ない時から母親の盲目的な愛に慊らないで却て强い反感を起してゐた敏子は少しも家庭の暖か味と云ふものに觸れる事なく生長した。十五年の間同じ家に暮らした生みの親とついぞ打とけて話す折も見出せなかつた敏子には儚ない悲しい思ひ出ばかり多かつた、三年越し肺を病んで死んだ年若い叔父に就ての母の態度を考へると

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新らしく燃えるやうな憤りの念をよび返されてきた。十六の春まであの田舎にあゝ云ふ人たちの間に育ち育てられたのが自分にふさはしい運命とは如何してもうけとれなかつた。

敏子は更に小學校を卒業して後慘ましい神經病に罹つた一年間の事と飛び立つやうに上京してから江戸川の裁縫學校に來る日も〳〵針を動かして暮した二年間の月日を思ひ出して徒勞の多かつた過去を再び目の前に廣げてみた。そしてそれ以後S女學校に學んだ間が時間の上からはあまりに短かゝつたのを今更に感じるのと一緒にその間の貴い賜がどんなに自分の生活に貢益したかを考へた。自由、開放、進步、S女學校を批評する人々は必らず斯樣云ふ言葉を使つてゐた。

敏子は生れて始めて出逢つた對他人の具體的なる件について貧しい頭で一生懸命に考へてみた、すべての私心をとり拂つて虛無な氣持から問題それだけの理窟を辿つたりした、愛情のない虛僞の結婚、もうそれが何よりも深い罪惡で自分の生活を侮辱するものだと思はれた。家系を尊ぶこの國の家族制度は新らしい自由の生命を悅ばうとするものには既に昔の夢になつた。生じひに理知の發達した複雜な敏子の頭は幻滅の美に醉ふ事も出來なかつた。習慣的道德、世間的義理、それらの物は敏子に對して何の權威をも示さなかつた、兩親より家より因襲より何より大じな尊い個人の內部生命をすてる事は敏子に取て忍び難

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い卑怯な恥かしい振舞だと思はれた。自己の生命を永遠ならしめるため、その保護伸長のため、全力をあげて努力するのが人生に最も意義ある事、少なくとも自分自身の行くべき處だと思はれた。自分の Body は兩親から貰つた。併し自分は決して親や家族や親族たちの所有として實在するものぢやない。自分の生活はたしかに自分獨りの權利内にある現在の自分に及ぶ丈の力で一旦かうと信頼し思ひつめた事は凡てを排してそれを貫徹しなければ虚だ。たしかに自分はあの人たちの知らない尊い何物かを持つてゐる正しく生き正しく死なうとする意志、現在の中に永遠の生を得やうと想ふ心、感興に充ちた日常の生活この自分を打すてて何でむざ／＼あの低級な人たちの犧牲になり得られやう、如何してそれが有意義な犧牲と思ひ得やう。

　敏子は我が身の上を顧ると同時にこの國の昔の女のみじめな生涯を思ひやつて心からの憐憫をかんじ、世間的因襲を呪ふ悲憤な感情を制へ得なかつた。幾何の女が空しくその靈を蹂躙られた事か、そして生活の流に漂ふ僞はりのさ霧をます／＼深く濃くして來たか、眞理の國を求めて行く若い後進者たちをどんなにその道から妨げた事であらう、敏子はしみ／＼いたましい思ひに打たれた。そして自分がいかにまづしい力弱い者に過ぎなくとも昔の虐げられた女と同じ軛を踏む事は出來ない、反逆破壞、凡ての新らしいいとなみはそ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の後に生れるのだと信じた。

併し乍ら敏子の心がM先生の暖かい光に觸れた時、つねに人々の自由と天分とを重んじられてその發達を資けやうとなさる先生の正しい理解と熱い同情に包まれた時、すべての混濁は消え去つて只先生に從順でありたい命をかけて服從したいと云ふ高い感激に涙が流れるのみで他に何の願はなかつた。生死を超えた絶對の服從そこから新らしいねうちある自己の姿をあざやかに見得る心地になつた。

上京して間もなく父から先生に敏子は家へひかせる事にしたから歸らせてくれと云ふ至つて簡單な手紙が來たと聞いて敏子は思はず胸を打たれた。敏子自身に一言の話もなく出しぬかうとしたやり方が恨めしいのではなかつた。あれ程先生を信頼して『敏子の事はもう先生にお任せしてあるんだからいゝ、誰の世話もいらない』とまで云つたその先生に對して何と云ふ態度なのかとむしろ呆れさせられた。

『只ひかせると云つた處で分らないから委しい御意見を伺ひたいと云つてあげた』

と先生は云はれた。

『もし歸りましたら屹度自暴自棄してしまひます』

何かの次手についこんな事を云ひ漏して大變叱られた事もあつた。

『私は全然あなたに賛成する譯にはいかない、然しあなたの云ひ分も只我儘ぢやないんだからね、私がお家の方とあなたと兩方の意見を聞いた上で公平に調和策を講じたとしたらあなたはそれをきいてくれるか、總てをまかせてくれられるか』

斯樣尋ねられた敏子は一切をお任せしますと答へた。それが自分として少なくとも現在の自分として一番いゝのだと思はれた。

だん〳〵日數がたつにつれて家の方でも騷ぎ出した。凝議の結果敏子の祖父が上京して先生に御相談する事になつたと鄕里の叔母から通知せがあつた。父が先生へあげた手紙は只父の獨斷だつたさうだそんな簡單な事ですむと思つた淺い心を祖父母も嘲つたと書き添えてあつた。

『敏さんM先生の御家へ歌留多とりに行かない?』

仲のよい郁子が斯樣勸めても何となく氣が引きたゝない敏子は立ち上るのもものうかつた。ひとりでお留守居役をして靜かにものを考へる方がわけもなく賑やかにはしやぐよりはるかにましだと思はれた。世に何の苦勞もなささうな幼ない人たちの毎日の暮し方が非

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

常に危なく思はれもした。敏子は朝も晩も寂しさうにものを考へてゐた。

『杉野さんM先生が御用ださうでございます』

ある晩夕御飯がすんで室へ歸ると戸をたゝいて女中が云つた。

『さう、お宅で』

『はい、何でも御祖父樣がお見えになりましたさうで』

敏子はすぐに室を出た、廊下の一方の窓からはお坐敷の紅い燈もよく見えた。

『あ、敏子さん先生はお坐敷ですからどうぞ』

お茶の間の椽側から訪れると丁度忙し相に出てゐらしつた奥さんが媚やかに云つた。

お坐敷には先生が明るい電燈を背ろにして默然と坐つてゐらつしやるきりで外にお客も見えなかつた。

『あなたは總てを抛て犧牲になれないか』

深い瞑想の後からもれたかう云ふ先生の言葉を聞くと敏子はたまらなく胸が迫つてすぐには返事が出なかつた。

『どうして、どうして左樣仰有います?』

とせはしなく問ひ返しても先生は今日の祖父との交渉に就て委しくは語つて下さらなかつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。敏子が側に居る事も忘れはてたやうに深い沈思に陷つて暫らくは無言だつた。波打つ胸を制へて敏子もかなしく默つてゐた。

『あなた一人の心で如何ともなる事なのだ、ある小數の人が理解してくれゝば今までの希望も要求もすてゝ暗黑の裏から光明を見出す氣に、沒自我な生活にはいる氣になる事は出來ないか』

『――えゝ出來ませんとても』

『ぢや私がなれと云つたら歸れと云つたらどうする！』

『――ま、もう少し考へさせて下さい――』

『卑怯だね、任せると云つたぢやないか』

蒼白い先生の頰には寂しい微笑が浮べられた。キラ〳〵と光るお眼鏡を見上げて敏子も思はずすゝりなくやうに笑つた。

『併し私にも強いる事は出來ない』

先生は祖父に敏子が何しても義兄との結婚を拒む事を述べたあとで、敏子を別家させて同じ杉野家の名義をつがせる事にしたらどうかと言はれたけれど腕一本で家財を造りあげた物質慾のつよい祖父は資産の分裂を惜しむからと一言の下に云ひ消してしまい義兄の人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

物の温順な事を云ひ張つて如何でも敏子に承知させたい、是非歸るやうに勸めてくれとくれ〴〵も賴んだ末二三日中に返事をきゝに來る手筈にして京橋の親類へ歸つて行つたと云ふ事だつた。

『だから今度お祖父さんの見えられた時に改めてこゝであなたから理由を話さなければならない』

さう仰有る先生の聲はもう動かし難い敏子の意志を認めてゐるやうな調子を帶びて聞えた。敏子はしみ〴〵淚ぐまれた。

『まあ何處へ行つたの——さつきから探してるのよ、お祖父さんがゐらつしつたんですて』

曇り空の陰氣な日の午後だつた、格別の用もなかつたが朝から頭が重いので氣散じにと同室の小さい人を連れて四谷の町をぶらついた末、花屋で買つた赤い實をさげてあの坂を來かゝると丁度校門の傍へ出て來た郁子がかう叫びながらいきなり手をとつてすぐ一緒に歩き出した。

『しつかりやるのよ、ね、負けちやいけない!』

竹垣の前で別れる時熱情的にさゝやいて痛い程手を握つて行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

無暗に興奮してゐた敏子はお坐敷へ通つて其處に坐つてゐる祖父の姿を見るとたまらない氣がして涙ぐまれた。自分の心持を到底解つてくれられない人にどうかして分らせやうとしなければならないその徒勞が惜しまれた。けれどつとめて落付かうとして先生と祖父と兩方へ兼ねた簡單な默禮をすませると居ひずまゐを正して目をつぶつた。

敏子は話のくどい祖父が長々と說き出す愚痴と利己をあやにかけた何の條理も立たない說をきくに堪へない氣がして同時にこんな下らないしつこい云ひ草をM先生にきいて戴くのが非常に濟まなく思はれた。祖父は家の爲親の爲と云ふ事をくり返し〳〵說いてこの際一家の平和を計るために敏子が家族の一人となるのが敏子にとつて人道の極意なのだと結論した遠い將來や無形の問題についての事は祖父には少しも分らなかつた。そして目下の者には是が非でも自分の云ひ條を承知させなければ止まないいつもの癖は敏子がいくらそれを拒絕してもいつまでも話を結ばないで同じ言葉を重ねてゐた。敏子は最初なるたけ用心して餘計な事を云はずに默つてきいてゐたが暮れ易い冬の日が黃昏れて電燈も點く時分にはもう我慢しきれないで何でもいゝから手取り早く問題を片付けてしまひたいいら〳〵した氣持になつた、そしてつい強い言葉も口へ出た。

『そんなにお祖父さんが家々つて仰有る家も個人々々が集まつてから出來るものぢやござ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いませんか、家をよくしやうとするには始めに個人々々をよくしなくちや駄目なわけぢやございませんか』

『お祖父さんがいくら義兄さんをお賞めなすつて何の缺點もないと仰有てもお祖父さんと私は違ひますから』

斯様むきな調子で云つた時は先生も失笑されて

『そんな拙ひ云ひ様をしちやいけない、お祖父さんにはお分りにならないんだから――』

と云はれたけれど敏子はもう生やさしい言葉が出ない程激しい氣分になつてゐた。

『もうこれで私の申す事は御座いません』

と無愛相な調子で云ひ放つた。

つひには祖父も我を折つてではとにかく一旦家へ歸つて敏子の兩親や親類へ今日の話をした上の事と云つて、そして兩親が家へ呼んでよく說得すると云つたなら是非共歸らなければならないと附け加へて嚇すやうに云つた。敏子が覺えず氣色ばんで口を開かうとする前に先生は引き取て答へられた。

『その場合には必らず歸します、我儘な事は致させません。――行つてよく御兩親にもお話した方がいゝぢやないか。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

敏子の頭は混亂して何だかあたりがボーッとなつた。
『敏子さん、お給仕して下さいね』
といはれてびつくりするといつの間にか奥さんが膳部を運んでゐらしつた。

その晩の十時すぎつめたい夜の空氣を吸つて大分靜かな心持になつてから再び先生のお家へあがつた、二階で四五枚原稿の校正をお手傳ひした跡にお話した。
『念の爲あなたの心持を確めて置きたいと思ふ。あなたはさうして兩親の心に背き家をすてゝまで自分の主張を貫徹するとなら親は泣くだらう恨むだらう、親類も嘆くだらう、それも構はないが――左樣して自分獨りになつて物質上にも精神上にも寂しい孤獨の生活をやり通せる丈の強い自信を持つてゐるかどうか――その覺悟がありますか』
『――立派にやり通せるかどうか分りませんがやれるまでやつて見ます、そして倒れゝばそれこそその犧牲に滿足致します。今兩親の意見に從ひましたなら物質上の幸福は得られますし、自分の力で一時さし障りのない圓滿な解決を來したと云ふ小さな誇はございませうけれどそれは決して永遠のものでない事が分りきつてをります――』
先刻の惑亂と困憊は皆何處へか消え失せてしまつて敏子は珍らしく晴れ〴〵した感じに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつた。

『やる氣ならばやれるとも。だか今度歸つた時今日のやうにはげしく云ふんぢやありませんよ、要點だけに止めときなさい』

さう云ふ先生の暖かい言葉が敏子は身に泌みてうれしかつた、片手で椅子の背をおさへて立つたまゝ深く頭を垂れて聽いてゐた。

理性は敏子をその親の意向に背かせた、感情もまた同樣だつた、幼ない時から母の偏狹な感情に育てられて妙にひねくれた片意地な性質になつた敏子はかう云ふ場合にも兩親へ對して何の苦痛も悲哀も感じる事が出來なかつた、孤獨のいたましい生活を豫想した時でもすぎ去つた昔と比べてさ程つらいとは思はれなかつた。たとへどんなに苦しくとも自分の魂を生かすために止むを得ないと思ふ念は壓しつける樣に起つて來て心全體を征服した。敏子は元來本能的な愛を何よりも嫌ひぬいてゐた、どんな血族關係があるにしろお互ひに一個の人として理解し同情し尊敬し、その自由を承認してめい〳〵天性のまゝに發展して行くのが最も自然なみちだらうと思つた。親だから兄妹だから——そんな考へは塵程も持てなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれどM先生に對する心持はまた特異なものだつた、先生の事を考へた時敏子は『濟まない』と云ふ强い感じに身も世もない思ひがした、了解して下さる事の深いだけそれだけ事件の解釋についてこみいつた內心の御苦痛も多からうと察した。ことに敎育家と云ふ苦しい立場から何の根本的考察もない煩惱の波に漂よふ一般世俗を相手にされた時どんなに傷ましい矛盾をお感じなさる事かと思ふと心から熱い淚がこぼれた、そして自分が先生を信頼する熱烈な純な感情をまでうらぎられやうとした。

『少しでも先生の御用に立ちたい、先生をお喜ばせして死にたい』

心の中で何ものかがかう云つて敎えてくれたその一方には

『だが先生に從順しくするのが果して先生のお爲になるのか、或部分の人たちに誤解を起させるのぢやないか』

とさゝやく聲があつた、敏子は怖ろしさに身顫ひして泣いた。

四五日經過たある晩郷里の父から簡單な歸れと云ふ端書が來た。

『けれども何も直ぐつてわけぢやないのだ。あさつて時分で丁度いゝ』

大まかにさう考へて寢てしまつた敏子は翌日の朝になつても今夜郁子さ行く束約の有樂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

座の思ひ出の事ばかりが頭に動いてゐた。去年の暮廿世紀を觀のがした殘念さを新らしく思ひ浮べて渇ききつた慾望を充せる嬉しさにしきりとほゝ笑んでゐた。そしていつものやうにお稽古も濟まして午近くなつた頃偶然廊下でM先生に出逢つた時當り前のつもりで何氣なくお話すると先生はいつにない不興氣な表情をみせて

『なぜ今日すぐ行かれないんです！次の汽車でゞもゐらつしやい、事は機先を制さなければいけない。思出は觀る程のものでもないからいゝ、口でばかり强がつても實行は出來ないのか、あなたも矢張弱い女なのか！』と疊みかけて叱られた。

『正しいと思ふ主張をあくまでも云ひ通しなさい、理解されるか否かは問題ぢやない』

敏子は默つて唇を嚙んできいた。

『もし無理强ひに壓制な事をされたら逃げて來てもいゝ、その時の責任は持つてあげる、だがあなたが無暗に我儘な事を云つてお家の方を怒らしてしまつては私も味方になるわけに行かない』

敏子は覺えず涙を浮べてすぐ行きますと答へた、胸一杯の氣持になつた。

丁度有樂座へ電話をかけてゐた郁子に譯を話して急いで支度に取りかゝつたのはもう食堂のベルが鳴る時分だつた。取りあへず散らばつた本をまとめて、塵のかゝり易い置物を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本箱の引出へいれた。せわしく立ち働いてからほつとして室を見回すと正面の壁にかかつた寂しい透谷の肖像が第一に目につくのも悲しかつた。

哀傷に閉された心のやるせない氣持になつた。氣がつくといつか机に突伏してゐた。

どうやら御挨拶をすまして郁子とふたりで門を出た時はかれこれ三時近かつた。まだ學校はひけないので小さい人たちには何もしらさないで來た。

『六時までまだ可なりあるわ、銀座へ行つてはなしませう』

『バウリスタでね』

四谷見附から外濠線へ乗り換へて新橋で電車をすてた。

二人は固く手を握り合ひ乍ら橋を渡つてなつかしい心持で博品館や天下堂の前を歩いた、冬枯れの寂しい柳の梢を見上げると敏子はその朽ちた枝に再び生の力が蘇り青い芽の萠え出す頃を思ひやつて覺えず感傷的に

『あゝいつまた來られるんだか………』

と叫んだ、そして普通ならぬ親しさに交はつて來た郁子とも別れてたつたひとりあの暗い家へ歸つて行く事が急に悲しく思はれた。もう夕暮の色を帶びて來た空模樣もさびしい情緒をそゝのかした。

『ね、しつかりしてやるのよ、大丈夫やれるわ。だけどねえお家の方がM先生に感情惡くしないかしら、それが心配なの……あなたが先生の仰有る事なら何でも肯くつてことご存知なのお父さんは――』

『左樣ね、――だつて仕樣がない、先生にばかりは濟まないほんとにすまないと思ふんだけども――』

『苦しいわねえあなたは』

白いミユゼシヨールをかけた郁子の肩へより添つて低い聲でさゝやき乍ら夢のやうな心で歩いて行つた、氣がつくと知らない間にパウリスタの曲り角を通り過ぎてゐたので最初の考へを變更へて臺灣喫茶店へはいつた。

長椅子へ並んで温かなウーロン茶を啜りながらとりとめもなく色んな事を話し合つた。去年の春別れたきり何の音沙汰もない遠國の友達の身の上などが不思議に案じられてきた。

『思ひ出もさびしく一人で觀るのね』と郁子はつまらなさうに云つた。コヽアを飲んだりプディングを食べたりする間にもふたりは時のたつのが惜しまれてならなかつた。

『今度はいつあへるんでせう』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と同じ事ばかり繰り返しては涙ぐんだ眼を見合せてきつく手を握りあつた。

――汽車がI驛へ停つた時閃めくやうに古い回想が敏子の胸に映つて來た。S女學校の五年の春此處へ遠足に來た時の事がまざ〳〵と思ひ出された。郁子とふたりで菫の咲く松原を逍遙つた事や小舟に乘つて靜かな淨谷から五月の空に翻る町のふきながしを眺めた事歸りには雨が降つて濡れた栗の花の美しかつた事など連想はそれからそれと暫らくの間絶えなかつた。けれどやがて汽車が次のJ驛のプラットホームへ轟々と音立てゝはいる瞬間突差に、

『もうぢきだ！』

と感じられていつその事此處で下車りて仕舞つて東京へ引き返さうかと思ふ程たまらなく家へ歸るのが厭な氣になつた。併し理性のはたらきはすぐ敏子を引き止めた。

幾何かの人があわたゞしく降りるあとからまた新らしい乘客がドヤ〳〵遣入るのが活動寫眞のフィルムのやうにチラ〳〵目の前をかけつて行つた。汽車が再び動き出して物賣りの聲がかすかに後ろに消える頃には敏子の心も落付いてきた。そしてまた記憶を辿つて女學校の教室で聽いたM先生の御教訓を考へるとふしぎな力強さが胸に溢れていき〳〵した

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣分になつた。個人としての自覺、生き甲斐ある獨立の生活、倫理の時間に屢々きかされた斯樣云ふ言葉のきれ〴〵が新らしく心に浮んだ。アスパシヤやサフオーやコルデリア姫やモニカの話なども先生の熱烈な口調そのまゝを思ひ出された。そして敏子はその時分の歡びにみちた生活に再び立ち返つたかのやうにはれ〴〵した微笑をたゝへた。

併し暗の中を走るR行の汽車は敏子ひとりの身の上には何の關係はりも持たないやうに非常な勢ひで單線のレールの上を走つてやがてその故鄕へ運んで行つた。（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

佐渡節

——安田皐月——

痲痺し切つた樣な鈍い空が怎麼刺戟にも一向感じまいと云つた調子で重く沈んで居る下を、豆腐屋の喇叭が餘韻を引いて過ぎた。と直裏の車井戸が不遠慮にぎい〲と其心持よく續いた餘韻を刻んで行く。

千代枝は先刻から物を書いてゐる

……貴方も自分の生活を繪卷物に編まうと云ふ洒落れたお仲間ですか。其那謀叛氣はさらりと捨てて遊びませうよ、貴方の樣なお若い方にさう眞面目になられると恐ろしくなります。私は御一緒に胸で遊びたいんですけどね、貴方の一生懸命なのを見るとさう云ふのが何だか御氣の毒になります。然し駄目ですよ、貴方が何程(いくら)命賭けのものにし樣となすつても、此方から持ち掛けるんぢやもう其處に隙がありますもの。命賭けが對方(むかう)から來るんでなくちや本物になりませんよ。擬ひ物で辛抱出來ませんか。斯う人間が小利口になつては、戀の相場も下がつて(實は上がつたのかも知れません)狐と狸との化かし

合ひの樣ぢやありませんか。片方が化かされて居れば片方が得意になつて勝手な術を弄んで居るんです。氣付かずに何時までも化かされて居たらそれは今時にない幸福な人でせうけれど、小利口な人は直氣が付きます。さうなると得意の人も厠の隅まで覗かなければ氣の濟まない程神經過敏になつて居る現代人ですから反對に今度は狼狽て出すでせう。此麼事を繰返して居るのぢやありませんか？其うちに兩方が兩方の術を理解して了ふと今迄の迷が解けてお向ふ樣に轉がつて居る御夫婦連が出來上るんぢやありませんか？まあ戀の全部が此麼掛引きでないとしてもさう一生懸命になるのは馬鹿らしいぢやありませんか。まあ胸でする仕事には頭は睡むらして被居いな。それとも近松の女の樣に烏鵜見たいな執着で取卷いて下さる？　さうなら私は何にも云ふ事はありません。命に熨斗を付けて立派に進上しませう。

　まあ面倒臭い事はよしにして何處へか又行かうぢやありませんか。いつかの………

千代枝は一寸の休みもなくペン尖を此處まで走らせて來ると止めて了つた。そして面倒臭さうに書いて來た紙をくしや〳〵にして机の抽出に投げ込むと窓の敷居に腰掛けて、下の通りを見下した。

筋向ひの新たに出來た小間物屋で、店先に吊下げてある帶止めや手絡に采配を掛けて居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る小僧の顔の輪廓だけ白く黄昏の中に浮いて居るのを見て居ると千代枝は、落付かないそれで居て懶い様な淋しい氣になつた。この頃の習慣で夕方が來ると寂寞と退屈と惰性とで何か求めないでは居なれなかつた。

「今夜はもう本でも讀んで居様」

千代枝は自分の態度を明瞭にする爲めに、態と明晰り聲に出して云つた。そして淋しい顏をして眤と書棚を眺めた。これから寢る迄の長い夜を色もなく書齋で塗り潰して了ふと云ふ事が千代枝には可なり惜しい事だつた。さう理屈付けて意識しては居ない迄も出來たついた體は、窓際に押寄せて來る夕暮を見ると若い男によくある樣な不可抗な唆られ心に引かれて、靜平と家には居られないのだつた。晝は大抵部屋に籠つて讀書して居るし、訪づねて來る人も餘りないので、旅行後外出の繁くなつた千代枝をさして家人は怪しんでは居なかつた。外で何して居るかを家に居る間の千代枝から押して知る譯にはいかなかつた。始めのうちは千代枝も出難い處を「友達の處へ調べ物に行きます」などと体裁を繕つては出て居たが、此頃では成るべく人の顏を見ない樣と飛び出すのであつた。

此の近所にちよい〳〵出來た妙な家の娘が此の邊には珍しい下町風の小間しやくれた姿が、小さい金盥を持つて小間物屋の小僧と話し〳〵後向きに後すざり乍ら歩いて行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

千代枝は暫く行かない師匠の家の夜が懐かしくなつた。肥つたお師匠さんを中心に歌吉やお光さんや前掛懸けの吉岡やが他愛もなく話に長い宵を興じ合つて、次ぎの瞬間に何が起るかなどは誰も考へるものもなく只華やかにざはついたその團居が懐しいのである。

請負師の娘で少し智識が足りない僻に妙に人馴れてませて居るお光がいつもいゝ玩具になつて居た。

お稽古が濟んでお光が氣取つて三味線を置くと、歌吉が

『お光ちやん一寸いゝ事。吉岡さんたらね、女の寫眞を肌に抱いてるのよ。お前さん懐へ手を突込んでお取りよ。屹度吉岡さんの嫁許なんだよ。』

『おやさうかい。そりや光ちやんに限るね。お前さんの様な小さい手なら幾等若旦那の肌が瀬戸物の様でも其筋のお咎めはないからね』

『さうも云へませんよお匠さん、今の氣取り工合なんて來たらさ。三味線を斯う持つた格子の品し加減もすてきだが、撥を動かす度にやるあの横目はお匠さん只物ぢやありませんせ』吉岡が妙な眼付で眞似ると皆は笑つた。

『オホヽヽヽ』

『お光ちやん默つてるんぢやないよ。自分こそ女の寫眞なんか持つてる僻に。ねえ』

歌吉やお匠さんに强談されると

『なんだにやけ男の僻に。そんな情女の寫眞なんか破いちやい……』

吉岡が出しさうにしては隱し出しさうにしにては隱しするのでさう〳〵焦れて、無理々々に男の懷から引き出すと、それは口をへの字に結んで眼尻の先へ眼の玉をふり下げた女が、帶の結び目の邊で腰を曲げ乍ら三味線を持つてる萬年筆の走り書きであつたので大笑ひだつた。ショールを隱したり、誰やらの女下駄に男下駄を添えて片々づゝ直して置いたりして、只譯もなく興じ合つてるサークルへ自分も投じて千代枝は色んな繪卷物を頭の中で眺めてゐるうちに、はじめの微笑がだん〳〵消えていつか沈痛な色々に變はつてゐた。そして無意義と空虛が彼の女の頭を占領した。と、

『フフン、眞面目腐つてさ』

斯う云ふと一緒にぐいと腰を立てるとばたばたと梯子段を馳け下りた。そして

『一寸出て來ます。今日は早く歸へります』

と云つてゐた時は閾の外に五六步駒下駄を運んでゐた。

外は幾重にも笠を着た月が夜櫻の春を薄ぼんやりと映してゐた。千代枝は生暖かい風に吹かれ乍ら賑かな町、明るい通りと選つて步いて居るうちにいつか乾燥いだ氣分になつて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來て輕さうに肩を振り乍ら大きな體を男の樣な步き方で眞直に電車道まで出ると、いきなり淺草行きに乘つた。

電車が兩側の光のうねりを突切つて馳け出すと千代枝は何處へ行くのか覺えない程ぼうとした醉心地で乘客の一人一人に色々のローマンスを着せてはそれが形にもならないうちに次ぎへ次ぎへと移つて行つた。

電車が淺草橋を出た時半玉とも町家の娘とも見分けの付かない二人連れが千代枝の直前の吊皮に白い腕を長く見せて立つて居た。その一人の紫地に芦に舟を絣で織り出した羽織の片袖が千代枝の膝の上に垂れて、板〆縮緬が鶸色の甲斐絹の間で波打つて居る。千代枝は色々な色ごちや〳〵集めた半襟に重ねた茶の粗い棒縞の胸を此方に向けて居るも一人の顏を、顎が少し長過ぎるけど愛らしい顏だと思つて見て居ると其子がプッと吹き出した。そして、

『お淸ちやんがね、今夜怎うして來ないか知つて居て！』と紫の方へ話しかけた。

『何よ、何かあるの』と云つて居るうちに此方もさもをかしさうに袖口で顏を覆ふた。

千代枝は自分も仲間へ這入つた樣な氣で面白さうに聞いて居る。

『ほら。來るのよ。ね、屹度』と云ふと二人は又どうと笑つた。そして周圍を見廻し乍ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お互に顔見合はしてはクックックッと笑つて居る。

千代枝は此麼深い肩揚の下にも雛段の前でお白酒に醉つた樣な戀があるんだと思つて可愛らしい氣がした。此麼あどけない後影に添つて帶屋を出したり野崎をやらしたり泣かしたり焦らしたり喜ばしたりして遊んで居る運命の大人氣ない遊戲が千代枝は羨しくなつた。出來るなら女を知らない、男を知らない丸つきりのおぼこ二人を人形の樣に操つて、其純な初心な桃色の情調の陰に自分も浸つて見たいなどと思つて居る間に電車は雷門で止まつて居た。

駒下駄を内側へくるり〳〵と返し乍ら中店の彼方此方を覗き覗き歩いてる二人の後から千代枝も、半襟屋の前に立つたり、玩具屋の前に止つたりした。其うちに指の腹程の角製のお面と煙草入とを買つて居ると二人は本堂の方へ行つて了つた。千代枝は只歩いて居るうちに押され押されみくに座の前に出た。すると直人込みを逃ずして、薄暗い細道を幾曲りも幾曲りもした頃は千代枝は兩手を懷にさし込んで背の高い體をのそり〳〵運んで居た。

千代枝は頭を一つ處に止めて、働かさない事に可なり馴れて了つた。一瞬々々移つて行く視界につれて、頭も上面を一瞬々々辷つて行くのだつた。そして此麼傾向が何時迄續く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かは彼の女も知らない。又それが第二の自分を造り上げやしないかなどはてんで考へ樣とはしないのだ。只胡麻化しと知りつゝ、その胡麻化しの歡樂の中に體裁よく胡麻化されて居たらそれでいゝ。隨時隨所に我儘の羽を伸して、其下に理性を征服して千代枝は暫くを送つた。

道の曲り角で一寸立ち止まつた千代枝は仕出屋の角を二三歩大通りの方へ引返したが、又足を止めると今度は反對の方へ歩き出した。そして細い横町を二つ出ると御待合あけぼのと角點燈を下げた家のがた〳〵云ふ格子戸を開けた。

所在のない體を長くして頭の下に肘をねぢ込んだ千代枝は、危つかしい手付でお茶を口の傍へ運ぶと、途端

『今日は、お退屈樣』

斯う云つて隣の部屋から濡椽傳ひに首を出した男が、此邊の女かと思つてか聲を懸けたが千代枝が其儘ぢつと蔑む樣に笑ひ乍ら鋭く見て居るので默つて引込んで行つた。

『何處へ浮れたお歸り？』

斯う云つて袷の裾をかへして白い顏の女が這入つて來た。そして座り乍ら、

『彼れでせう今夜は？　公園で遣つてるんですもの今日邊りは被入るだらうと思つて居た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のよ。龍ちやん山鹿護送で又當てゝ居るつて評判ですよ』細い銀のがん首に煙草をつめ乍ら饒つ居る
『先刻ね、一寸迷つたの如何し樣かと思つて、だけどはねるのを待つてると餘り遲くなるし』と云つて笑ひ乍ら『今日は野郎よりや綺麗な方がいゝから………』
相手の顏を見返すと
『で如何するの？』
『いゝぢやないの』笑つた眼を相手の眼に据ゑて視線の交換が電の樣に閃めくと、
『おほゝゝ驚いちやつた。彼方なの』
さう云つて眞黑な瞳をまじ〳〵させながら喉と鼻の間で吐切れ吐切れ笑つてる。
『だつてね、ウラにも行かないぢや餘り薄情だ……』
千代枝はずん〳〵外へ出て了つた。
月はいつか見えなくなつて明日のお花見が氣の揉めさうな空模樣になつた。それに風さへ湶つて花の命が惜しまれる程だつた。
千代枝はくる〳〵と首筋に丸めた油つ氣のない髮を風に吹かせ乍ら、兩手を袂に突込んで鼻唄を唄つて佇んで居たが其聲が明断り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『抱いて寢もせず……』

と聞えた時、ばた〳〵駈けて來た女が、

『ほんとよ貴方、その通りよ。隨分貴方は氣まぐれ者ね』

何の彼のと女がしぶくつて居るので、

『櫓下の姐さんも斯う論ちちや存外意氣地のないものね』

千代枝は笑ひ乍らずん〳〵象潟町の方へ歩を進めた。

千代枝は一日が過ぎ二日が過ぎ……さうして居る外仕事を持つて居なかつた。只變化のない時が積つて月日が經つて行く中で退屈を持て餘して漫然と生きて居た。この漫然が千代枝には堪らないものだつた。何を目當に行くのやら、第一進んでるとも退いてるともそんな變化を千代枝は見出す事さへ出來ない程無事の日が續いた。每日の出來事のうちに興味を引かれる何物もなくなつた。只何か求めて求めて止まないのに何を求めて居るのか知らなかつた。千代枝は凡てが解らない中でもぢ〳〵して居た。殊に明方程彼の女に切ない手頼ない寂しいものはなかつた。譯もなく上半身の筋肉がむく〳〵うづく中をとりとめない不安が往つたり來たりして胸苦しさに堪へられないで眼を開くと、二燭の電燈に薄ぼんや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り隠取られた障子の棧が動いて來る樣に見える。千代枝は眼を閉ぢたり開けたり閉ぢたり開けたり繰返し乍ら、悲しいとか寂しいとかさう明かには云ひ切れない切なさを感じ乍ら何時迄も何時迄も枕を離れない事が多かつた。或時などは體中が不可抗な何物かに動きのつかない程締め括られて居るか、さもなければ恐ろしい猛獸の牙に惡つて寸斷される自身を傍觀するか、さうでもしなければ其身の救ひ道がない樣なあはたゞしい取詰めた氣になつたりした。時には世界中が自分に背いて呉れたらと思つたり、又何とも知れない巨大なものの懷に憩みたいと思つたり、譯もない動搖が立つても座つても歩いても駈けても居られない境地に千代枝を突き落した。

十二月の或日であつた。

暖い日光が拭き込んだ椽側一杯に映り込んでこの頃の陽氣とは思へない朝、千代枝はおかめいんこの籠の傍で蕈もどきを活けて居た。其時精三は後に立つて居た。

『千代枝さんそれで出來上り?』

さう云つて皮肉な笑みを口元にぴく〳〵させ乍ら、薄ばたの赤い實を眺めて居る。

『エヽ。何故?』

『それでいいとなると僕の審美眼は零ですね』

『何處かいけなくつて？』千代枝が笑つて居ると、
『左の方へそんなにぶら下つて居てもそれでいゝんですか』
『だつて蔓物ですもの』
『だからいゝ？』
『ええ。大變にこれがいいのよ』
『へえ。ぢや愈僕の審美眼は零だ』
『そんなら如何なるか切つて見ませうか』
千代枝が鋏を持つと急に遮つて、
「いけませんよ。其麼もの僕のいゝ樣になんかしなくつてもいゝです」
斯う云つて鋏を奪ふと千代枝の。手首の邊をじろ〳〵見るので、
「何？』
『フゝン。何でもないけど、あくどい對比だのに大變によく見えるから』
黒襦子の下に赤いい八ッ橋の重さなつた袖口を見て居たのだつた。一寸した女の色彩からも微動を感せずに居ない男の、何か求めて行く心持を千代枝は此時見たのであつた。

二人は何時か同一線上に立つて居た。

千代枝は一月程もスキートに送つた。口では何かと理屈つぽく不平や不滿を並べては居ても、其實の輕いふは〳〵した頭の睡つた日が續いて居た。然しそんな狀態が永く續くのではなかつた。與へると云ふ事を知らない千代枝は只求めて居た。そして男も漸く求めて出して來た。千代枝は又もだ〳〵しなければならなくなつた。

千代枝は近くに住む男の消息を半月程も知らない事があつた。彼の女は居ても立つても居られない不安を感じ乍ら自ら物云ふ事を恐れた。もう直前迄終局の忍んで居るかもしれない。いや凡てが終つたのかもしれない。少くも男の心の散つて居る時に未練な態度は曝したくない……未練と虛勢の暗闘の中に數日を過ごした。彼の女はとうと筆を握つた。

生殺しの蜿が苦しがつてのた打廻つて居ます。日日殺すのですか。生かすのですか。貴方の鉈が鈍つたのですか。貴方の一字でも見せて下さい。

千代枝は翌日の晝一枚のはがきを手にした。

私は今社會の誰とも沒交涉です。自分の社會觀、藝術觀、戀愛觀、凡てが今の自分に正しいものになりました。私は出直さなければなりません。重ねて云ひます。私は獨り

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

です。勿論貴女とも何の交渉も持つて居まい事は事實です。

千代枝は頭の心がぢりつと燒けた樣に覺えた。それを强ひて押し靜めて讀み返してゐるうちに、何も不思議はない、凡てが成る樣に運んだ迄だ、と云ふ樣に思はれて葉書を机の下に抛り出した。けれど後は淋しいものだつた。

追掛けて二度目の封書が屆いた。

……私は貴方を殺せも生かせも出來ない。そんな處まで行つて居ない。暫く沈默を許してくれ、其間に自分を統一したい。そして統一した自己を持つて其女に伺ひたい。其れ迄私の沈默を許して下さい……

と云ふ樣な事が淋しさうに並べてあつた。そして前の葉書とは丸で違つた筆付で「今の私は貴方を見る事も恐ろしい。只廣い野の眞中に立つて心行く迄貴女を思ふ唄に喉を絞つて死にたい」などとも書いてあつた。

千代枝は二三度繰返して紙の裏に潜んだ文字を讀まうと試みた。前の葉書とも見並べながら。が、まだ終つては居ないと云ふ事をたしかめた丈けで深く詮索する事を避けた。そして矢張り自分の手紙が男を驕らせて最初の葉書を書かした事を思ふと、世の中は皆さうしたものだ。初めに手をつけた者が敗者だと千代枝は淋しく笑つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然しそんな事は如何でもよかつた。

只理智が恐ろしかつた。

自覺して統一させた私などを持つて來られる事は堪らない。自覺したり意識したりする隙もない微妙な神秘な絶對境が愛でありたい。戀でありたい……千代枝は無智の幸福を思つた……何物かを探り得て男の沈默が破れたとしても其何物が自分等を如何する事が出來樣。

徒らに自己批判や自己解剖に疲れ果てた彼女はもう意地も主張もなく、只男の情意の自由に凡てを捧げ盡したい樣なたよ〳〵とした氣になつて來た。

二人の間は依然として鼬ごつこをして居る丈けで進まなかつた。其中で千代枝は凡ての理智を睡らして一瞬時でも情意の奴隷になりたい、與へ盡した殉敎者の滿足を得たいと願つた。そして精三の力の内に不可抗な誘惑を探り得て、流れるが儘、消え去るが儘其誘惑に身を横へたいと願つた。が、千代折の小さい小さい自尊心が折角の企てを無意識のうちにどし〳〵破壞して行くのだつた。

千代枝は恁うした二つの葛藤に苦しみ乍ら色々の揷話を造つた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

天の川が薄つすり見え出してネルの肩に冷々した風の快い夕、丁度泊りに來て居た從姉と精三と三人でとりとめない話に夏の夜を更かした事であつた。いつも一つ處に出合はない三人の話がだん／＼とぎれ／＼になつて窓の外は靜かな沈默の空に星がきら／＼して居た。

『千代枝さんはこの頃大人しくなつてちつとも唄はなくなつてね』

恁那事を云つて從姉は窓に寄掛り乍ら讃岐の院を唱つて居た。精三は書棚から引抜いた小さい本をあちこち見て居た。三人のばら／＼にはぐれた氣分が何時迄も集らない中で千代枝は段々滅入つてゐた。遂に戀人を前にして押へ切れない寂寥に淪ちて行く苦しさ堪へかねてつと男の膝に顔を置いた。そして從姉の顔を見乍ら無理に男の口から洋酒をつがせて

『お文さん呆れて？　呆れなけりや貴女もゑらいは』

そして何時迄も體を起さなかつた。

又或時などは眞夜中の二時頃男の家の芝折戸を開けたりなどした。然し止み難ない力に動かされたいと云ふ意識的の要求に、强ひて沈滯した感情を掻き亂しては故意に衝動の中に淪ち樣とあせる丈け、凡てが品位のないいやらしいものになつて了ふ事を又千代枝は苦

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

むのであつた。

千代枝は戀しい人を思ふ儘に戀ふる事さへ許さない自分を呪ひ乍ら苦しい日を送つて居た。赤い芽の出揃つた綺麗な要垣の上にほろ〱散つた紅梅の花瓣もいつか土に返つて、柔い太陽が萬物の締木を緩める樣な緩かさに輝き出して、都は何處も彼處も花に醉ふ人の群で一杯になつた。彼の女の從姉や妹達もお花見や演奏會やボートレースやと大抵家に居なかつた。そして出際に

『戀人さんは體に黴が生えたと見えますね』

などと云つて居た。

そんな中で千代枝は雪の日に安火を抱いた樣な懶い氣分で部屋の外へも余り出なかつた。梅もどきが赤くなつてから向島が葉櫻に變る迄の永い間、千代枝は精三と外出を共にした事は余りなかつた。二三度夜の町を歩いた事と、柴又へ何魚を味ひに行つた事位が主なものだつた。其麼時二人は大抵無言で歩いて居た。けれど相應にスヰートの氣分にもなつて居るのではあつたが、『では左樣なら』と云ふ時には何時も中途半端な物足らなさを感ずるのであつた。そして其物足らなさがスヰートの氣分を消していつ迄も殘つて居た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

千代枝は戀を握り乍ら不明瞭な日許り送つてるうちに又時が過ぎた。雨毎に色を増す新緑の葉末もいつか茂み合つて、油蟬の暑さうな音を蔽ふ夏となつた。千代枝はもう堪へられなかつた。何でもいゝこのだら〳〵長く煮え切らない生活がきり換へられたらと思つた。さう思ひ出したら千代枝は一日も靜乎して居られなくなつた。それで自分が遣つて見たいと思つた事のある下宿屋を見がてらと思つて本郷の口入屋を一軒〳〵步いて見た。そして自分の生立から考へて斯う飛び離れた行爲を取る事が興味深くも心持よくも眺められた。

『お前怎うして恁麼家へ來たの。そりや下宿屋としては此家などはいゝにや違ひないが、まだ外にいくらもいゝ家がありさうなものだがねえ』

文官試驗の準備をして居た何とか云ふ人が二度も三度も繰返し云ふので、

『下宿屋の姐さんには向きませんですか？　これでもお茶屋の仲居位は務まる積りですのにねえ』

千代枝は膳部を持つて長い廊下を出つて階段を下りる時一人微笑んで居た。

はじめての夜お客へ出すバナヽを二本殘してあつたのを半分に折つて

『みよちやんお上りな』とお神さんの云ふのを聞きながら千代枝は默つて新聞を見て居て、二三度繰返される迄それが自分の名であつた事に氣が付かなかつた事を思ひ出しては後迄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よく獨りで笑ふのであつた。

此麼日も僅か五日で家人に見付つて了つた。千代枝は家を出る時勿論これが精三との終末だとは思つては居なかつた。相方の未練がこの儘では終らないとは思つて居た。然し精三は千代枝の今度の行動を自分の不得要領に對する憤怒からなと思ひ込んで、酷く自身を責め乍ら千代枝を勞はつた。千代枝は大きい柔い翼の下に隱れた樣な安心と共に、男の前にひれ臥して只管愛撫を待つしほらしい女の樣に自分が見えた。然し其麼幻影は本物にならないうちに又消えて了つた。けれど一日一日と離れられない程男が戀しくなつて行つた。

何時か秋が來た。蜩が可愛らしい聲で凋落の前振を唄ふ夕、精三は千代枝の部屋に座つた。

『僕ね今度國へ行く事になりました』

斯う云つて女には背いた方の椽に出て居る實の多くなつた鉢植のアラセイトーを見て居た。

千代枝は何か云はふとして默つて了つた。男の言葉が何の事なのか、如何云ふ意味なのか見當が付かないので靜平と次の言葉を待つて居た。男も口を開くのを避けて居る樣だつ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たが暫くして、

『何時迄遊んでも居られませんものね』

今度は女の顔を眞ともに見て笑つた。

『ぢやもう佐渡へ歸へりつきり？』

千代枝は不意に突き當つた物の意外に大きいのに面喰つてどきまぎして居ると

『まさかさうでもないでせうが鑛山に出る事にしました』

『で何時』

『明日の夜行で』

千代枝はとつと突き上つた胸の塊を力一杯押し付けて相手の顔を凝視め乍ら、撚がれて居るのぢやあるまひかと思つて見たが、膝に目を落して莨を弄んで居る男の素振りは其麼疑ひを打消して了つた。千代枝は恐い顔になつて

『今を隱して被入つた?!』

『嫌やだつたんです。其麼話をするのが』

『默つて被入つたつて事實は來るぢやありませんか』

精三は千代枝の怒つた眼を見ると幾等か誇らしさうに、然し淋しさうに笑つて

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『母が僕と離れて居ると云ふ事が餘程辛いと見えるんです。此度の口だつてね、僕の知らないうちに大方話が出來て居たんです。もう僕には兩親の前を繕う言葉もなくなつて居ますからね』

千代枝には男が戀を捨てて行くのか戀を抱いて行くのか解らなかつた。只落日の前に立つて沈んで行く日を如何する事も出來ない樣な終末を感じた。佐渡には精三を戀し拔いて居る女のある事も千代枝は知つて居た。

ふと千代枝は欺かれた樣な反抗的な氣分になつて、

『いよ〳〵お父樣のお宅へお歸りになるんですね。私は騙されちやつた』

とそふと精三は腹立たしそうに、

『誰が騙したの？　何の事なの千代枝さん』

千代枝は今目の前に居る男も明日になればその眼の屆き樣もない遠い處へ消えて了ふと思ふと急に悲しくなつた。そして張り裂けさうな胸の中に男の袖を捕へてずる〳〵引かれて行く女の醜態を見た。それが醜態であると意識する餘裕もない程、只執拗に男を欲して居た。

千代枝は唇を嚙んだまゝ默つて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『それは何にも出來なかつたです。貴方に何にも殘す事も出來なかつたんですからね。然し今になつて其麼言葉を貴方から聞かうとは思はなかつた』

千代枝は何の意味もなくて云つたのだつた。只何とかして男の心を飜へさせられたらと、思ふ許りだつた。男は

『僕は俗人だ。骨肉と云ふものには不思議に縛られて了ふ。然しあんな孤島に何時迄埋もれるもんですか。屹度出て來ます』とも云つて居た。そして十二時を聞くと門の扉に掴まつて背いとる千代枝に別れると一度も振返らずに角を曲つて了つた。

千代枝は赤い袋の緋房をすつと解くと螺鈿を散らした漆黑の鞘を拂つた。身は七寸の突身でぱうと漾つた匂ひが細かい亂れの上に霞んで居る。千代枝はいつか男の本箱の上から持つて歸つたのを、

『千代枝さん彼れおよこしなさい。せめて彼麼ものからでも男性的氣分を受けなければ今の僕は實際心細いですよ』

ようか度々斯う云ふのを千代枝は惜しがつて返さなかつた短刀である。彼の女はこの短刀を見た時から謎の樣にこれが自分の胸を刺す時がありさうに思はれて居た。そして千代

枝が死を思ふ時のいつも背景になつて居た。錦の袋と冷い突身と赤い血とは死を彩るに屈强の様に思はれた。『死を飾ると云ふことは死を見えにするので恥つべき事だ。徹底した死の境地にそんな虛榮があつてはならぬ』有名な學者が斯う云つたと聞いて、『死を飾るんぢやありやしない、最後の一瞬迄も生を彩るんでせう。ね』斯う云つて千代枝は精三と笑つた事があつた。

男が自分の前に居なくなると千代枝は意識がはつきり歸つて來た。そして精三が都を去ると云ふ事實を自分を去ると云ふ事と區別する事が出來なかつた。死ぬより辛かつた苦しい努力も恁うした結果を償ふ價値もなかつた。今でさへその執着を捕へられない者が百里二百里の異鄕から何が答へられ樣…………

千代枝は悲慘な過去を振返つた。そして至る處に血にまみれて呻いて居る自分を見るのである。それも凡て徒勞に歸して、男の毛筋一筋も自由とし得ず萬事が終る……千代枝は堪えられなかつた。此上無能な無價値な自分を自分の前に晒すに忍びなかつた。

千代枝は穗先をぢつと眺めた。

男は明日自分を離れる。その前に自分が冷くなつたら臘の樣な肌が男の涙に浸るだらう。そして男は取り戻せない悔恨に悶え乍ら女の名を呼び續けるだらう……其時こそ自分は男

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を得られる。
千代枝は冷い刀の上にぽたり／＼泪を落した。
その時は自分は死んで居る。死んで居るのだ。

瞬間に『男と一緒に死ぬ』千代枝の腦髓をすらりと過ぎた。と千代枝は刄を鞘に收めた。そして絞の襟許を引締め乍らそれを帶の間に深く差込んで小窓の板戸に手をかけた。ズルッ、ズルッ、ズルッ、と一分位づつ戸の敷居を辷る音が暫く續いてから千代枝は、机を踏臺に窓に乘つた。そして兩手を閾にかけて體をはめに添ふて長く垂らしながらひいと飛ぶと、二町程の道を夢中で駈けた。そして百姓家造りの門も何もない家の庭口へ廻るさ、何時も開き放しの打戸が今日は如何しても開かない。暫く戸の周をうろ／＼した後彼の女は生垣の疎らな處を押廣げて其處から身を入れた。

千代枝は雨戸の外でぴたりと留つた。廊下の曲の手に行き詰つた部屋に此家の人達が臥せつて居る事を知つて居るので、其方へ氣を置き乍ら、外から輕く戸を叩いた。一寸間を置いては又叩いた。男の名も呼んだ。然し始めの靜寂が歸つて來る丈けであつた。彼の女はもとがしさうにいら／＼して、戸の一枚を戸袋の方へ押した。すると案外内からは錠も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

棧も下りて居なかつた。千代枝は泥だらけの足を拂つて内に消えた。

疲勞に熟睡し切つて居る男を漸々に搖起して外へ出ると千代枝は自分が芝居地味て見えた。

『此麼芝居ぢみた眞似して許して下さい』

此麼事を云つて居た。

彼の女は只刃を抱いてるといふ事を知つて居た丈けで何處へ行かうとも考へ付かなかつた。男も知らない。が二人はいつか權現樣の高い石段を昇つて居た。そして廻廊に腰を下すと男を刺さして貰ひたい事を告げた。

『分つて居ます』男の聲も落付いて居た。摺れ合つて居る二人の間には濃い暗が漾つておた互の顏と顏を遮つて居た。やがて男が

『死ぬ程の事は僕にはない』

押付ける樣に云つた。そして續けて

『僕死にません』と明斷り云つた。千代枝は臆病な男の云ひさうな事だと思つた。

『貴女は何だから死ぬと被仰るんです？』

『今迄の努力が無價値になります』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

息がはづんで居た。

又長い靜寂が續いた後

『貴方のさう云ふのは尤ですけどね、死が努力の最後だとすれば僕はまだ其處へは行つて居ません。死ぬ前に務める餘地が幾度もあります。死ぬのが嫌やで僕は云ふのぢやありません。死に對しての未練はあつても死に對する恐怖丈けはないのですから……今死んで僕何が殘るでせう。貴方にさへ誤られて居る……それ丈けでも僕は死ねない』

男は慄りなかつた。自分に添はれないなら死んで呉れと云ふのだつたと思ひ乍ら男は此麼死を突付けられて悲しかつた。千代枝は後半恐ろしく震へを帶んだ男の聲を聞くと、男も泣いて居るのだと思つて凄蒼な氣がした。然し直、死を前に見ても死に得ない男を思ふと斯うなるのが必然の樣にも思へた。そして此麼結果を充分に豫期し乍ら獨り芝居を仕組んで居る樣な自分が悲しかつた。する事爲す事が凡て芝居に了つて了ふと云ふ事は、彼女には死ぬ事よりも死ねない事よりも辛かつた。

男に短刀を奪はれて了ふと突放された樣に冷い地に身を投げた。そして

『私のする事は皆駄目になる。皆駄目になる』さう云つて青苔のぬる〳〵辷る地の上に身

悶えして泣いた。

千代枝は長大な體を狹い六疊に横へて本堂から聞えるお經に拍子を合せて爪先で疊を打つて居た。其度に白い足袋の上に襦袢の赤い裾が艶めかしくこぼれた。

『あれ先刻の小僧でせう。商買つて不思議なものね。あんな可愛い小僧さんのお經でも何處か有難く聞えてよ』

『いくら可愛くてもお衣を着てますせ千代枝さん。ハヽ――』

Fは机の前に座つて居た。

『何だか薄寒い日ね。あの小僧さんと向島のお風呂へでも出かけ樣かしら』

『さうだ。それがいゝ。少くも龍公の浪花節よりやお座敷向きですせ。なむからたんのとらやあやなんて云はせ乍らお酌させるなんざあ頗る振るつた最新式ぢやありませんか』

本箱に背中を凭せ乍ら慓怪な顏をして居るのを見て千代枝は堪らなさそうに笑つた。

『馬鹿ね貴方は』

『千代枝さんはこの節綾菊の處へ行くつて本當ですか』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Fは千代枝の默つて笑つてるのを見ると
『驚いたなあ。何處まで發展するんです。彼奴綾菊つて奴、すてくれ者ださうぢやありませんか、亭主の前で堂摺と引入れてふざけ散らして亭主の泣き面を肴にしてやがつて……』
Fが獨りで饒舌り立てるのを聞いてるのか聞かないのか千代枝は佐渡節を唄ひ乍ら莨を吹かして居た。
『義太夫なんて器用な事は貴女にや出來ないから佐渡節でも敎へて上げませう』
『知つてますよそんなもの』
『おやく。でもまあ本場仕込みのも聞いて御覽なさいな』
私やお江戸へ勉强に行くがよ、あとに花置く枝折るな。
枝も折るまい折らせもすまいよ。と心置きなく行かしやんせ。
『如何? 丁度貴方見たいね』
『千代枝の高い澄んだ聲が庫裡の奥に通つて響いた。彼の女は「佐渡の金山この世の地獄よ、昇る梯子は皆劔」と悲調を帶びた哀音を金山の雪に響かせて通ふ坑夫等の佐渡を思ふた。
『體から、顏から眞黑に煤けたあの坑夫の喉から如何して彼麼哀傷的の聲が流れるかと思ひますね』

『さうでせうね第一千代枝さんに自分の行爲を唄にし樣とかゝつて居た最中に聞いたんだからなあ』

Ｅは撰つたび笑みを持つて千代枝を見た。

『も一度出かけませんか』

『えゝ、何度でも。相手さへあればねえ』

『ぢや僕とは』

『結構』

二人は笑つた。

『エヽ、今なら誰の後でも追ひ掛けますよ。彼の時分見たいにおぼこぢやないから』

『なんかつて其貧あの頃が忘れられないんでせう』

『さうね。何と云つても一生懸命でしたからね。恁う笑ひ僻がついぢや首切られると云つてもあゝ一生懸命にはなれませんものね。其代り彼れ位の事はいつでも笑ひ乍ら遣つてのけるは』

『結構です。もう澤山です。さう吹かれちや遣り切れませんからね』

呉服屋の番頭などがする樣に首を縮めて二段に會釋し乍らＦは笑つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『フヽヽ。小供が小母さんごつこをしてよくませた事を云つては面白かつて居ますけど本物の小母さんになつちまうと余り面白くもなささうですね。さう云つた樣に本式に焦つちや駄目ですけど、只戀ごつこをして遊ぶ位面白い事はないでせう。深入しないで其麼情調に浸つて居られるんですからね。戀は神聖にして絕體なりなんかいつて騷いだ處で、さう御都合よく問屋が卸しやしませんよ。人の心はさて置いて自分の心がさうお安くは動かないんですから。何もあんな寒い思なんかしなくてもいゝのよ』

千代枝が始終茶化した樣な顏をして居るので眞面目なのか冗談なのかFには見當が付かなかつた。で

『何時頃でした彼方へ行つたのは』

『半年になりませんよ。もう碓氷は雪でした。橫川つて停車場でしたが、水溜めの周りは氷柱が一杯でした』

出たり這入つたり出たり這入つたりする墜道の切目切目を粉雪が窓を打つて居た。千代枝は不意の出來事に恐れて男が逃げやしないかと云ふ危惧に行く事は知らさないであつたので、始終行つた先に男が居なかつたらと恐れ乍ら新潟へついた。

『新潟から船に乘つたんですよ。直江津とか出雲崎とかから乘つたらいゝかもしれません

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んが何だか眞直に行つちやつたんです。佐渡は四十五里波の上なんて云ひますけど其麽にありやしないでせうが、何しろ小つぽけな汚い船でしてね。流石の私も涙がこぼれたわ。明方つて淋しいものね。また眞暗なうちに信濃川を浮船で行くの。島流しに合つたお姫様の樣に只矢鱈と涙が流れるの』

『其麽思ひして行き乍ら何だつて歸つて來たんです。彼處には丸木の御所とか何とか云ふのがあるんでせう？　何しろ離小島と來て居るんだから竹の柱に茅の屋根つてな調子に行きさうなものを』

『ハツヽヽヽ』

千代枝は丸い華かな聲で包んだ下から寂寥が覗いて居る樣な笑聲を引いた。清元の師匠が『彼の人の笑聲は怎うかするとひやつとするよ』と云つたと云ふ聲である。

『駄目よ。夢我夢中で一直線に突走つて居る樣でも、自分のやつてる事が一々見えるんですからね。何しろ自分が危かしいんですね。だもんだからさう明晰り意識にして居ないものの自分より餘程相手のパッションに期待して居たんですね。何、其麽パッショネートなんぢやない事も承知しては居たんですが。打突かつたら物にならうと思つたのが駄目でした。打突かり樣が丸で足りないんです。怎うも面と對ふといけない。二人ともはにかみやたつた

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んでせう』そしてフヽヽヽと笑つた。

千代枝の其寒い旅も佐渡節の哀調を髄に泌ませた丈けで、惨ましく破れた心を抱いて十日目に又その汚い船に乘つたのであつた。とうと千代子は右し樣と云ふ、左し樣と云ふ、中間に血まみれで動搖してる彼の女の胸を抱いて二度都に歸へつてからは、何が苦しかつたのか、何を苦しまなければならなかつたのか疲れ切つた彼の女には凡てが解らなかつた。そして血まみれの胸は現在を其時々に糊塗して歡樂を追ふ樂な生活に許り走る樣になつた、彼の女が家人に隱れて淸元の稽古をしたり義太夫を習つたりするのも、淨瑠璃其物が覺えたいと云ふよりはそんな空氣が懷しく、そんな女達が面白いのだつた。

いつか西へ廻つた日が連翹の垣に赤々と輝いて看經の聲ももう止んで居た。

『お小僧さんに嫌はれてとうと向島へも行きそこねたし……』

千代枝は座り直して浮腰になると、Fは

『〇〇にや朝太夫が懸つてますよ。行きませうか』

『義太夫は駄目よ。しんみりし過ぎちやつて。ありや如何しても二人で聞くもんぢやない』

柱に背中を凭せて長い足で靑竹色の裾を蹴乍ら皮肉に笑つてる千代枝を見ると

『一體千代枝さんは女の僻に女が好きですね』

『男は面倒臭いから。直女はとか男はとか比較的の言葉を使ふからよ。女同志なら同志打だから構やしない。尤も默つて聞くものなんか何だつていいんですがね。兎に角よかつたら一緒に被入らない？』

『何處へです』

『何處だつていゝでせう。また私にも極まつてやしない……』

千代枝は庫裡の廊下を大股に歩き出した。（をはり）　――三月十五日晝――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

別れての二三日 ―加藤綠―

ああ既ういらつして了つた。ああ既う電車も見え無くなつた。」と芳子は茫然と淋しさうにして佇むて居た。

何だか永遠の離別ででもあるやうな氣がして星が岡の茶屋で種々語り相つたのは、ほんの十分前――星が岡は綠の若々しい木の葉に包まれて、眞晝の光が柔かに差して居る、一重櫻は散つて八重櫻が盛りの春の岡は長閑な空に芳子にのみは悲しげに見えた。

ああ、什うしやうとやる瀨ない心の寂寞を抱いて電車にも乘らずに歩き出した。

芳子の心には種々と男の心を考へられた。什うも分らない、男つて皆ああした思ひ切りのいい、冷膽な者なんだらうかと思つた。

電車が幾臺も芳子の左の方を走つたが、少しも氣付かなかつた。お濠の水が岸の樹々の若葉を映して、紺、碧の色に白い花片が點々と散つて、それが動きもせず、咲きかけた白躑躅が水の中を覗いて居る美しい樣にも眸を止めず、菫や蒲公英が空氣草履の下に敢果無

くも踏まれて行くのも一向心付かず、芳子の胸は唯々鉛のやうな鈍い重い物に押しつけられたやう、朗らかな春の空が、若い人々の爲めに輝いて居るをも仰がうとはせず、影のやうに歩いて行つた。

斯うした淋しい春を送つた事は芳子には幾度もあつた。が戀を知つてからは過去の悲しい事の總てを忘れて了つて居た。然しそれもほんの束の間で、再び今日のやうな悲しい目を見る事となつた。それは永遠の離別では無い、二三ケ月の末には相い見る事が出來るのではあるが、何だか二人の心に此の暫時の離別が非常に、暗い印象を與へた。之加も其の暗い影は一生二人の心に印せられて拭ふへからざる物のやうに思はれた。

芳子の心は急に焦々して來た。電車に乘つて此方を見た良人の顏――白い小さな美しい輪廓を持つた良人の顏が眸に殘つて電車の後を追ひかけて、引き戻し度いと呼吸がセカセカ云ふ程に心が踊つた。

未だ新橋へは着かないだらう。電車で後追ひかけて汽車の出る前に……と芳子は不圖初めて電車が自分の側を通つたのに氣が付いて顧つた。而して足を止めた。

駄目、駄目と良人の冷膽を思ふにつけて、自分のやる瀬ない心が口惜しく思はれた。

芳子は良人が昨年『祖父大病』と云ふ電報を受け取つた時の事を思つた。直ぐ其の電報で

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三百里もある故郷へ良人は歸る氣になつた。愈々卒業試驗を受けると云ふ間近になつて、それのみか總てを捨てて歸る良人の心が恨めしくなつた。逃れるのだ。煩しい家庭から、私を捨てて逃れるのだと思ふと女心に男の身勝手が口惜しくも思はれた。手紙など決して送るまいとさへ考へた。

芳子は何事も心に包むで、一人で氣を痛む性分なので、別れに際して何事も口には出ださなかつただけ、それだけ口惜しまれもした。

芳子は今は今の悶への總てを何者にか慰やさうとした。忘れ度い。此の厭な考へから逃れ度いと思つて種々の物を心に探つて見た。

何物もない。現に若い其の眸に入つて慰籍となるべき春の華やかささへ何の價値も無いのである。

芳子は家に歸るのがいかにも辛かつた。

家には實の弟や妹が居る、それが芳子には面白くないのである。

良人の逃れ去つたのも無遠慮な弟妹の爲めではないかと思ふと自分も永遠彼の家には歸らず何處とも無く漂浪して居度い氣がした。

足は知らず知らず赤坂見付迄來て了つた。何氣なく電信柱を見ると「藤本小兒科醫院」と

廣告してあるのが眸に止つた。と同時に昔の親友の嫁入先なるを思ひ出して、足は直ぐ其の方へ向つた。

友の新世帯は什麽有様だらうとの好奇心が湧いて、手紙で委しく知らして來た心當りの邊を探すと直ぐ四角な瓦斯燈に犬張兒の書いてあるのがある。其の前に芳子は彳むだ。

玄關は直ぐ見透される。女の下駄が一足叩の土間に脫いである。

芳子は思ひ切つて入つた。而して髮の亂れを指先で一寸上げて、心持襟をかき合はせて

『御免下さいまし。』直ぐ聲がして障子が開くと同時に友の小さい顏が現れた。

『おやまあ。』と驚いて、見張つた眼に直ぐ笑つて、

『さあお上りなさいな。まあお珍らしいのね。』と云ふ聲が昔と變らぬのが先づ嬉しく、

芳子はいそいそと上つて、友の背後について勝手の方から座敷へ出た。

『取り散らしてあるのよ。』と昔の見覺えのある銘仙の着物を縫ひ代へて居るらしく、散らした布を片よせた。

『御邪魔なんでせう。』

『いゝえ。少しも。私一人で淋しくて居るのよ。よくいらつして下さつてね。』と嬉し相に云ふ。

芳子は今更のやうに友の昔と變つた赤い手柄の丸髷姿を見た。

小さい美しい嫁さんと言ふ感じがされる、齡は芳子より一歳下で十九歳。小さい顔の眼の切の長い、愛嬌のある口の心持大きい女。新世帶の何となく忙し相で、落着がないやうである。

『貴女暫くね。結婚なすつたんでせう。』と友はお茶を入れながら斯う芳子に聞いた。

芳子の顔は何故か矢張淋しい暗い色となつた。

『結婚と云ふのでもないわ。』とそれでも淋しく笑ふ。

『あら何なの？』

『同居だけよ。』

『同居なすつていらつしやるんなら結婚なすつたと同じだわ。まあ厭な芳子さん。』と相變らぬ調子である。

三坪ばかりの庭には構はないらしい粗末な盆栽が四五鉢、軒に届かない位の小さい楓の樹の其の葉が日影を受けて瑞々しく、薄紅の葉が透明に見える。雨蛙が一疋萬年青の葉の上に居る。

友は幾度も立つた。芳子は凝乎と庭を見て居た。

『既う蛙が出るやうになつたのね。』と獨言のやうに云つたのが友には餘程變に聽こえたらしく

『まあ芳子さんは相ひ變らず變な事を云つて居るのね。どうしたの。』と貰ひ物の最中を持つて來て斯う云つて芳子の顏を見た。

『今日ね、送つて行つた歸りなの、』

『エ？誰を？』

『誰を？つて……あの――』と自分の良人を何て云つていいのやら判らなかつたが遂に

『平田を』

友は芳子の言葉を直ぐ解した。

『おや、何處かへいらつして？』

『國の御祖父さんが御病氣ですつて。』

『そう、それはお淋しいのね』と同情のある言葉に芳子は友の眸の中を見た。

『私もね、お伺ひしやうと思つて居ながら、斯うなつて了うと何にも自分一人の考へには行かないものよ。新世帶でせう。全く苦しいの。』

『それは仕方がないわ。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『書生は一人居るんですけれど學校へ半日づゝ行くのでせう。お勝手の事から藥局の馴れない事迄私一人でするんですもの。全くやりきれないことよ。でもね變なものよ。一軒の家を持つて見ると慾が出るものね。』

『さうでせうね。』

『一錢でも蓄めてと思ふのよ。ですから自分の物など決して欲しいと思はないわ。櫛一つ着物一枚だつて欲しいとは思はなくつてよ。唯ね、自分なんて者を思ふ替りに良人、唯良人の事を思ふわ。外へ出ても自分の小使ひ錢迄儉約して良人の好きな物を買つて來るとか云ふやうになるのよ。變なものね。』

芳子はなるほどと思つた。

自分が平田同と居するやうになつてから弟妹から疎まれるやうになつたのも妻らしい愛情を以て良人たるべき男に事へ、今迄弟妹に對した情愛を一人の男に捧げるやうになつたから自然と今のやうな風に立ち至つたのだと思つた。

『それに何よ。今迄、電車に乘つても、又道を歩いても、自分の未來の良人とは彼のやうな男か、此のやうな男かと自然と若い男に注意されたけれど、結婚して了つたら全く良人一人より他、什麼美男子を見ても戀しいとは思はないものね。女は全く正直ね。』

『全くね。そこへ行くと男は罪ね。』と何となく云つて了つた。

友は何か考へて居たが、

『斯うして貴女と向ひ相つて居ると昔の何の苦勞もない時代を思はれるわ。』

『今に猶昔の事が戀しい時代が來るんでせうよ。』

『彼の結婚式と云ふ物が全く夢のやうなものね。私全く何にも知らなかつたわ。後から思ふと朦朧と叔母さんや、姉さん達の顏が眸に入つたやうな氣がしましたけれど。』

『左樣でせうね。什麼風?』

『自分の身體を自分で少しも思ふやうに出來ないんですもの。衣服を幾度も着替へさせられたり、髮を結つて貰つたり、お湯に幾度も入れられたり、それが皆人の手を借りて居るんですからね。』と云ふ。

『それでお家を出る時は悲しかつて?』

『悲しかつてよ。車に乘つて、皆に送り出された時はつい聲を擧げて泣いて了つたわ。姉さんが來て顏を正して下さつたけれど、それから大久保の家迄行つたのが、少しも知らなかつたよ。何が何だか少しも……式の時など良人の顏は勿論、盃さへ目につかなかつたもの。』と友は無邪氣に話して云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

芳子は晴れやかな友の顔に對して非常に淋しい顏をして居た。

芳子には其の樣な時はないのである。

平田と同居して三月とはならないのであるが、何となく男と云ふものが不可解になつて多くの疑惑が折々芳子の美しい愛情を曇らした。自分には夢のやうな美しい希望と光明に輝く瞬間は一生に既う一度もないのである。學問した男と女と相ひ愛して同居して、直ぐ愛情其の物を批判し、筆に弄んでさうして醒めて行くを凝つと客觀して居なければならぬのかと思ふと、堪へられぬ寂莫を感じた。

友は箪笥から式に用ひた時の晴着を出して見せた。又極めて無邪氣に良人との寢物語りや立ち入つた事迄を語つて一人で晴れやかに笑つた。

芳子は鮨の御馳走にあづかつて矢張同じやうな暗い心を抱いて外へ出た。

又やるせない思ひが胸を押しつけた。

良人の事が頻りと思はれる。

今夜からの淋しさを思ふ。

弟妹の冷かな眸を思ふ。

是れから何處へ行かう。而して此の心の苦悶を什うして忘れやうと考へて見たが別に何

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の事も思ひ出されない。

電車は皆滿員であつた。

葉櫻見の歸りもあつた。郊外散歩の歸りもあつた。手に蓮華の花束や、紅の椿の枝山吹の花の枝を持つた者もあつた。

春の陽氣に打たれた樣な顏をして皆電車に乘つて居た。

芳子は何とはなしに市の賑ひや、人の顏を見乍ら家に歸つた。

妹達は學校から歸つて來て居るやうであつたが、芳子はツイと玄關から二階へ上つて了つた。

二階の二人の部屋は少しも變つた事が無く机の上には、昨夜良人の讀みかけの英語の小本が開いた儘で、今朝手紙を書いた硯の水も涸かなくつてあつた。

芳子は矢張什うにかして心を慰めやうとした。着衣を着替へもせず茫然机の前に佇むで居た。

此の時パタパタと足音がして二人の妹が登つて來た。

『姉樣歸つたの。お琴敎へて頂戴な。待つて居たのよ。』と大きい方の妹は芳子に斯う云つて、床の間の山田琴を持ち出した。其の下の妹、何れかと云ふと姉の方より優しい妹は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

笑ひながら姉に手傳つて綆沙の袋を取つた。

芳子は默つて二人のする有樣を見て居た。

上の妹は既う爪をはめ出した。

『まあ糸を合はせなくつちやあ駄目ぢやあないの。』と芳子は斯う云つて妹達の傍に座つた。

『義兄さん行つてしまつたから、姉さん毎日敎へて頂戴な。』

『まあ何故義兄さんが居なければ?』

『たつて二階へ上り辛いもの。』

『構はないじやあないの。』と芳子は淋しく笑つて二人に容易い曲を二つばかり敎へた。

二人の妹は常になく姉に打ち解けた。而して姉の氣嫌を頻りにとつた。

餘り騷がしいので、次の二疊に勉强して居た芳子の弟は堪えかねたらしく、『少し靜かになさい。』と怒鳴つた。

すると二人の妹は顏見合はせて默つて了つた。

此の弟と云ふは高等學校の入學試驗を受ける爲めに毎日牛乳や、卵を飮むで勉强して居るので、兄さんの勉强の邪魔をすると云ふ事を皆怖れて居た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妹達は間もなく降りて行つた。

芳子は一寸の間流石親身の妹に慰められて居た。

是れから何を爲やう。晩迄には雜誌でも讀むで、夜は手紙を二三通書かうと本箱の上の白磁に挿した紅の西洋花を見乍ら考へた。

着衣を着替へて下へ降りて行かうとすると弟が呼び止めた、

『何か用？』と芳子は弟の鋭い眸をチラリと見て今降りやうとして足を止めた。

『姉さん。義兄さんが歸つて什うするんです此の家を？』

『什うするので？義兄さんだつて二三ヶ月經てば歸つて來るんだわ。』

『だつて、義兄さんが居ればこそ這麼大きな家に住む事が出來たんです。義兄さんが居ないとしたら十二三圓も出して馬鹿馬鹿しい這麼家に住むで居る事は出來ない。又御父樣だつてさうさうお金を出しては下さらないでせう。』と鋭く姉の顏を見て、

『抑々此の家を貸りたのは義兄さんなんです。自分は國へ歸つていいけれど、後に殘つた私等が困る。全く困る。什うしたらいいのです姉さん。』

芳子の顏は蒼くなつた。

弟の言葉も無理ではない。良人の身勝手はもとから自分には判つて居る。小供ばかりだ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

からとて良人の同居を父は許した。それも長い間の下宿住居に飽きて家庭住居を憧れた良人は自分から強いて來たのである。それだのに家庭へ這入つて見ると意外の事ばかりだ。夢見て來た夢は醒まされて行く、何となく打ち解けない弟妹の中には一日ましに居辛くなつた。遂に祖父の病氣を口實に逃れ去つた――それを思ふと又しても堪えられぬ恨めしさが芳子の心に浮んだ、然し芳子は弟の言葉に屈するは厭であつた。

『平田だつて其の位の事は知つて居るでせうよ。私から金子を要求するからいい。』と既う口惜しさ悲しさが起つて來て、芳子の眸には涙が溢れさうになつた。

芳子は下へ降りるのを止めて机の前に歸つた。

平田と同居するやうになつてから弟妹の心は自分に對して漸々と冷膽になつて行く事、自分が今迄家事の一切を引き受けて權利をふるつて居て、父からは同情と愛情を充分に受けて居たものが、此の頃は全くそれも得られなくなつた事、金錢に對しては冷膽な振舞の多い平田の爲めに種々と弟妹から誤解されて、遂に全權を弟に渡して終つて、僅月に二圓の小使を貰ふやうに自分からした事などを考へると女が一人の男の爲めに何物をも犧牲にすると云ふことが何だか愚に見えて來た。それ迄にしても女の眞心は男には判らないのだと口惜しまれもした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕方迄に幾度も妹達は二階に登つて來た。平田の居る時は殆ど二階になど他人の室のやうな氣がして登つて來るやうな事はなかつた。

夕飯に芳子は降りて行つた。

婆やは頻りと芳子の氣嫌を取つた。

『芳子樣。今夜から二階でお一人ではお淋しいでせうから、下へいらつしやいまし、ねえお孃樣。』と直ぐ下の妹の顏を見る。

『姉樣來るといゝわ。一緒に寢ませう。』

芳子は唯微笑して居た。

飯が濟むでも芳子は二階へ登つて行かなかつた。

床が延べられても未だ下に居た。而して非常にはしやいで妹達と小供のやうに騷いだ。昔習つた踊踏をしたり、琴歌を歌つたり終ひには床に這入つた妹の蒲團を引ぱつて裸體にして了つたり　婆やを捕へて元氣よく喋舌つて見たり、散々騷いだ結句、下に寢よと云ふ妹達の言葉をも聞かずに二階へ上つてしまつた。

燈火のない部屋に月の光がさし込むで居た。芳子は燈火も點けずに床を延べた。而して雨戶も閉めなくつて床の中に這入つてしまつた。

然し眠らうとして眠られない。何たか急に手頼者から放たれたやうな氣がする。「未來」と云ふ事を考へねばならぬやうな氣もする。と同時に刺刺して來て直ぐ床から飛び起きた洋燈に光をつけて枕許へ持つて來て、教科書に學校で用ひて居た外國地理と歴史を持つて再び床に入つつ。

何だか急に心が開いて來たやうな氣がする。男に手頼らない女の瞬間の心が最も自由に起つた。自由、自由、何事も干渉された此の頃を思ふと、籠から放たれた小鳥見たやうな氣がした。

其の夜は夜更くる迄讀書をして居た。

次の日は日曜で、之加も春の暖い好日和であつた。

鶯は朝早くから隣の大きな庭で啼いて居た。

弟の書齋の窓から隣の庭を見て居ると椿がポタリポタリと散つた。

鶴の啼き聲が高らかに聽こえる。

九時頃から矢來に琴の稽古に行つて歸つて來て見ると二階に妹達が居た。文章の上手だと云ふ妹の友達が遊びに來て本箱をあけつて居た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『姉さんが歸つて來てよ。遊びに行きませうよ。ねえ姉さん、高田の方へ散歩に連れてつて頂戴な。』と次の妹が云ふ。

『行きませうか。』と芳子の心は急に春めいて何處かを小鳥のやうに飛び廻つて見度いやうな氣になつた。

晝飯を濟まして妹二人と其の友達と、それに弟迄加へて郊外へ遊びに出かけた。八重櫻が盛りで、一重櫻の遲ひのが雪のやうに散つ居た。

芳子は今日は急に若やいで、足も輕らかに唱歌を小聲で妹達と同じやうに歌ひ乍ら歩いた。

妹は手にハート袋をさげて居た。

芳子は皆を連れて護國寺を抜けて雜司ヶ谷の方へ出た。青い草、綠の若葉、それが柔い日影に快く人の目に入るのである。

菜種の花は野を派手に飾つて居る。菫や蒲公英蓮華草が草の中に模樣のやうに咲いて居る。白い蝶々は捨てた花に迄とまつて居る。

途中で若い男の二人が手に白菫を澤山持つて帽子に姫椿をさしてブラリブラリと來るのにあつた。近付いて見るとそれは平田の親友であつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『御散歩?』と芳子は立ち止つた。

『貴女方も?平田君は國へ歸つたんですつてね。お淋しいでせう。』と云ひ乍ら去つた。

明い森の中――と云つても大木が五六本立つた䓁原と云つた――に五人は這入つた。而して蓮華草や、菫や其の他何もない春の花で束を作り出した。

紫と、鳶色と、オリーブと薄桃色の模様付の洋傘を開いた儘緑の草の上に投げて四人の女が草の上に座つて花束を作るに餘念なかつた。此の時、芳子の弟――名は時雄と云ふ――が遙彼方の榛の樹の下に生つて四人が様々の姿して居るのを寫生し初めた。

『おいおい君ちやん立つてはいけないよ。』と下の妹を制する、

『賀奈江さん此方を向かないで。』と直ぐの妹を叱りつける、

蝶はヒラヒラと破い人達の間を舞つて居る、漸くに若い人々は此處にも飽きて猶ほ郊外の方へと足を向けた。

鬼子母神の中には美しい花が多かつた。

『芳子は皆を牽いて名物の團子を食べた。

これから近くの廢園の中へ這入つて椿や、山吹を手折つて出た。

主人が歸つたは夕暮で、江戸川の近所は賑かく、軒燈の光が丁度花のやうに見えた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

手に手に春の花を持つた若い娘達を通る人々は顧つて見た。

芳子は全く解放された女のやうな自由を感した。事につけ物につけて「寂寞」は感せられるそれと共に自分と云ふものが明らかに意識されて來た。

妹達の情が何となく舊に復したやう、二月前と同じやうに姉さん、姉さんと慕ひよつた。然し芳子の心の心には平田に對して充分に恨みがあつて、戀しいとか、慕はしとか思ふ度にそれをも思ひ出された。

次の日芳子はお琴から友人を原町に訪ねた。さる大家の小說のモデルになつた夫婦の新らしい住居で、二三度尋ねた事もあるので直ぐ其の家が判つた。

此の時何か頻りと夫婦で論じあつて居たらしく、芳子にお茶を出した妻君の照代さんは『ねえ芳子さん。全く男つて憎くらしいものよ。』と細面の稍劍のある眸に笑つて斯う云つた。

『何ですの?』

『あら貴女方は大變仲が良いつて云ふから、芳子さんなど私の言葉には贊成して下さらないわね。』

芳子は唯笑つて居た。

『ねえ女が子供を生まなかつたら這麼に馬鹿にされはしないわね。』

『そりやあ仕方がないよ、身から出た錆だ。』と主人は沈着の風で微笑を湛えて斯う云ひ作ら、茶餉臺の上に兩肱もたせて煙を吹いて居る。

『憎くらしい！女は子供を生ませられるので少しも活動は出來やあしないわ。』

『意久地が無いからさ。』

『皆男から左樣されるんだから。私、ねえ芳子さん。女が皆獨立して一つの團體を作つて男子に抵抗したいわねえ。』

『芳子さんなど平田君大事として いらつしやるんだ。お前の樣な判らずやじやあないよ。』

『芳子さんほんと。まあほんと!?でも平田さんはお優しいからね。お友達の中で平田さんと木村さんが一番お優しいてつ評判だから。』

『あら噓ですよ。何が優しい事があるものですか。現に捨てられて了つたじやあないの。』

と芳子は眼許に笑つて斯う云つた。

『まあ什うなすつて?』

『國へ歸つたんですもの。』
照代は我味方と云つた樣な顏して、
『まあ平田さんさへ左樣ですものね。芳子さん私の味方となつて頂戴。私全く是れから獨立するわ。』
『あら赤ちやんは?』
『捨てて了ふのよ。是れから 女は良人や、子の犧牲になつてなど居られないわ。自分の爲めに生きなくつちやあ駄目よ。』
『やつて御らうじろ』と主人は相手にしない。
『エヽ、やつて見せますよ。ねえ芳子さん。女だつて人間ですもの、力さへあつたなら男子と同等よ。』
『芳子さん。平田君は何時歸ります! 何にいらつしかつたんです。』と主人は妻君の言葉に耳を借さず斯う聞いた。
『御祖父さんが御病氣ですつて歸りましたんですけれど……中々歸りませんでせうよ。』
『今度は大切の試驗なんでせう。』
『エヽ。ですけれど九月に延ばすとか云つて居ましたわ。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『さうですか、お淋しいでせう。』

『却つて氣樂ですよ。』と芳子は微笑した。

『全くね。』と照代さんは芳子の顏を嬉し相に見た。

此の時次の座敷で赤兒の泣き聲がした。

照代は立つて間もなく抱いて來たは未だ赤味のある顏をした生後二月ばかりの女の子であつた。

乳を含ませながら

『茂ちやんは一生獨立させてよ。結婚などさせないから。私の手一つで理想的な女に育てるわ。ねえ茂ちやん』と我子の顏を覗きこむ。

此の時玄關に跫音がして同居の松居さんが歸つて來た。

『おや。いらつしやい。』と女のやうな聲を出して芳子に挨拶した。

それから暫く芳子は話して居たが、照代の氣焔は容易に消えなかつた。

皮肉の上手い松居さんは笑ひ乍ら照代さんの言葉を皆何の價値もないものにして了つた。

芳子は考へ深い面持をして引き止める此の家を出て直ぐ近くの木村家を訪ねた。矢張友

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人なんである。
格子戸を開けると上り口に男の下駄が澤山あつた。が聲がしないので、出やうとすると襖の音があわたゞしくして妻君の眼鏡をかけた顔が直ぐ現れた、
『まあ芳子さんでしたの。さあお上りなさいな。』
『お客様でせう。私又参りますわ。今ね照代さんを御訪ねしたところなのよ。』
『いいわ。まあお上りなさいな。』
するさ奥から、
『誰です。』
『平田さんの奥さんよ。』
『おお、平田君の、連れていらつしやい、連れて。』と云ふ男のこえで上つて奥の座敷へ行つて見ると大勢の若い人々が花歌留多をして居た。
別に紹介はされなかつたが漸々と四五人の男の名が判つて見ると、皆平田の友人である事が知れた。
『木村さんは御留守ね。』と芳子が云ふと
『エヱ。今に歸るでせう。』と妻君は冷膽に答へて四人の男を相ひ手に花をし始めた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

芳子は爲よと云ふのを辭して一二回見て居た。

既う夕暮に間近いらしい日影は消えた四邊が暗くなつた、暫くして主人が歸つて來た。

『未だして居るのか、朝からだね。』と云つて芳子が挨拶しやうとする間に又出て行つた。

妻君は主人が歸つて來ても一度も立たなかつた。

さあ今夜は此の勝敗の結果で奢るんだよ。』と又一心に始めた。

四人の中で一番ハイカラな若い婦人雜誌記者は自分の妻君に夜遲くなるからとて電報打ちに出かけたりした。

皆が其の妻君孝行を噂しあつて騷いで居る後を芳子は止める人々の手を拂つて別れた。

夕方の何となく落つきのない賑ひの中に芳子の心は水のやうに澄むで居た。

總ての世の中の事を觀照して見ると其處に云ひ知れぬ味があつた。

『女』と云ふ者が種々の色に心に映つた。（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

惑ひ

―野枝―

その手紙を町子が男の本箱の抽斗に見出した時に彼女は全身の血がみんな逆上することを感じながらドキ〱する胸をおさへた。『あの女だ、あの女だ。』息をはづませながら彼女はそふ思つた。そして異常な興奮をもつてその表書を一寸の間みつめてゐた。やがてすぐに非常な勢をもつて憎惡と嫉妬がこみ上げて來るのを感じた。彼女はもうそれを押へることが出來なかつた。直ぐに裂いて捨てたいほどに思つた。忌々しい見まい〱と思ふ半面にはどんな態度で男があの女に書いてゐるか矢つ張りどうしても見ないではゐられない樣にも思つた。併し現在自分が愛してゐる男、自分ひとりのものだと思つてゐる男が他の女に愛を表す語をつらねた其の手紙を見るのは何となく不安でそして恐ろしいやうな苦しいやうな氣がして、見まい〱とした。けれどもどうしても見ないではゐられなかつた。

讀んで行くうちにも彼女は色々な氣持ちにさせられた。たつた一本の手紙だが、そしてそれを讀み終るまでに十分とは經らない僅かの間に彼女の心臟は痛ましい迄に虐待された

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

嫉妬、不安、憤怒、憎惡、あらゆる感情が露はに、あらしのやうな勢をもつて町子の身内を荒れまはつた。そしてそのうちにも自分に對するとはまるで違つた男の半面をまざ〳〵と見せつけられた。其處に對した、愚劣な、無智な女と、男を見た。狂奔する感情を制止する落付きをどうしても見出すことは出來なかつた。今はたゞ彼女はその感情の中に浸つて聲をあげて、身をもだえて泣くより仕方がなかつた。彼女はまるで男が全く彼女から離れたやうに思ひ、そして男の持つた違つた世界を見た彼女はとりつく島もないやうな絶望の淵に沈んで行つた。

漸く幾らかの落ちつきを見出すとやがて男に對するいろんな感情がだん〳〵うすれて行くのを不思議な氣持ちでぢつと眺めた。やがてすべての憤怒、憎惡が女の方に漸次に昂ぶつて來た。そして何とも云ひやうのない口惜しさと不愉快な重くるしさが押しよせて來た。それは明かにあの女に對する强烈な嫉妬だと云ふことは意識してゐた。併しその氣持をおさへて何でもないやうにおちついてゐることは出來なかつた。それに男の何でもないやうな顏をしてゐるのが憎らしかつた。町子はもうその手紙をズタ〳〵に引きさいて男の顏に叩きつけてやりたかつた。たとへそれは日附けはかなり今と隔りがあるにしてもそれつきりであつたとは思へない、彼女が此處に來たときまではたしかに續いてゐたのだ。彼女は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たしかにそれを知つてゐる、續いて起つた連想はかの女の頭をなぐるやうに强く何物かを思ひ起さした。男との關係がはじめから今までの長い〳〵シーンの連續の形に於て瞬間に彼女の眼前をよぎつて過ぎた。そしてその强く彼女を引きつけた處に尤も彼女の不安なあるものが隱れてゐた。それは彼女を彼女の中にも隱れてゐて絕えずなやましてゐた疑惑の累ひ塊であつた。機會を見出して塊はずん〳〵廣がつて彼女の心上をすつかり覆つてしまつた。

おきんちやん——女の名——は吉原のある酒店の娘だ。町子のゐた學校の二年か三年までゐたのだ。調子のいい人なつこいやうな娘だつた。町子は四年からその學校に入つたのだからよくはしらなかつたけれど後の二年の間におきんちやんはよく學校に來たので——それも町子の級にゐたとかで、調子よく話かけられたりして後にはかなりな處まで接近したのであつた。

男が英語の教師をして學校にはいつて來たのは町子が五年になつたばかりの時だつた。四月の始めの入學式のときに、町子の腰掛けてゐる近くに、腰掛けた見なれぬ人が英語の教師だと町子の後からさゝやかれた。一寸特徵のある顏付きをしてゐるのが町子の注意を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

引いた。併しそのことには長く興味をもつてゐられなかつた。つい式のはじまる先に立つて彼女は受持教師から在校生の代表者として新入の生徒たちに挨拶すべく命令されてゐたので困りきつてゐた。やがて落ちつかないうちに番がまはつてきたので仕方なしに立つて二言三言挨拶らしいこと云つて引つこんだ。續いて新任の挨拶のときに一寸變つた如何にも砕けた氣どらない樣子であつさりとした話し振りや教師らしい處などのちつともない可ならいゝ感がした。式が終つて町子たちのサァクルでは此度のその英語の教師についての噂で持ちきつてゐた。

『何だか變に年よりくさいやうな顔してるわね若いんだか年寄りだか分らないわね』

『あれで英語の教授が出來るのかしら矢張り校長先生に教はりたいわね、あの先生何だかずいぶんバンカラねえ』

『だつてそれは教はつて見なくつちや分らないわそんなこと云つたつて校長先生よりうまいかもしれなくつてよ』

『アラだつて何だか私まづさうな氣がするわ、校長先生のリーディングはすてきね、私ほんとに氣に入つてゐるの』

『Oさんはね、それや校長先生よりいゝ先生はないんですもの、でも風采やなんかで輕蔑

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

するもんぢやなくつてよ、敎はつて見なくちや、』

そうしたとりとめもないたわいのない會話が取りかはされてゐた。

併しはじめの一時間を敎はると、Oさんはもうすつかり感心してしまつた。

『うまいわね、ずいぶんいゝわね、校長先生よりはずつといゝわ、』と叫び出した。皆もその重味をもつた氣持のいゝアルトで歌ふやうにその唇からすべり出す外國語はその發音に於てもすべての點で校長先生のそれよりもずつと洗錬されてゐて、そして豐富なことを認め得た。それにまたその輕いとりつくろはぬ態度とユーモアを帶びた調子がすつかり皆を引きつけてしまつた。新任の先生の評判はいたる處でよかつた。

その男に對する町子の注意はしばらくそれで進まなかつた。たゞ町子はそのころ學校で發行した寫版刷の新聞を殆んど自分ひとりの手でやつた。それに先生は新しい歌や歌についてこの一寸した評論見たやうなものをくれたりした。それで可なりに男との間が接近して來た。それからまた暇さへあれば尺八の譜を抱へては音樂室に入つてピアノに向つてゐるのが一寸町子の注意を引いた。

一學期が忙しく過ぎて二學期との間の長い休暇になつた。町子は叔母と從姉と三人で行李をまとめて大急ぎで休みにならないうちに歸省した。海岸の家で始めの三十日間は海の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

中に浸りつゞけて可なり自由な若々しい生活した。併し後の三十日間は彼女を滅茶々々にしてしまつた。無慘にふみにぢられたいたでを負ふたまま苦痛に息づかいを荒らくしながら歸京したときにはもう學校は二學期に入つてゐた。彼女の力にしてゐる先生達は皆で彼女の不勉强をせめて、卒業する時だけにでも全力を傾けて見ろと度々云はれて居た。併し彼女の苦悶は學校に行つて、忘れられるやうな手ぬるいものではなかつた。彼女の一生の生死にかゝはる大問題だつた。きびしい看視の叔父や叔母のゐなくなつたと云ふことも助けて苦悶は彼女にいろんなまぎらしの手段として强烈なキスキーを飮むことや、無暗に歩くことや書物にかぢりつくことを敎へた。敎課は殆んどのけものにされてすきな文學物の書ばかりが机の上に乘るやうになつた。併しまぎらしても〳〵もう僅かな卑劣な手段でその苦悶も隱せなくなつて來た。彼女の學校でうける日課に對する注意はそれてしまつてすつかり荒んだ二學期もうやむやですんで三學期になつた。殆んど何物にも手が出ない。苦悶は日毎に重るばかりだ。卒業試驗の準備などはまるでずることが出來なかつた。その間町子の注意はまるで他へ向つてはなされなかつた。

『I先生と町子さん』と誰からともなく云ひ出された頃には町子は、男とおきんちやんの接近するのをぢつと見てゐた。皆が見當違ひなことを云ふのが可笑しくて何時も鼻の先で

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

笑つたり怒つて見せたりした。併し町子も可なり接近してゐたのは事實だつた。それは重に趣味の上の一致であつた。町子には同窓生の云ふやうな香氣な氣持にはなれなかつた。戀愛關係を形造つてさはぐ程の餘裕は全然なかつた。皆のうはさは本當に空だつた。併しおきんちやんとの關係は町子には可なりな處まで伺はれた。それを皆に殊更に話すほどの興味も感じなかつた。町子はたゞ自分自身の氣分にひたすらに壓迫されてゐた。

併し、一日のある月曜日に町子は從姉と二人寄宿してゐる敎頭の先生の家の二人の子供と先生と五人で日比谷に遊びに行つた。さうして三時頃に歸つた。留守居してゐた女中はおきんちやんとEと云ふ町子の級の人とそれから前年家業したVと云ふ人が來まして、今歸つた處だと云つた。多分停車場までは行くまいとのことなので從姉と二人で後を追ふて停車場へ行くとまだ其處に三人そろつてゐた。町子たちは三人の人にもう一度引きかへすことをすゝめたが四時までに歸る筈になつてゐるからどうしても駄目だと云ふので强ひてとも云ひかねて一言二言はなしてゐるうちに電車が來た。

『ぢやCさん、駒込までゞも送りませうか』とかう町子は從姉に云ひながら身輕にひらりと皆の後から電車にとびのつた。

『いゝわ、お氣のどくだから本當に、ね』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と氣の毒さうに云ふのを打ち消して二人は乘つてしまつた。三人の顏には當惑の色が動いた。

『駒込から直ぐおかへりになるの町子さんとEさんが聞いた。

『えゝ、さうね。I先生の處へよつてもいゝわねCさん』

『さうね、よつてもいゝわ、そして墓地ぬけませうか』

『それがいゝわ、』

三人は顏見合はせた。

『私たちもよりませうか一緒に――』とおきんちやんがきがるに云つた。町子はカツとなつた。

『I先生の處へ寄る位なら何故私の處へ歸つて下さらないんです！ 一寸だつていゝぢやありませんか、少しひどいわ』

『よしませうか。おそくなるわね』

とEさんが町子の顏を伺ひ〳〵云つた。

『さうね、』

とどつちつかずなことを云つてゐるうちに駒込に來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「どうするの？」

町子はムカ〳〵しながらさう云つてどん〳〵降りてしまつた。三人はしばらくぐづ〳〵してゐたがやがて降りて來た。町子は三人の氣持が見え透いてゐた。きつとはじめから此處へ來るつもりで引きかへすのをこばんで四時迄——なんてうそついたのだなと思ふと、いろんな小細工をして女らしいくだらない隱し立てやなんかが不愉快でツトロもきかないでパスを示して出た。續いた從姉はそれを忘れてゐたのでとがめられた。一寸二言三言其處で辯解らしいことを云つてゐるうちにさつさと三人は通りへ上つて其處で何か相談してゐるのだ。町子は皮肉な目でぢつとEの目をみつめると人の好いEはおど〳〵したやうな困つた顏をしてゐる。町子はそれに何だか快よいものゝを見出した。二人は三人のゐる處に來た。おきんちやんはだまつて俥にのつた。足がいたいことを口實にして——

町子はフヽンと笑ひたくなつた。癪に障ると云ふ樣子が目に見えてゐた。EとAは道を知らないと云ふ。町子は不快な氣がしたので行かないと云つたが道をおしえてやつて際どい處で逃げやうと思つて一緒に行つた。AとEはちつも樣子をしらないので中つ腹で町子は出來る丈けの廻りくどい遠まはりして引つぱりまはした。途中で馬鹿なお供してゐるのだと思ふといやになつて止さうかとも思つたがこんな處でまいたところで仕方がないので意

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地の悪い目をして皮肉を云つてはEの困つた、おど〳〵した顔付からある快感をむさぼりながら少しづゝ腹癒せをやりながら歩いた。二人をIの門まで送りつけておいて直ぐに引き返した。後を追かけて來たやうだが見むきもせずに急いだ。併し不快な念はどうしても抑さへることが出來なかつた。

翌日學校に行くと、Eはうつむいてばかりゐた。町子は意地の悪い顔をしてチロ〳〵見た。やがてEは小さな聲で

『御免なさいね。昨日は本當に惡かつたわ』

『何、別に惡いこともしないぢやありませんか』

『でも惡かつたわ、御免なさいな』

『私、あなたからおわびされる覺えなんかありませんもの、何です一體』

町子の聲には薄氣味のわるい落ちつきと意地のわるい冷たさがあつた。人の好いEはつらさうに首をたれて

『でも怒つてらつしやるんでせう、今におきんちやんもおわびに來ますから――』

『何を怒つてるんです。おきんちやんが何で私にお詫びするんです。そんなことちつともないわ』

云ひ放つてプイと教室を出て行つた。Eはしほ〳〵してゐた。町子にはそれが小氣味がよかつた。

「小さな、ケチな根性だね。おまへは」

かう自分に云ひながらやつぱりケチな根性に負けてゐた。

　おきんちやんが來た。併しまるで相手にしないやうな態度を見せておつぱらつた。皆が不思議な顔をして見てゐた。

　Iに對しても何となしに一種の輕侮を感じ始めた。町子はまたイラ〳〵して本當にまあどうしてこんなにイヤなケチ〳〵した了見をもつてゐるんだらうと思つた。自分がいやになつて來た。併し他人には倘と同感が出來なかつた。何をよんでもおもしろくなかつた。皆がつまらなくなつた。

　併し今考へて見ると、その當時は色々な復雜な考察にわづらはされて苦悶を重ねてゐたときだから意識に上らなかつたのだけれども男に對する愛はその頃から芽ぐんでゐたのだなと町子は考へないわけにはゆかなくなつてしまつた。そのとき不快な氣持ちは今男の書いたその手紙をよんでまた強くよみ返つて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おきんちやんと男の關係はあの頃からずんずん進んでゐたに相違ない。さうすれば男が町子が歸ると云ふその間際になつて不意に示した愛は虛僞だつたのだ！一時の遊戯衝動だ！さう云ふ念がつよく町子の頭に來た。今まで町子の頭の中にかたまつてゐたものはずつと全體を暗く覆つてしまつた。彼女は其處にある男の机の上に突伏した。自分のたつてゐる土臺が今にも壞れさうに感じた。自分で抑き壞すのだなと云ふ氣がした。どうせ壞しかゝつたのだもの何處までも自分のおちつきが本當に出來るまで破壞はつゞく、それがまた本當なのだと云ふ氣がした。

少しつゝ氣が靜まつて來ると、また自分の身内に深く食ひこんでゐる男の愛と男に對する自分の愛が目ざめて來た。そうしておきんちやんとの關係はもうとうに破れてゐるんだと云ふことが思ひ出され、そして眞實だと繰返してゐると、やうやく自分の力が勝つたことがはつきり分つて來て、町子は何となく勝ちほこつたのび〱した氣になつた。併し手紙の文句を思ひ出すと、直ぐイラ〱して來た。腹が立つて來た。Ｉが室にはいつて來た時町子は一ぱいに涙をためた目でぢと男の顏を見据えながら暗い尖つた顏付きをしてゐた。男は意外な顏をして何かをさぐるやうな落ち付がない目で室を見まはした。

（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□四月號を小說號としてなるたけ新しい女流作家を紹介することにつとめました。中には今度始めて小說に筆をとられたといふやうな方もございますから幼稚なあとは到る處に見えますけれど、現代の若い婦人——それが舊いとか新しいとかいふやうなことはしばらくおいて——の實際の生活そのもの〻表現として客觀的に見ても多少の意義はあると思ひます。是等の多くの作中に現れてくる婦人の思想にも生活にもまだ〳〵眞の意味に於ける新婦人たるもの〻それを見ることは出來ませんけれど、目覺めむとしつつある我が國の若き婦人の舊道德や世俗的思想との戰に於ける苦悶や、意識的の戀や、婦人の生活の標的となるべき何ものをも失つた精神的危機にある婦人の心など總てを通じて何事かを語つてゐるやうに思はれます。と同時にまだ私共の生活がこんな階段にあるのかと思ふと悲しいやうな恥かしいやうな氣にもなります。けれど今は只悲しんだり恥ぢたりしてゐる秋ではありません。私共は新しい女流作家がます〳〵自分の生活を深めて、各自の個性あり意義ある作品を出されることをたのしんで居ます。

□岡田八千代さんからこんな御葉書が來ました、「まことに突然でございますが、私はもう書きません。夫でお別れとして今までの御なじみの處には何か一筆づ〻私の代りとして伊達虫子といふ人の作をみんな上げてのせて頂く事になつて居ります。夫であなたの方へも其の人のを差あげたいとおもいます。夫は多分詩のやうなもので「お前の日記」といふのだらうと存じます。……」續いて同氏の代理のその伊達虫子さんといふ方の原稿も來て居ります、どうかしてこの號に揭載したいと思ひましたが、小說號のことで思ふやうに參りませんで殘念でした。次號で是非とも皆樣に御目にかけるつもりです。

□野上彌生さんが特に本號のため御書き下さつたことを感謝いたします。らいてう氏の「山へ」と哥津ちやんの「宵月」も藤岡さんの「まぼろしの中より」もとうと間に合はないで出せませんでした。いづれ次號へ。

□附錄の「女性に於ける同性戀愛」の譯者野母氏は野枝氏とは全然別の方でございます。

□なほ本號の表紙は奥村博氏の自畫自刻でございます。

□近頃婦人に對する意見で無智と無理解との甚しかつたもので、私の目にふれたのは德田秋江氏の婦人小論と平出修氏の私の今度の共同生活に對する批評だつたと思ひます。これ程實際を知らないで、男子の弱い卑劣

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な心を語るやうな自己の小さな狹い、そして低い婦人に對する趣味からや、又不徹底な殆ど迷信的な先入の或概念の上から新しく生きむとする婦人の生活を見やうとするのが、既に大きな心得違ひだと思ひます。平出氏はあの一文を最後として死去されたさうだからあんな妄想界ももう消滅した譯ですが、與謝野晶子氏のやうに肉がいやしくて、靈が尊いのといふやうなそんな人格的鍛錬を經ない通俗思想の階段になほさまよひつゝあつた同氏にとつては今度肉體の死によつて始めてどうやら解脫が出來たさいふもの。なほ同氏は私のあの手紙は特に私の兩親を相手にしたもので、兩親が私に對して案じてゐること以外の問題には努めて及ばないやうにしたことに御氣付きにならなかつたやうです。

□岩野淸子さんの御住宅ではこの春蜜蜂が十箱も增加するのださうで、どなたでも御希望の方には一箱參拾圓で御分け下さるさうです。そして飼養法の實驗談もきかせて下さるさうです。御希望の方はハガキで社になり又は岩野さん方へなり御申込みなさいまし。同氏の住所は巢鴨村字宮仲。

□本日名古屋の社員靑木穠子さんが御上京になり、社に御尋れ下さいました。三人は火鉢を中にいろ〳〵歌のことなど御話いたしました。御忙しいところをわざわざ御尋れ下さいましたのを大變嬉しく思つて親しさの一層に加はつて行くのを覺えました。明日午後らいてう氏の宅で歡迎の小集をする筈です。

□西崎花世さんは今度生田春月氏と御結婚になつて牛込早稻田鶴卷町二二三に新しい生活を始められました。

□先頃靑鞜に連載しましたらいてう氏譯のエレンケイ女史の「戀愛と結婚」全部を五月中旬に出版する筈で目下野枝氏と共に繙譯に急いで居ります。

□野枝氏の譯の「婦人解放の悲劇」はいよ〳〵出來上りました。

□四月から每週一二回づゝ岩野淸氏の宅で佛語を初步から初める會が出來る筈ですから社員補助團員、とそしてその此友達の方ならばどなたでも隨意御出席が出來ます。希望者は社まで至急御申越し下さい。

□四月十三日から七日間有樂座で開演する筈の近代劇協會第八回興行の出物「人形の家」三幕と、アグラヴエーヌとセリセット」は時間の都合でアグラヴエーヌとセリセット」を次回に延期して「人形の家」とハウプトマン作の「ハンネレの昇天」の一幕二部を上場することに決定したさうです。

補助團會費受領

岩淵百合氏——三月迄

青木　穰氏――大正四年正月迄
安田皐月氏――三月迄
片野珠氏――三月迄
西崎さかゑ氏――三月迄
丸島白百合氏――三月迄
齋賀琴氏――三月迄
望月れい氏――三月迄
山田頭美氏――六月迄
小林哥津氏――一月迄
柴田かよ氏――一月迄
阪木眞琴氏――一月迄
伊藤智惠氏――一月迄
松井靜代氏――二月迄
濱野雪氏――三月迄
山田わか氏――二月迄
青井禎氏――三月迄
三浦ふくろ氏――三月迄
後藤靜代氏――一月迄
瀬沼夏葉氏――二月迄
籬　貢氏――三月迄
鈴木香氏――五月迄
中村はろ氏――五月迄
森下テル氏――二月迄
北村啻句氏――二月迄
加藤壽氏――三月迄
辛島きみ氏――五月迄
矢澤孝氏――九月迄

□會費未納の方は靑鞜社振替口座東京二一一一六に至急御拂ひ込み下さいまし。

□毎月十日迄に會費の拂込みなき方へは郵便集金をさし出しますからどうか御支拂ひをねがひます。

□郵券代用は一割増、一錢五厘切手に限る。

□補助團新入會員。吉原瑳智氏、伊藤德氏、辛島さみ氏矢澤孝氏

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寄贈雜誌

早稻田文學、三田文學、帝國文學、我等、白樺、番紅花、潮、塔、近代思想、生活と藝術、創造、心の花、婦人評論、エゴ、新潮、ホトヽギス、眞、雲、秀才文壇、假面、中央文學、中央、公論、學燈、河鹿、エニグマ、新佛敎、アラヽギ、新思潮、モサイク、白光、蛇の舌、徵、詩歌、新人、新女界、創作、藝文、貿易時報、コスモス珊瑚、サンデー、婦女新聞、淸不興、愛の詩、第三帝國、人生と表現、自畫像

寄贈書籍

人間さしてのトルストイ（九拾錢）　メレジコッスキー著　桂井當之助譯　南北社發行

人間としてのトルストイ
藝術家さしてのトルストイ｝壹圓五拾錢　メレジコッスキー著　森田草平譯　安倍能成譯　玄黄社發行

女と惡魔（四拾錢）　安成二郎譯　新潮社

蜜蜂

洋種、今春分封拾群だけ求めに應ず、一群參拾圓、五月渡し、豫約者には各々來場、養蜂の實見を許す

巣鴨村字宮仲二五一七
岩野

青鞜社概則

第一條　本社は女子の覺醒を促し、各自の天賦の特性を發揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す

第三條　本社の事務所を東京府下巣鴨町一ノ一六三に置く

第四條　本社は係員、社員、賛助員よりなる。

第五條　本社の目的を遂する爲め左の事業をなす。

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。「青鞜」には係員、社員、賛助員の生活及思想を發表す。(但し補助團員の寄稿を發表することあるべし。

一、圖書出版

一、時々係員、社員の修養及研究會、並に事業上の相談會を開くこと。
(但し賛助員は出席隨意たるべし)

一、毎年一回大會を開くこと、大會には賛助員を招待し講話を請ふことあるべし。

一、時に旅行を催すこと。

一、本社の事業を遂するため別に補助團を組織す。

第六條　係員、社員、賛助員は女子に限る。

第七條　係員は本社の目的に賛同するのみならず。本社の事業を自己の生命とするものにして專ら幹部にありて、直接本社の事業に從事し。自己にその責任を負ふものとす。係員は毎月「青鞜」の配布を受く。

第八條　係員は在京社員の中より選擧す。

第九條　係員は四人とし、内二名は經營に、他の二名は編輯に從事す。

第十條　毎年九月在京社員會議を開き、係員を改選す。
但し再選することを得

第十一條　係員には本社の經濟の許す限りは其勞力に對して多少の報酬をなすものとす。

第十二條　社員は本社の目的に賛同するのみならず本社の事業を自己の生命とするものにして雜誌「青鞜」の配布を受く。

第十三條　社員たらむことを希望する者は住所、姓名、年齡の外に履歷の大體と現在の境遇と入社の動機に十枚以上の原稿と(小說、戯曲、感想、詩歌、評論、飜譯いづれにてもよろし) 最近の寫眞とを添へ本社宛申し込まるべし。

第十四條　賛助員は本社の目的に賛同し、雜誌「青鞜」に寄稿することを快諾せられたる文壇の諸先輩とす。賛助員は毎月青鞜の配布を受く。

第十五條　本社の事業を經濟的方面より助力するものを補助團員とす。

第十六條　補助團員は補助團規約によつて募集す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵税壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓
■振替貯金口座は（東京二一一一六靑鞜社）に拂込まれたし。
■郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、圖書雜誌、補助團會費拂込、廣告申込、交換廣告は靑鞜社へ。
■雜誌購讀販賣に關する一切の事務は尙文堂へ。
■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正三年三月二十六日印刷納本
大正三年四月一日發行

東京府下巣鴨町字巣鴨一二二七
靑鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市麴町區飯田町五丁目六番地
印刷人　中山千二郎

東京市麴町區飯田町五丁目六番地
印刷所　大正社

禁轉載

發行所　東京府下巣鴨町字巣鴨一二二七　靑鞜社　振替東京二一一一六番

發賣所　東京市神田區南神保町十六番地　尙文堂書店　電話本局四二五四番　振替東京一九三四四番

特價四十錢

會員募集

青鞜社補助團規約

一、青鞜社補助團は青鞜社の事業を完成せしめんがために經濟上の補助をなすを以つて目的とす

二、本團は其目的を遂行せむがために理事一名、外に會計主任及係員を置き一切の業務を處理せしむ。

三、本團は左の方法により九月一日より十二月卅一日迄會員募集をなす。

1、甲種會員　一ケ月會費　壹　圓

2、乙種會員　一ケ月會費　五拾錢

四、會費は大凡二ヶ年間確實なる銀行に預金し、其後に於て全金額を青鞜社に寄附するものとす。青鞜社はこれをもつて出版事業を開始す。

五、本區の會員たらむとするものは其目的に贊同し、第三條の會費を入會の月より滿貳ヶ年間納むるものとす。

（但し會費領收は青鞜紙上に發表し、別に領收書を出さず）

六、本團は會員に對し青鞜社發行の機關雜誌「青鞜」を毎號贈呈す

七、甲種會員には會費全納後なほ滿貳ヶ年間は雜誌「青鞜」と青鞜社出版圖書とを其都度贈呈す。

乙種會員には滿貳ヶ年間雜誌青鞜のみを贈呈す。

八、本團會員は甲種なると乙種なるとに拘らず、女子に限りて「青鞜」に寄稿し得るの特權を有す。

但し寄稿が二回以上「青鞜」紙上に掲載されたる場合は本人の希望により相當の手續きを經て青鞜社の社員たる事を得。

九、入會申込者は期日內に左の書式により府下巣鴨町、一二二七青鞜社內青鞜補助團宛に申込まれたき事。

會費は毎月五日迄に振替口座東京貳壹壹壹六青鞜社內補助團宛に拂込まれたき事。（郵劵代用一割增）

但し會費未納者には本團より集金人を差向くる筈。

一〇、會費は大凡三ヶ年間確實なる銀行に預金し、其後に於て全金額を青鞜社に寄附するものとす。

一一、會計報告は年一回以上便宜の方法を以て會員に發表す。

一二、この規約は理事、會計主任、係員によつて事務の細則を定め、又會員多數の意見によりて變更する事を得。

理　事　保　持　白　雨

會計主任　岩　野　清

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新刊

東北學院文學部教授 増富平藏先生譯

ショーペンハウエル随想録

橋本邦助氏装 四六判總クロース製美本 全一冊 正價壹圓廿錢 郵税拾錢

▼厭世悲觀の哀調＝再生解脱の福音＝春晝秋夜の閑話▲

本書は、將來に於ける一切の精神的又道德的文明の根柢とすべき者（ワクネル評語）と云はれ、或は形而上學の完成者（ドイッセン教授評語）とたゝへらるゝショーペンハウエル弱年の頃より晩年に至る迄随筆に書留め置けるものをゲリーセッバ博士が秩序的に編纂せるものにて、上は倫理宗教の眞理、處世の指南より、下は男女の情事、交接等に至るまで忌憚なく論議して一流の人生觀を吐露せる短文實に四百餘章、譯筆亦ショ氏の私淑者増富先生が三たび稿を更へたりと見はるゝほど極度の苦心を重ねたるものにて、警拔の想、明快の文、相俟つて近來の好譯本たるを疑はず。

高橋五郎先生譯

ベーコン論説集

（十二版）

要目

◎眞理を論ず ◎死を論ず ◎富を論ず ◎美を論ず ◎復讎を論ず ◎逆運を論ず ◎迷信を論ず ◎狡猾を論ず ◎自愛を論ず

◎交友を論ず ◎商議を論ず ◎猜疑を論ず ◎攝生を論ず ◎談話を論ず ◎幸運を論ず ◎稱讃を論ず ◎親子を論ず ◎忍怒を論ず

◎戀愛を論ず ◎旅行を論ず ◎貴族を論ず ◎豪奢を論ず ◎園囿を論ず ◎統治を論ず ◎忠告を論ず ◎遲疑を論ず ◎似智を論ず

◎高地位を論ず ◎無神神を論ず ◎功名心を論ず ◎習慣と教育を論ず ◎青年と老年を論ず ◎結婚と獨身を論ず ◎虚僞と假扮を論ず ◎學問及讀書を論ず ◎名譽と聲聞を論ず

◎邦國の眞偉人を論ず ◎人に於ける天性を論ず ◎事物の變遷を論ず ◎嫉妬及羨望を論ず ◎畸形及廢疾を論ず ◎仁愛慈悲を論ず ◎禮式禮儀を論ず ◎從者及朋友を論ず

◉外十四章

總クロース金文字入 美本全一册 正價金壹圓貳拾錢 郵税金拾貳錢

◉東京日々新聞批評「……而も警句に富み用語の自在なる咳唾悉く珠玉なりといふも恐らくは過褒ならず」

版元 東京神田區雉子町 玄黄社 電話本局二〇九〇番 振替東京七九九五 ○全國有名書店賣捌

有樂座

四月
十三（月）十四（火）十五（水）十六（木）十七（金）十八（土）十九（日）

七日間

毎夕五時開演

森林太郎新譯

人形ノ家（ノラ）三幕

此の脚本が「新しい女」と云ふ言葉を生んだ、獨り作者イブセンの代表作のみでなく近代社會劇の代表として不滅の權威がある、臺帳には鷗外博士の新譯ノラには孔雀が扮し、リンデには浦路が扮する、昨年來を關西に演じ自然に徹せる新演技として識者の激賞を買つた、目下更に錬磨を積んでゐる、

近代劇協會八回興行

顧問 文學博士 醫學博士 森林太郎

主宰 上山草人

舞臺監督 上山草人

背景圖案 岡本歸一

出演俳優

女優 山川浦路
同 衣川孔雀
同 中山歌子
同 松良静緒
同 若山椿
同 小村珊瑚

笹本甲午
武田正憲
高山貫一郎
梅田忠
村雲毅一
小澤得壽
其他

入場料

特等（ボックス）一圓五十錢
一等（土間二階）一圓
二等（三階）四十錢

申込所
有樂座 電本五二二〇 五二二一
芝日陰町一ノ一 近代劇協會 電新三四〇五
芝新櫻田町十九 同後援會 電新二八九

秋田雨雀譯

「アグラヴェーヌ」と「セリセツト」 三幕十五場

マアテルリンクの作物の中で最高の藝術である事は等しく諾く所である、戀愛、死、あはれな性の戰きは金箔のひらめきの如く、銀糸の慄える如く如何に細かに如何に微かに五幕十五場と轉換する夢の様なフレームの中に映り出る事であらう、演出者は其の技藝に於ても舞臺裝置に於ても在來の此種の演劇を技出せん事を期してゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

AUGUSTE RODIN

完　L'ART　成

上巻四拾錢　　下巻四拾錢

■現代の洋書特別號■

上巻

ロダンの藝術……吉川淡水譯

序
第一章　藝術に於ける寫實
第二章　藝術家にとりては自然中の萬有は美なり
第三章　體狀
第四章　藝術に於ける動運
第五章　素描と色彩
第六章　女の美
（寫眞版挿畫大小三十餘個）

ロダン論（サイマンス）……高村光太郎譯

オーギスト・ロダン著

ロダンの藝術

ポール・グセル記

下巻

ロダンの藝術……吉川淡水譯

第七章　既往及び今日の靈性
第八章　藝術に於ける考慮
第九章　藝術上の決秘
第十章　フキディアスとミケランジュ
第十一章　藝術家の收獲
（寫眞版挿畫大小三十餘個）

ロダンに就て……有島生馬

發行所　東京小石川區江戸川町九番　振替東京四三七三番　日本洋書協會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

◉我國飜譯界の記錄を破れる空前の大計畫

泰西名著文庫

會員募集

夙に東西文明融合の趨勢に鑑み、泰西文藝の代表的雄篇傑作を選みて、之が飜譯を我が現文壇に於ける斯道の諸大家に囑し、至難なる飜譯叢書刊行の業を進め來れること茲に三年、今や漸く之を公表して逐次刊行し得るの運びに至つた。云ふ迄もなく作の良否は必ずしも量と一致しないが、泰西の名著は量に於ても亦大作である。以下列擧する如き雄篇大作を羅致して我國の文壇に移植し得るもの、我刊行會の如くにして始て能くする處と潜に辜負して天下の淸鑑を竢つ。

◉戰爭と平和　四冊

(露) トルストイ著　馬場孤蝶譯

露國の偉人として全世界の崇敬を一身に集めた伯爵レオ・トルストイの人としても藝術家としても、元氣最も旺盛なる時代に成つた大々的大作である。行くとして可からざる無き著者が精到、遒勁なる醉筆は、彼が豐富なる人生智識及奔放なる想像力と相俟つて、此大作をして益々世界的不朽の雄篇たらしめた所以である。

◉虛榮の市　二冊

(英) サツカレー著　平田禿木譯

文豪サツカレーが冷たい皮肉のうちに熱い涙をこめた輕妙銳利の健筆もて、所謂彼のスノツブスの輩が百鬼夜行の體たらくを赤裸々に描き出して、走馬燈のやうな忙しい人の世の推移が手に取るやうに見らるゝ英文

リムピアの饗宴に臨むがごとし」とはエマーソンが此書を評した言葉である。眞に萬世不朽の寶典にして古今の成敗、榮辱、利鈍の數、殷鑑をかけて照すが如く、活世界の活學問とは寔に本書の謂である。全譯たることは云ふ迄もない。

◉イリアード　オデッセイ　合一冊

(希) ホオマア作　馬場孤蝶譯

古神話、古史詩の價値は、此處に古代人の一切の生活が具象的に織り込まれて居る點にある。就中、本書に收むる二大史詩の如きは、諸種の點から見て歐洲一切の藝術の父母である。歐洲の藝術を味はんとする人々は、必讀書として、何よりも先づ第一に此の世界最古の二大史詩に指を屈せずはなるまい。

◉英國近代傑作集　上卷

平田禿木譯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

學で名高い稀代の傑作「ヴァニィテ・フェア」の完譯が、この「虚榮の市」上下二冊である。

◉哀史　三冊

（佛）ギクトル・ユーゴー著　戸川秋骨譯

文豪トルストイ翁をして十九世紀の最大傑作と叫ばしめたる本書の主人公、ジヤン・ヴアルジヤンの名は、今は我國でも知らぬ人は尠ない。話の筋は無類に面白く、又之を一貫する磅礴たる大理想は、眞に世界文藝上の偉觀である。唯從來は一寸した抄譯の類が行はれて來たが、こゝに始めて其全譯が出るわけである。

◉十日物語（デカメロン）　一册

（伊）ボツカシオ著　森田草平譯

凡そ人間に文字あつて以來、ボツカシオのデカメロン位奇抜て面白い書物はまたとあるまい。人間の嬌態、痴態、變態、笑ふべきもの、怒るべきもの、輕蔑すべきもの、感心すべきもの、凡そ人情の千態萬狀を高い所から見て、人を馬鹿にしたやうな顏をして書いてゐる處、何とも云ひやうの無い天下の奇書である。

◉諸國物語　一册

森鷗外譯

森鷗外先生は飜譯界の權威である。本書は、獨逸、スカンデナギア、佛蘭西、露西亞、亞米利加の諸文豪の傑作二十餘篇を集めたものである。清新なるもの、深刻なるもの、蜜の如く甘きもの、皮肉の骨を刺す如きもの、百花繚亂として現代文學の精華は收めて此の一卷にありと云ふも敢て過言ではあるまい。

◉プルターク英雄傳　三册

（羅）プルターク著　高橋五郎譯

「手に任せて何處を開くも、英雄豪傑雲の如く、才媛淑女霞の如く、宛然

近代英文壇の巨匠、メルデイス。ハーデー。ジエームス三家の短篇集である。若し夫れ「泰四名著文庫」の大部分が、堂々たる寺院殿堂の壁畫の如きものとすれば、これは寧ろ草堂別墅を飾るべき、心にくき小幀にも比すべきであらう。譯者禿木氏また趣味の上から、詩人の創作にも劣らざる苦吟努力をもて、生命ある邦文に寫し試みたのである。

◉英國近代傑作集　下巻

戸川秋骨譯

批評家、詩人、乃至小說家として當代英國に第一流の位置を占むるワッツ・ダントンのエイルキン一册を收む。エイルキンは又の名を「驚異の再誕」と云つて、人間が天地の神秘に接して感動するその驚きを書いたものである、話の筋は神秘な戀物語で、實に現代英文學中の逸品である。否世界文學中一頭を拔いた逸品である。

◉永久の良人　一册

（露）ドストイフスキイ著　森田草平譯

トルストイを現在の覇王とすれば、未來を支配するものはドストイフスキイであるとまてメレジユコーフスキーは斷言して居る。その思想の幽玄にして奇峭なる、彼は實に神秘其物である。人間の心理狀態を到底想像も及ばぬ精細と確實とを以て描寫して居る處、眞に人間業ではない。本書の價値亦多言するまでも無からう。

◉以上十八册

津田青楓氏裝釘意匠、菊版總クロース製天金、紙數一册平均約八百頁。

◉入會申込　四月三十日限

略記

◉來る六月より毎月一册宛配本し十八ヶ月を以て完結す。
◉會費は一ヶ月金貳圓とす、但外に送本料を要す。
◉申込金貳圓を要す、但此申込金は最終の會費に充つ。

▼詳細見本及規定は御申越次第送呈す

東京市神田區小川町一番地
國民文庫刊行會
電話長本局七三二番　振替東京一八五七二番

文學普及會講話叢書

■近代美學講話……島村抱月氏
■近代哲學講話……金子筑水氏
■近代社會問題講話……樋口龍峽氏
■近代文明史講話……長谷川天溪氏
■歐洲近代文學の諸問題……片上伸氏
■近代科學發達史……中澤臨川氏
■近代文學思潮……相馬御風氏
■歐洲近代小說史……中村星湖氏
■歐洲近代小說家研究……前田晁氏
■近代小說の解剖……正宗白鳥氏
■近代詩講話……吉江孤雁氏
■近代批評史講話……本間久雄氏
■近代演劇史講話……中村吉藏氏
■日本演劇史講話……伊原靑々園氏
■近代劇曲史講話……島村民藏氏
■近代劇講話……楠山正雄氏
■近代劇曲家研究……秋田雨雀氏
■西洋美術史……河野桝谷氏
■日本美術史……未定

■西洋音樂史講話……小松玉巖氏
■奈良朝文學講話……與謝野寬氏
■平安朝文學講話……與謝野晶子氏
■國詩國文評釋……窪田空穗氏
■謠曲文學講話……五十嵐力氏
■德川時代文學講話……德田秋江氏
■德川末期文學講話……楠山正雅氏
■明治文學史講話……島村抱月氏
■明治名著解題……早稻田文學社編
■明治小說內容發達史講話……田山花袋氏
■明治小說文章變遷講話……德田秋聲氏
■プラグマチズム講話……杉森南山氏
■オイツケン及ベヨルグソン哲學講話……稻毛詛風氏
■進化論講話……西野彌三次氏
■近代文學名著名作解題……早稻田文學社編
■英和對照近代名文評釋……早稻田文學社編

■文學普及會講話叢書は以上列記せる三十五種の講話を毎月完結したる二種若くは三種づゝ一冊に纏めて十五ヶ月間に刊行するものとす

■本講話には最近の撮影に成る講師の肖像を添へて講師と面接して聽講するの感あらしむ

■本講話叢書は毎冊四六判三百餘頁の高尙なる美本なれば完結の上は高尙洒麗なる文藝乃至思想問題の百科全書として絶好なる書齋の飾たるべきものとす

■入會申込所 東京市小石川小日向水道町六十二番地 文學普及會

■東京神田表神保町 東京堂（振替東京二七〇番）

二十餘年間我が國文學界思想界の最高權威たるの信用を確保し來たりたる早稻田文學社は今や橫溢せる時代の要求に迫られて茲に最も堅實なる文學研究の機關として滿天下の青年諸子の前にその門戶を開放するに至れり。眞摯なる文學研究者は來れ。

早稻田文學社

文學普及會

會員募集

■早稻田文學社の經營に係る文學普及會は一般文藝及び思想に關する最も確實なる智識を普及する目的にて現時の學界に於て最も信賴するに足る學者數十名について各自其の專門とする方面の講話を乞ひ、之を廣く一般に頒ち一は以て我が國民生活に眞の文明的根柢を與へ一は以て將來の文藝教學界に活動すべき有爲なる人材を養成する事を期す

■本會々員たる諸君に對しては、右講話叢書を配布するの外、一人々々について種々なる方面より親切なる研究上の指導を與ふるものとす

■本會は更に機關雜誌として『文學普及會々報』を會員に無代にて配布し、更に『早稻田文學』を特別廉價を以て頒つ

■なほ東京及び地方に名家の講演會を開き會員をして無料傍聽せしむ

■本會の會費は毎月六十錢宛なれども入會の際には必ず三ヶ月分以上を前納すべきものとす

■日本に始めて生れたる文藝及び思想上の通信大學は此の文學普及會也■

■愈々來る五月より開講す

■會員の定數は一千名なるを以て志望者は一日も早く申込まるゝを可とす

■入會受付事務は三月一日より開始しつゝあり

詳細なる規則書希望の方は郵券五厘を添へて申込あれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自畫像

創刊號

■表紙繪（ゆきを）

ジエームス及び其思想（評論）　北落師門

畫かきの心（感想）　ゆきを

遍路の道づれ（創作）　久保寒三

ラヴィ　プロフオンド（メーテルリンク）　豐島與志雄

賢者の妻（シユニツラー）　新關良三

おのゝく灯影（詩）　菊池香一郎

アリアアヌと青髯（メーテルリンク）　木村幹

■四月一日發行（特價三十錢）

發行所　東京府下西大久保七十八菊池方　自畫像社

發賣所　東京市神田區南神保町十六番地（振替口座東京一九三四四番）　尚文堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■■

生活と藝術四月號には下の諸氏が執筆します。まだ内容も題名も解りませんが、本誌一流の最も自由にして勇氣の記事を掲載します。

■■

楠山正雄　評論

仲田勝之助　評論

伊庭孝　評論

西村陽吉　詩

大杉榮　評論

安成貞雄　評論

土岐哀果　詩

園三千夫　對話

加藤一夫　小說

青年諸氏　歌

堺利彥　評論

■定價一冊十八錢
■郵稅一錢

發行所　東京市日本橋檜物町九〔振替東京一六五一四〕　東雲堂書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□第二巻第七號□

近代思想

四月號

□定價一部金拾錢□

□四月（歌）……安成二郎
□主觀的歴史観（評論）……大杉榮
□三月の評論（批評）……安成貞雄
□くらやみに（詩）……德永保之助
□生活の欠伸（感想）……荒畑寒村
□胡麻鹽頭（雜錄）……貝塚澁六
□主の家にて（小說）……荒畑寒村
□人間屠殺所（小說）……ラムスス 佐藤緑葉
□新刊（紹介）……記者
□大久保より（雜錄）……記者

東京府下大久保百人町三五二
近代思想社
振替貯金東京一七二六三番

心の花

第十八巻　四月號　第四號

大川の水　柳川隆之介

呪咀（小説）　吹田盧風

萬葉集講義　佐佐木信綱

新百人一首新釋　志田義秀

伊万里の皿　片山廣子

猿　三浦守治

街に出て　吉野臥城

酒甕　原田謙次

青き落葉　阿部たつを

熔岩と蜜柑の枝　名越那珂次郎

西片町より　佐佐木雪子

定價一部金二十錢・半年前金壹圓・一年前金貳圓・税共

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部

電話本局五一七〇　振替東京四三〇〇

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

萬造寺齋著
歌集
彼方へ
五月上旬發行
定價九十錢
送料八錢
「彼方へ」は著者の第一歌集である。絶えず追ひ求め夢み憧れながら遂に何事を完成する事も何物を獲得する事も出來なかつた著者が過去の生活の唯一の收穫でありまた唯一の記念である。
抒情詩社發行

特價四十錢
送料二錢
我等
一年分送料共金三圓
四月特別號
瀕死の人に（詩）……高村光太郎
歌百首……萬造寺齋
途で會つた人達……石井柏亭
劇場美術……松元苦味
一疋の野兎と一人の外國人（小說）……佐藤春夫
歌三十首……與謝野晶子
佛法僧（小說）……江南文三
眞實と額（小說）……伊達虫子
日本舊劇の未來……森林太郎
水のあなたより……
詩……水野葉舟
附錄
戲曲馭者ヘンシェル（舞臺協會四月興行臺本）……秦豐吉
詩……上田敏
シュミツトボン論……茅野蕭々
死の勝利の誤譯問題……綿拔瓢一郎

詩歌
原田琴子
原阿佐緒
三ケ島葭子
畔蒜こと子
齋賀琴子
長島豐太郎
佐々木好母
柏木松雄
出野青煙
佐藤春夫
内藤鋠策

東京本鄉區駒込林町一九〇
我等發行所
東京市神田區南神保町一六
岩波書店

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

定價金卅錢

假面

第三卷第四號　四月號

郵税金二錢

挿畫 露西亞近代畫……寫眞版四葉!!

薔薇（詩）……西條八十

杉本カッフェ店（小説）……山川亮

落葉（歌）……沖鹽正光

覘はれる者（小説）……丘草太郎

三月海外文藝概覽……

京の一夜（小説）……竹内逸

遠流の人（歌）……石井直三郎

遺置（小説）……見留周造

第二法苑林敎話（詩）……日夏耿之介

評論 日常生活中の悲劇（マアテルリンク）……吉江孤雁

發行所　東京市外西大久保百三十一　假面社

新刊

長田幹彦著

春の鳥

目次

悪縁……曉……

雪晴れ……逢曳……

解剖室……さすらひ……

女の手紙……私生兒……

美本全壹册　定價五拾錢　郵税金六錢

發賣元　東京神田錦町一丁目十九　中興館　振替東京四一二三番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊金貳拾五錢
郵税金壹錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

■歌舞伎■

百六十六號（四月一日發行）

六冊前金郵税共
金壹圓五拾錢◎十
二冊金貳圓八拾錢

卓上藝談……尾上菊五郎

大道具の次郎との對話筆記にして多く團菊の逸事を語る

『髮結新三』の型……森ほのほ

三月狂言に最好評なりと此役を寫生して舞臺を見るが如し

歐外博士の**稻妻**は佳境に入り**大風**本號にて了る

無線電信は延二郎が權太の型を聞いて故菊五郎が批評し

劇評の劇評は尚三月狂言の諸評を是非す

操三番の彈やう……杵屋勘五郎

源之助の『萩原』……鈴木春浦

京阪年代記……伊原青々園

新しき象徴的舞踊……松本苦味

米國の藝界を騒せし女優デニスが舞踊の意見を譯出す

狂言座偶評……中谷德太郎 小山内薫

其他文士俳優を合せて八人が脚本技藝に就ての感想記也

本郷湯島切通町書報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三、振替口座一八一〇六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回　一日發行

創造

面目一新せる　四月號　清新なる要目

▲運命と主我的精神（感想）　淸浦青鳥
▲Sの二等卒時代（小説）　木村莊八
▲別れて棲む妻に（感想）　加藤朝鳥
▲「青書」より（小説）　木村莊太
▲「戀こゝろ」序詩（詩）　人見東明
▲議會傍聽（詩）　齋藤與里
▲老學者と放埒な青年（詩）　福田夕咲
▲處女の誇り（詩）　加藤介春
▲桃色の封筒（小説）　大塚杜人
▲ロシアの新劇壇（感想）　尾瀬哀歌
▲嬰兒と戀と南爪（小説）　佐野袈裟美
▲毒葉の壺（感想）　相馬御風

詩歌

望月哲雄　川本宇生　大熊信行　高山辰三　田邊若男　石川才三郎　津端修　磯ヶ谷紫江　美川康　高鹽背山　高山喜三　上村千草　青木しげ子　南くに子

戀ごゝろ

獨自の世界を創造して跳躍を自由に試みつゝある人見東明氏の第二詩集なり。詩百五十餘篇を收め、齋藤與里氏の裝幀。木村莊八氏の挿畫十數葉を以てしたる最近の快著にして、三百五十頁の美本絢爛眼を射るが如き新刊なり。

定價七拾錢

發行所　小石川區雑司ヶ谷町　創造社

發賣所　東京神田表神保町　東京堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第二十卷　定價金二十錢

帝國文學

四月號

第四　郵稅一錢五厘

△二つの道（評論）……石坂養平
△講演旅行（小說・ハムスン）……西澤富則
△海鷗（戯曲・チエエホフ）……伊東六郎
△女流作家の心境（評論）……川島風骨
△小說家としてのイショウ（評論）……石本笙
△劇場論（評論・イエエツ）……山宮允
△心と心（詩）……江中多羅葉
△太陽と紅雀（詩）……澤木茂正
△三月の劇壇（時評）……久米正雄
△三月の文壇（時評）……山田檳榔

京橋銀座一丁目廿七　大日本圖書株式會社　振替東京二一九一番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

外國語學校教授福岡秀猪先生校閲
前田越嶺・前田雪子兩氏共著

▲最新刊▼

佛語初步獨修

佛蘭西語の泰斗前田越嶺・
前田雪子兩氏共著にして
如何なる初學と雖も獨習し
得らるゝ樣最も懇切に説述
したる良書なり。…………

▲定價五拾錢
郵税四錢▼

文學博士森林太郎先生題詞
荒木郁子著

（小説）

火の娘

——定價六拾五錢・郵税四錢——

傀儡師、胸に掛けたる人形箱、
佛出さうと鬼出さうと。

英國クレイク夫人著
文學士山崎直三譯

●ジョン・ハリファックス●

——七百五十頁の大册——
■定價壹圓五十錢
■郵税十二錢

理想の青年
最も健全なる修養小説！
家庭の好讀物!!!

發行所 東京神田南神保町一六 振替東京一九三四四番 尚文堂書店
全國各地書店 賣捌

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

都會藝術

四月一日創刊

定價金貳拾錢　郵稅金一錢五厘

未來主義者マファルカ（小說）　マリネッティ

溫室より（詩）　マアテルリング　川路柳虹譯

恐怖（小說）　チェホフ　米川正夫

靜物と食慾（短歌）　廣川萩泉

惡の華（新古典劇場公演臺本）　松本苦味

都會について（感想）　幸田露伴

ダンヌンチオの廢都　藤井伯民

閨房哲學　マルキス・ド・サート

世界慘酷史

美顏術印象記

特殊部落

刑事の部屋

稽古より舞臺へ

異國の話

劇評、創作、批評、文壇消息

發行所　東京市神田區佐久間町四ノ廿三（振替東京一二九五三番）（電話下谷三四一九番）　植竹書院

編輯所　東京市下谷區上根岸八十二番地　都會藝術社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

附錄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女性間の同性戀愛

——エリス——

女學校の寄宿舍などで同性戀愛といふやうなことが行はれてゐるやうなことを屢々耳にはいたしますけれど、私自身はさういふ事實を實際目擊したこともなければ、自身經驗したこともありませんでしたので半ば信じられないやうな氣もいたしました、全く何の興味もこの問題にもつことが出來ませんでした。ところが私の近い過去に於て出逢つた一婦人——殆ど先天的の性的轉倒者とも思はれるやうな一婦人によつて私はこの問題に非常な興味をもつやうになりました。私はその婦人の愛の對象として大凡一年を過しました。そして色々のことを考へさせられました結果、いよ〳〵この問題に就いて、知りたくなりました。で、性的生活を常に研究してゐられる小倉清三郎氏に何か同性戀愛のことを書いた書物がないでせうかと御尋ねしたことがありました氏は幾つかの書名を御知らせ下さいましたがその中にエリスの Studies in Psychology of Sex の中の Sexual inversion といふのがありました。私は段々に少しづゝ讀んで居ましたが、ある時、社員の野母氏(野枝氏ではありません)にその中の一章 Sexual inversivn of Women を抄譯でもして見たいといふやうなことを御話いたしましたら、同氏が御快く承諾して下さいまして一つ出來る丈私が骨を折つてやつて見やうといふやうなことでした。今度附錄として出します此の「女性間の同性戀愛」がそれなのでございます。發賣を禁止されさうな箇所は殘念ながら總てはぶかれたのださうです。私はかういふ種類のもの、飜譯の困難なのを御察して同

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氏の勞を深く謝します。（らいてう）

昔から、至る處に於て、女性の間に同性戀愛が存在したことは事實である。それを遠く歴史に溯つて追索するのは暫くおいて、今降つて十八世紀の歐洲を見れば、吾人は測らずも婦人間の同性戀愛の一例を見出すのである、そして其記錄は、男子のそれに比して、遙に詳細を極めてゐる。のみならず、ウエストフォールが同性戀愛の科學的研究の開始に於て、第一に取つた顯著な實例も亦婦人に關するものであつた。女性同士の慾情に就ても、嘗ては男子側に現はれた該問題については、寧ろ避けてゐた小説家等が好んで主題にとるやうになつた。要するに同性戀愛なるものは、男子に於けるよりも女性間には平凡な事實であつたことは疑ない。

それにも拘らず吾人は殘念乍ら婦人に於ける同性戀愛については比較的よく知らない、この變態（アブノーマリティ）を記載したあらゆる場合の中、婦人に關するものは此割合が非常に少ない。殊に此問題の主なる論説の中に婦人に關しては極めて僅一か其記錄を止めておらぬ。

これには種々な理由があると思ふ。第一は婦人に於ける同性戀愛は、稀には苛酷な罰を受けもしたが、一般男子は之れに對して無頓着であつた。男子に於ては同性戀愛は、罪或

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は離婚の原因となる時でも、女子に於けるそれは概して何の罪禍とも認められなかつたこと。も一つの理由は、婦人間に於ける是等の事實は、之れを發見するのは困難であつたからである。婦人同士は、男子同士よりヨリ親密であることは習慣上吾々の頭にありふれたことであるので、彼等の間にこんなやうな異常な慾情が存在してゐやうとは一寸思ひ及ばぬことである。そして此原因と關聯して吾人の注目すべきは、婦人が性的生活のアブノーマルな表現に關して、甚しきはその正則の場合すらも全く知らないで、絶對的沈默を守ると云ふことである。婦人は同性にして非常に烈しい性的牽引を感じても、其愛情が性的變態であることに氣がつかぬ。そして一度之れを意識した時には譬へ之を發表すれば他人の肩に載つてゐる重荷を輕くしてやる事が出來ると知れてゐても、極力自己の內的經驗の本性を暴露されないやうに努める。クラフト、エビングに自ら進んで送つたと云ふ無數の告白狀の中に婦人のは一通もなかつたと云ふ事實に徵してもわかる。

更に私は婦人間の同性戀愛の事實が不明である理由はも一つあると思ふ。と云ふのは、婦人同士の輕度な同性戀愛は、男子間に於けるそれよりも、ヨリ普通であるが、其生活狀態のおかげて、最も顯著な、そして最も完全に發展した同性戀愛は、男子に於けるよりも遙に少ないことである。此結果は、婦人の心身は輕微の刺戟には好く感じ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

易いが、大いなる變化はなし難いと云ふ事實と一致してゐる。

此種の變態は、下等人種の婦人間にもやはり相當に行はれてゐる、然し餘り記載されてはゐない。メーレンハウトの説明によると、(一寸引證する事が出來ないのは殘念だが)ニュージーランドではLesbianism(女性間の同性戀愛をいふ―譯者)が婦人間に行はれたさうである南亞米利加では、"同性戀愛は男子には通常の事であつたが女子に於ても似たやうな現象を見る事が出來る。

ブラジル蠻民の中に、ギャンダボーはこんなことを書いてゐる。

『これ等の印度人種の中には、絕對に貞潔を守つて、男を知るまいと決心してゐる女がある。此種の女達は、あらゆる婦人的職業を拋つて、男に模倣(なら)ふことを專心につとめる。頭髮も男の如くにするし、男と一所に弓を負ふて獵をするのは勿論、戰爭に迄も出掛けてゆく、そして不斷男の中に交つて何でもする、其かはりみんな一人づゝ女を有つてゐて、常に同棲してゐる。』

之は北亞米利加の男子間に現はれてゐる現象とやや類似してゐる。然し bote (男性間の同性戀愛者の被虐待欲(マゾヒズムス)をいふ―譯者) を熱心に研究した、ホールダー博士は、私に之れに相當するやうな現象は女に見た事がなかつたと云つてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヤコブの書に依れば、パリ地方では、女同士の戀愛は極めて秘密に行はれてゐるが、それは男子間と殆ど同樣にありふれたことである。

バウマンの説によると、ザンジバーのネグロでは男子間に性的轉倒があると同樣に、女にも決して稀ではないと云つて居る。是等の女には東洋的の風習として、公然と男裝をすることは一寸困難な事だが、然し彼等は巧に秘密にしてこれをやつてゐる。そして仲間の婦人からは其態度が如何にも男らしいと云ふので認容されてゐたのみならず、實際に此女達には女の服裝が似合はなかつたのである。彼等は男子の職業を好み、同じやうな傾向を有する婦人、もしくは贈り物や其他の手段によつて自由に成し得る通常の婦人に性的滿足を求める。

コッヘルの説に依ると、アラビヤでは女には同性戀愛が著しくはない、然しエジプトでは、ゴッタード、コッヘル其他のオーソリテーに依れば、非常な流行を呈して、どんな女でも其密房に各自一人宛の所謂フレンドなる者をもつてゐない者はないと云ふことである。黑人種や、フランス出のミユラット(白人と黑人との間に生れた者)の中にもコッヘルの説によると、同性戀愛は極めてありふれた事だと云ふことである。彼はこう云ふ實例をひいてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『自分の知つてゐる婦人に、(勿論ガダルーブ人ではなかつた)非常な美人があつた。其人は既に一家の母たる人であつたが、ミユラットの女達や、黒人の女から過度な欽慕を受けて、彼等が臆面もなく不謹愼な招待狀を送るので、買物にさへ外出する事を拘束されて仕舞つた。』

彼は尙其他にも、十二三歲の若々しい女の子供が之等の女達からうける猛烈な誘惑の實例を書いてゐる、そして男性が同じ冒險を少年に試みることは遙に少ないと陳べてゐる。

マシニヨンやロリオンの說によると、支那及びコーチンチヤイナでは、稀であるが、印度では男子間と同樣殆ど流行になつてゐる程烈しいとのことである。

歐洲に於ける牢獄や、癲狂院では、女性間の同性戀愛は男性間と同樣に頗る盛に行はれてゐる。そして是等の場合には男子のよりも實際確かに目立つと云ふ樣に考へても差つかへはない。斯ることは多くは病的であり、尙又甚しく不德である。私は是等の事に就ては茲で說明する事は出來ん、又しやうとも思はぬ。

發情期に達する學生少女の間に同性戀愛が發するのは、男の兒と同樣學校內に於てである、勿論次の二つの場合の何れでも相互に錯綜してはゐるが、主として周圍よりの原因から起ることもあり、又內部よりの原因から起る事もある。兎に角第一の場合ではかりに二

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人の子供の臥褥が接近してゐる時、最初には相互に無意識に性的刺戟が當然の結果として生じてくる、それが各自接觸し、又接吻したりすることに依つて漸々發展してゆくのである、が然しこんな事は未だ本物の同性戀愛ではない、是等はノーマルの本能がよくさせるませた動作に外ならない、したがつて眞の性的轉倒とは何の關係もないのである。

同性戀愛の素因を先天的に有してゐる少女は何時迄もそれを繼續し、且つ發達させて行くが、大多數の少女は同性戀愛など云ふことは恥ぢさする心、若しくは異性との愛の成立によつて、いちはやく忘れて仕舞ふのである。吾人は明白な型として一つの例を擧げて見樣う、これは性的轉倒者と迄は云ひ得ぬ或婦人から得た觀測である。

『普通一般の少年や少女の樣に、私は學校時代に一人の友から放恣（セルフインダルゼエンス）と云ふ事を敎へられました。一人から二人と云ふ風に、漸次對手をかへてゆきました、處が私は或一人とのこふ云ふ風な記憶す可き事實がありました。丁度私共は同年同士な十六歳であつた、一夜を極めて肉感的に過した事がありました、後日非常な羞恥を感じた私達は、つひそれが最初の最後でありました。

まだ私が僅かに八歳の時、十三歳の友で、非常に私の肉體をいたづらして喜んでいた人がありました、私は甚だ好みませんですが、何時も彼女の體をもて遊ぶ方法などを私

に數へてくれました。私共は、六ケ月の間いつも一所にねました。それは情感と云ふやうなものでなく、唯單に快樂のためにこんな事をするのは小供同士としては一般の人が想像するよりも私は極めて何でもない事だと思ひます。私自身に起つた此種の事でもほとんど數へきれぬ程です。

私が前に述べました十六歳の友と肉感的におち入つた一つの事も、此友とは少さい時から度々一所にねて、そんな樣な小兒同士の眞似もしたのでした、そして暫く會はないので丁度其年になつて、少さい時の記憶を呼び起し乍らやつた事が、遂に性的衝動に了へたのでした、然し私も彼女も決して奇異なアフェクションを感じたわけじやありません、唯私等は其瞬間に私共が性の本性が割合に强かつたと思ふ、そして私共が恥ぢ入る樣な或ものに誘惑されたのに過ぎない、それ故私共は其以後はなるべく接近してゐる事を避けました、私共はたしかに此種の事を好まなかつたにちがひありません、そして何時も其一夜の事を想ひ起す毎に自他を卑下する樣な氣分がして非常に不快に思はれます』

此種の同性戀愛は、殊に男子とは全く隔離して夜晝通してひつきりなしに女計り集まる樣な職業に從事する間に養成される。例へば、大きなホテルに雇はれてゐる女中仲間な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どは此一種で、彼等の間に於てはこんな種類の行爲は決して珍らしい事ではない。かなり以前の事だが、レイコックが此種の劣情の表現が實際に存在する事を注目して、之は熱しきつてゐる室内に長時間接觸して仕事をする樣な境遇の縫衣女や、レースメーカー等の間に起るヒステリー的の現象だと云ふた事がある。實際多數の若い婦女(オンナ)達が、終日大きな商店や工場で働らいて、夜間は合宿所に二人宛同じ室内に、甚しい時は二人宛一つのベッドに眠ると云ふやうな狀態はすくなくも此の樣な劣情の遂行を容易ならしむるものだと云つてもいゝ。

劇場に於ては、斯樣な共同動作によつて刺戟されて異狀を呈してゐる性慾狀態が、ともすれば戯曲的性癖と、同性戀愛と互に關聯しやうとする一般の傾向の爲めに益々複雜になつてくる、が然し此の點に就てはまた後に述べることゝしやう。私の或る友人の說に由ると、少女間に於けるパッショーネートなフレンドシップは、極無邪氣な程度から初まつて性的戀愛の最も念入つたものに至る迄、あらゆる種類のものが劇場には非常に多く行はれてゐる。これは單に女優にのみ限らない。コーラスや舞曲をやる少女仲間に於ても同樣である。化粧部屋はゴタ／＼してゐるし、幕間の約二時間は皆何等の刺戟もなくて不活潑な、沈靜した狀態になつて二三の部屋に閉ぢ込まれて待つてゐる、こんな時が、かゝる特殊の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

感情を發生するに絶好の機會を提供する。大抵の劇場内には小さな少女の集團があつて局外者も多少避けるし、彼等名々も仲間外の知人を作らうとはせずに、唯彼等の間のみに非常な獻身的の愛着を相互に誓つてゐるのである。是等の少女達の大多數は男にカラカイもするし、フザケル事もするが、中には殆ど男には話しかけさうにもしない女がある、彼等には特別な所謂「親友」とか「なかよし」とか云ふものがきまつて附いてゐる、そしてもし仲間の者が他の劇場に轉ずるやうな場合には、ワザ／＼戻つてきて樂屋の入口に相手をまつてゐる。が然しこんな場合には餘り極端に走るやうな事は稀である。

其理由は斯うである。一體英國の少女、殊に中流又は下層社會では、女の貞操を失つた時でも或は失はぬ時でも著しく傳習的觀念に拘束されてゐる。無智と習慣とが抑制的影響を與へるので、かやうな特種の病的性慾狀態は論理上必然の結果迄陷るのを妨げられる、そこでLesbianismが最も明確に存在するのは上流社會及び高級の賣淫とである。其わけは、此等の社會に於ては、行爲の自由も、傳習的先入主から脫することの自由も極めて大きいからである。原因が外界より來るのではなくて、寧ろ主として自巳に發してゐる場合も如上の場合と混同して其間に明白な區劃を定める事は出來ない。か樣な場合には、主に女學生或は若い女がたいてい少し位年長の女に燃ゆるやうな愛着の情を起す、相手は大概同窓

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

同士であるが、女教師の事もある。そしてそれ等に向つては溢るゝやうな情愛と執着を浴ひせかけるが、其手答へのある時とない時がある、その情愛を迫られる場合には、其表彰は感情的な奉仕を感謝して受け入れるにあるのである、此愛着の實を惜し氣もなくふりまく乙女は、溢るゝ程の情緒に滿たされるが、性的衝動には全く無關係な場合が多い、故に性的の滿足などを求めやうとはしない。が然しキッスや同衾の特權を要求される時には。比較的手答へのない友達ですか[illegible]も多少性的の情感の發現を感ずるのである。がこれ等の現象には殆ど注意が拂はれない、そして少女等は普通性的の問題に就ては全く無智なので解らずに濟んで仕舞ふ。或る時には本能的に、若しくは故意に性的感覺を、抱擁や口吻で啓發させやうと努力する事がある。此極めて初歩な同性關係は、私は男子よりも女子の方が多いと思ふ、此の理由は幾つもあるが略次のやうなものである。

（一）男子の方は性的現象を目撃する場合が女子より多く從つてかゝる關係は男らしくないとさげすむ場合が多い。

（二）女子は他の人に對するの感情及び献身の心が男子より遙に強い事。

（三）現社會狀態では、若い女を異性から遠ざけて居るので、男子と同じ程度に性的情緒を發露する機會がない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（四）然るに社會の慣習的傾向は、可なりの程度の女子間に於ける肉的親交を認めてゐる、斯樣にして同性戀愛を一方では奬勵し、他方では之を陰蔽してゐると云ふ始末である。

女子が學校內で同窓間に、或は敎師に對して抱く狂熱的執着は、心理學的の立場から見てもなか／＼興味があるし、又實際的方面から見ても少なからず重要な問題である。斯ふ云ふ女子の友情ともつかず、性的情緒ともつかぬ執着は、女子を敎育の目的の爲めに隔離する國では何所に行つても見出される現象で、其の徵候は大體に於て不思議な程一致してゐる。無論其程度とか或は性質や時日や場合は傳染的性質を帶びる事もあるが。

是等が最も詳しく研究されたのはイタリーである。オビシとマルチェシニとは（前者は精神病者で、後者は心理學者である、協力して研究して居た）此の現象を、かなりの洞察力と緻密と許多の實例とを以つて分析的研究を試みた。然し全くこれと同じ現象が到る處の英國の女學校――最も近代式學校に至るまで――そして米國の或る大きな女子大學では非常に極端になつて識者の深憂を買つた程でつた。

多少無意識的な性的特質を帶びてゐる是等のパショネートなフレンドシップは、學校以外乃至學校を卒業して後もあり勝の現象である。

若い女が若い男の知己と或る距離を隔てて互に戀し合ふ時期と、同性の友達と密接な愛着に陥る時期とが交互に起る事が屢々ある、此場合には、何等先天的の性的轉換が無いのが普通である。之れは大抵の場合に男子と關係して絶えず正規の刺戟を受くるのが、實際生活の壓迫のために感情が確定してくると、斯かる感覺の本性を知るやうになつて來て、結局是等を忌むやうになるのである。或る場合には之れに反して斯る關係が、――殊に卒業した後に生じた場合――可成永續する事がある。エナヂェチックな、そして感情的な女が、（普通美人ではない）夢中になつて執着する相手の女は、どつちかと云ふと寧ろ或る定まつた職業を有つてゐる場合が多い、が然し何處迄も非實際的で、性的本能も非常に薄弱なのが普通だ、そこで、女達が夢中になつてゐるのを喜んでも實際には何等之れに應報しない事もある。事實に於て感情が潜んで現はれぬこともあるし、又全く無意識の事もある。或は一方にのみ偏在することもある、が然し多くの場合に、多少共知られてゐて、而も默認されてる。斯う云ふ場合があやうい性的轉倒の岸に臨んでゐるのである、然しこれではまだ眞正の性的轉倒とは云へない、そして斯んな關係に於ては性は殆ど根本の要素をなしてゐない、寧ろ第二第三の問題で附屬的、寄生的のものである。

肉體的性質に於ても、心理的性質に於ても著しく相違してゐるために一見性的關係らし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い狀態を生ずる事が屢々ある、そしてそれは其一方か兩方の神經の發達が僅かに異常を呈してゐる場合が多い。吾人はかゝる關係を最高調の友情であると見做さねばならぬ、そして之れは性的本能を用ゐない事に歸因する。

女子に於ける眞正（ホントウ）の性的轉倒に關して色々擧げた記事に對して、私は滿足を與ふるやうな個々の實例を示す事が出來ない。報告は可成澤山ある事はあるが、大抵是等は斷片的で滿足なものではない、完全な場合なのは却つて使用するの自由がない。

先づ最初に擧ぐ可き階級は、同性戀愛が、可成明瞭に存在してゐるが、外部に餘り現はれぬ連中である、そしてホントに性の轉倒してゐる婦女が一番熱中してつけねらふのは此種の階級である。是等の婦女子連が普通の女と異る所は、第一に同性の者からラーバア然としたとりあつかひをされても嫌惡の情を起さぬ點にある、而し普通の男からは餘り注意を引かれない、勿論澤山の例外はあるが容貌は平凡か醜でも體形の美をそなへて居る場合は少ない、此點は美しい容貌を供へてるよりも相手の女にとつて重要な事がらである。彼等の性的衝動は著しく目立つ場合は少ないが、その本性は何處迄も强い感情的色彩を帶びてゐる。之れを要するに、彼等は體質强壯で、肉體的にも精神的にも發達した女とは云へない。加之子供を產むには適してゐない、が猶多くの優れた特質を有してゐて常に女ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しいと云ふ點を失はない。或人は、彼等は女の中のエリヌキで、普通の男は顧みないからであると云ふ。それは疑ひもなく、彼等が何故同性戀愛に陷るかと云ふ理由を語つてゐるが、然しこれが唯一つの原因とは思はれない、然も彼等が斯かる特種の階級を構成する以上は、譬へ性的とは云へないにしても、元來男よりも女を好むと云ふ性質を有つてゐるらしいので、男が彼等に對して冷膽になると云ふのは、男を魅する力がないと云ふよりは寧ろ如上の原因の爲めに起るのである。

眞正に性の轉倒した女を前述の階級と比較すれば截然たる本質上の相違がある。即ち多少共明確に男性化した形跡を認め得る事である。之れは所謂「男女（オトコオンナ）」と稱せらるゝものたる事を要しない（實際多くの場合にさうではない）何故なれば、男女と稱せらるゝ者は性的變態と何等の關係なく、趣味習慣の方面から男を眞似るのに反して、前者に於ける男性化と云ふのは、器官的本能（オルガニツクインスチインクト）の一部であつて、彼は決して此本能を强めやうとはしない。此男性的要素と云ふのは、最も少ない場合には自分の心を引くやうな女に接近して反對に總ての男を冷酷な、味のない態度で取り扱ふと云ふにある、之れは交際をせぬと云ふ意味ではなく、凡ての性的關係——情的關係は勿論、單に男の機嫌をとると云ふ事すらも——を除外すると云ふのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大柢の場合、眞正に性の轉倒した女は男に對して絶對的に無頓着である、甚しきは嫌忌をさへ感じてゐる、從つて男も亦彼等に對しては自然無頓着に冷淡になるのが普通である。性の轉倒した女の主要なる特質は、或る程度迄男性化することである。已に私が指摘したやうに、女が男の態度や、服裝を採用する傾向は、決して性の轉倒した證とは云はれない。曾つてノルマン夫人の編輯にかゝつたアドベンチェアシリスの「女冒險家」と云ふ本の中には性的轉倒に關する何等の痕跡をも認め得ない、それらの中の大くの場合に於ては、男に對するの愛がやがて男子の服裝や、態度を眞似る動機であつたのである。

猶スコレイ、シッバー氏の娘シャーロット、シャーリ孃は男の子の樣な快活な女で、其生涯の大半は男の服裝で通し、最後に元氣な記憶錄を書いたが、大柢の女は彼女を男と誤つて心を寄せた事は屢々あつた、が彼女自身は他の女に心を向けた事はないらしい。

實際女が假裝の男と戀におち入る場合が可成多いと云ふ事實は、注目するに價値ある事柄である。然し性的轉倒をなした女が出來得べくば男裝をしやうとする傾向は非常に明白で、又實際に便利だからでもあるが、そればかりではなく、又他の女に男だと云ふ印象を與へると云ふ事の外に、事實男の着物をきると云ふのは非常に氣持がいいからである。それについてモールはこんな例を擧げてゐる。それは十六歲の少女で、自分の性的變態に就ては無

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

意識で、彼女の家族の者が他出すると、いつも家中の若い男の着物を着るのを無上の樂しみとしていたとの事である。

彼等は常の服裝の場合には大いに男性的單純さを表現してゐる、そして殆どあらゆる場合に、どんな些細でも化粧と云ふやうな事は忌み嫌ふのである。之れ等の事實が明に現はれない時でも、凡ての無意識になさるゝ身振りや習慣が、女の知り合に斯ういふ人は男に生るべき筈であつたのに、と云ふ考へを起さしめる。粗暴な、エナーヂエティックな動作、腕の樣子、愛想もない、ブッキラボーな言葉づかひ、音聲の抑揚、男の樣に卒直で、名譽心に富む事、殊に男に對する羞しいと云ふやうな樣子はなく、と云つて又殊更に大膽を裝ふのでもない態度、凡て是等の事實は、銳敏な觀察者に、底に潜んでゐる心理的變態を察知せしむるには充分である。

或る場合には、身體の組織がある程度迄粗糙になつてゐると云ふ事がないでもないが、鬚や鬚は見出す事が出來ない。いつたい鬚のある女は男型に近いと直に考へるのは誤りである。外にもつと純粹な男型的近似が存在するのである。筋肉が至る處ひきしまつて、軟かな連結的組織は比較的少ない故、接觸した場合に女らしくない感覺を與へる、又音調が屢々變つてゐると云ふ計りでなく、此變調の原因が、解剖學的變化に基因してゐると考

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

へても差支へない理由がある。モールの意見によつて、プラトーは多くの性的轉倒の女の喉頭を檢査した處が、多くはハッキリと男性的型を呈してるが、殊に先天的の原因による二三の著しい事實を發見した。習癖の點から云へば、全然女らしい女にも屢々ある紙巻煙草に對する嗜好があるのみならず、葉巻に親しむ强癖を有するものを發見する。針仕事及び其他の家庭的仕事は大抵好まない、のみならず場合によつては出來ないが、其他の運動競技などに至つては可成の可能力を有つてゐる。是等の者の生殖器には何等男性的特徴を見出す事は出來ない。然し完全な發達をしない事は屢々ある。斯様に種々な特徴のあるにも拘らず、婦女に於ける性的轉倒は概して男子のれよりも外部に現はれない、同時に轉倒した女は男を引きつける力がない、そして自分自ら男に對して一般の場合無頓着で、何故男が女を愛すべきかと云ふ事は容易に了解が出來ても、女が何故男を愛すべきかと云ふ事は解らない、それ故男に對して少しもうら耻かしいと云ふやうな樣子もなく、男の愛を得やうとする弱々しい媚びるやうな態度は毛程も表はさない。

性の轉倒した女に夢中になる男は、概して寧ろ女型の男である、例へば一度私の出逢つた様な場合は、幾分神經病的遺傳を有つた、體格倭少な、女を引つける力のない男であつた。そして生活の仕方は、ごつちかといへば非常にうちわである。要するに、コンナのはとも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すれば同性の男から夢中になられるやうな男である。然るに轉倒した女は男性に對しては殆ど冷膽で、只友人としての親しみのみであるが、自分の心を寄せてゐる同性の前では、非常にはにかんだり、或はマゴツイたり、場合によつては着物をとく事すら出來ぬ事もある、そして其戀する女に對しては熱烈やなさしい愛情を捧げる。かう云ふ種類の女の情慾は同衾や、キッスや抱擁の際に發露するのである。

轉倒した婦女は女性美の熱心な賞讃者であるが、殊に肉體のしつかりとした美をたゝへる、此點は普通の女の性的情緒の中には極僅少な美的感情しか交つてゐないのに比して異つてる點である。其性的習癖は轉倒した男に屢々あるやうな混亂は餘り見られぬ。私はモールの說に一致して女の同性戀愛は、同じ關係の男に比べて、遙に忠實で、そして永久的だと主張したい。

性の轉倒した女が結婚する場合が屢々ある。モールは、彼が色々の方面から得た確信から轉倒した女は同種の男程正規の情交を怖れないと云ふことを信じて居る、これは女が、斯かる狀態に於て或る程度迄受動性を保持する事が出來ると云ふ事實に基いてゐるらしい。他の場合に或る程度の精神的同體異性がある、勿論轉倒した男の間に於けるやうに同性戀愛の本能の方がヨリ大なる安心と滿足とを與ふるのが普通らしいが。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

亞米利加や佛蘭西や、獨逸や英國の權威をもつて語り得る多くの觀察者は、同性戀愛は、婦人の間に漸次增加しつゝあると云つて居る。之れは事實らしい。

吾等現代の文明にはかゝる情態を促進するやうな要素が隨分多い。近代の自由解放の運動――同等の權利と義務、同等の自由と責任、同等の敎育と職業、是等健全なる、而も避く可からざる運動！然し是等は同時に幾多の不利をも携へてゐるもので、婦人の犯罪及び發狂率の增加をも含んでゐる。そして此犯罪及發狂の率は刻々に男性の標準にまで增加しやうとしてゐる。

是等の事實と關聯して、吾人は犯罪や發狂とは全く同じだとは云へない迄も、多少密接な關係を有してゐると見做されてゐる同性戀愛の增加を見出しても別に大して驚くにも及ばない。婦人が智識や經驗を男子にも女子にも同等の權利であると思ふ樣になつたのは至當の現象であると思ふ。然し此主義を性的範圍にも適用するとなると、今猶は或る範內に制限されてゐるのである。青年男女の親交は、昔日と同樣社會から抑壓されてゐる、高等敎育に至つては、講堂や實驗室や病院內で一所になると云ふ事すらも英國や米國では阻止されて居る。結婚は衰へてゆく、そして男には自由が公許されてゐるに反し、女子の性的區域は日に〳〵減少してゐる。其結果異性には僅に媚を呈するにとゞまり、同性に對し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ては益々親密になつてゆく。

男子の獨立と、因習道德――譬へば女は家の中の陰氣な倉の內で嘆息しながら、決して來る事のない男を待たねばならないと云ふ樣な舊い敎へに對する嫌惡を敎へられた女は、何處迄もこの獨立と發展さして仕事のある所に愛を探さうとする所まで達する。私は敢て此等の近世の運動の僅かな影響が直接性的轉倒を惹起したとは云はないが、間接な原因は確かにあると思ふ、すくなくも遺傳的神經失患を促進すると云ふ點に於て、單にこれ計りではない、近世運動の影響は、此の遺傳的神經失患の幼芽を益々發育させて結局模倣的同性戀愛の素因となるらしい。そして此模倣的同性戀愛の直接原因は先天的態變者が度々智能の可成の發達した婦人間に發生して故意が無意にか他人を感化するによるのである。

淫賣婦間に同性戀愛の屢々行はれる事は可成興味のある事實で特別の説明を要する。何となれば、一見したところ、同性戀愛の著しき原因と思はるる凡ての事件に反對の境遇にあるやうであるからである。事實に關しては毛頭疑ふ餘地がない、淫賣婦の生活を知悉してゐる凡ての人々に由つて――勿論其程度には異論があるが――注目されてゐる。

ベルリンでは、モールが確かな筋から得た報知に由れば、同性戀愛の傾向をもつた淫賣婦は約二十五パーセントの割合である。パリーで數年前此の問題を詳細に研究したパーラ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ンデユレヤートレイに由れば、當時のパリーに於ける割合も丁度こんなものであつたさうである。現今はシユバーリエーによれば、少しく増加したさうだ。ヌブルネブユインはパリーの梅毒病院の患者の七十五パーセントは同性戀愛を遂行してゐると信じてゐる。ロンドンに於て私の研究の及ぶ範圍内では、淫賣婦の同性戀愛は遙に僅少であつて、著しい形のものは比較的僅の部分に限られてゐる。

私は友人から次の報告を得た。

賣淫婦に關する私の經驗から云へば、パリーでは同性戀愛が非常にはびこつてゐると推知する、實際これがノーマルだと云つても差支へない位である、殊にムーラン、ルージ、カシノ　ド　パリーや其他の公衆舞踏場の踊手の大多數は對をなして行くので有名である、そして大ていい異性と職業的行爲をやる大切な瞬間ですらも別れるのを好まない。ロンドンでは無論これ程は著しくはない、加之自分の考ふる處では、は、、はた程流行してはゐないと思ふ、といつて決して數が少ないと云ふのではない、數名の有名な賣淫婦は此方面の傾向のために知られてゐる。然し之れは彼等の日常の商賈とは餘り密接な關係はない。私は個人的には一人も全く同性戀愛に傾いた淫賣婦を知てつはゐない、唯ウス〳〵とさういふ變り者が一二あるを聞いてゐるのみである。

同じ種類の、も一人の女はバーリントンの仲見世で、自分の寫眞を買つて喜ぶ年若の女を、おつきにしてゐる。然し職業の階級が下るに從つて是等の事實は少くなつてくる。世間にはよくさう云ふ事は聞いた事すらない、と云ふ女があるもので、彼等は男に關しては知つてゐても、女側の例の事實には全くの門外漢である。加ふるに、彼等の多數は、單に此の事を思つただけでも、悚然とする、そして之が所謂、フランス女の動物性の本領だと信じてゐる、とは云ふものの、殆ど凡ての女の子には、夫々フレンドがあつて、別れてゐない時には度々同衾する、此の事實の眞相は勿論云はずとも知れてゐる。何となれば、少くとも吾人の判斷の及ぶ範圍内では、其意味が多くの場合、普通の少女の間に於けるそれと少しも異つてゐないから。

偖て、淫賣婦間に斯樣に同性戀愛が、ありふれた事柄であると云ふに對しては、前の場合とは異つた、或る根本的な原因がなければならない。其の一つは、疑ひもなく、彼等の男に對する特種の關係に基いてゐる、即ち、職業的性質を帶びたものであるから此の職業的要素が增してくるに從つて、性的滿足を得る可能範圍は減じてくるのである、若し之がよくいつたにしても、社會的對等と云ふ感と、自分の男だと云ふ所有感とは全

然缺除してゐる、從つて心から愛情を捧げやうと云ふ意志の起りやう筈がない。

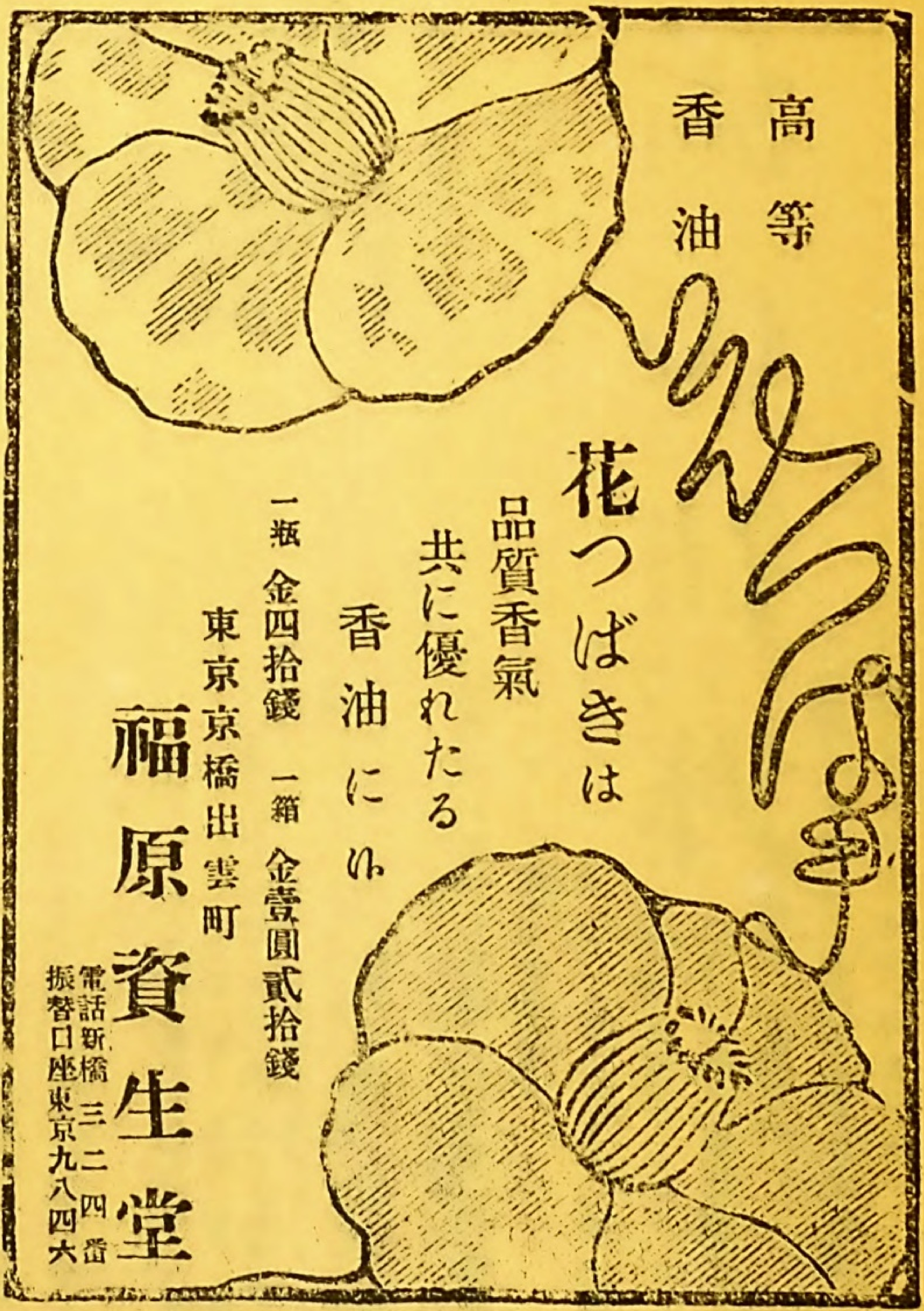
そこで勢ひ、彼等は此等の缺陷を他の女の中に見出さうとする樣になるのである、これに關聯して、男の場合に失戀が同性戀愛的傾向を助長することが度々あると云ふ事を想ひ出すと頗る興味がある。これらは別問題であるが、大多數の場合に、淫賣婦は遺傳性の神經失患と、精神的にも肉體的にも衰退してゐると云ふ徵候を多少現はしてゐる事を忘れてはならない、其れ故彼等を先天的犯罪者と類似した、特種の人間の變種であると、見做しても殆ど間違はあるまい。其不規律な生活、過度の性慾刺戟、飯酒、凡そ是等のものがよつて、たかつて益〻此のはかるべからざる惡影響を强くする、斯して彼等が容易に同性戀愛に陷らうとする素因が形成されるのである。丁度、犯罪人や、天才又は智力の著しく發達した人々の間(勿論其程度は遙に低いが)に於けると同じやうに。

(完)

——一九一四、二、八——

野母譯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自由講座叢書第一編

定價金六拾錢　郵稅一冊金四錢

東京神田南神保町十六　尚文堂發賣

二六新聞の批評

「近頃になつて文藝趣味は人間の本來性であるが如くに擴まつて來た。そして必然の要求として見られる程に文藝に對する渇望は若い人達の感性を湧き立たしめて來た。此の要求に副ふ目的で生れて來たのが自由講座である。(自由講座同人曰く、自由講座の成立には今少し積極的の目的があります。)本年三月産聲を揚げてから以來毎週二回づゝ、人も我も許した大家の講演が開かれて來た。其の講演には隨つて充分の價値と權威が横溢してゐる。その講演を集めたものが即ち此の書物であつて、

△露西亞に於ける文藝と實生話(昇曙夢)
△メレディス論(平田禿木)
△イブセンとドストイエフスキイ(片山伸)
△『サラムボオ』(生田長江)
△ドストイエフスキイ研究(森田草平)
△チェームスの哲學(中澤臨川)
△建築美に於ける材料の謎(山崎樂堂)
△問題としての性欲(野上臼川)

の八篇が收められてゐる。眞面目な文藝の研究者ばかりでなく、苟くも文藝に趣味を有つたものは、好箇の參考書であり、文伴侶である。固に此の叢書は引き續いて續篇を出すそうである。」(十一月十八日)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夏目漱石先生序　野上彌生子譯

傳説の時代

▼▼最新刊▲▲

菊版美裝約八百頁
挿入寫眞五十枚
希臘古彫刻等皆珍品
定價金二圓
郵税金十二錢

文藝界の大寶庫

神と英雄の物語

▲文學者の寶典＝畫家の畫題＝説教者の材料＝家庭の好讀物也
▲近代上代を通じ西洋文藝を味ふには神話知識が根本的必要也
▲此書は希臘羅馬の神話を初め埃及北歐印度西藏の傳説を含む
▲原書はヴアージルオヴイツド以下一千餘種古典研究の産物也
▲小説よりも面白く書かれたる人間の想像力の無限大を示せり
▲譯者は今日迄此翻譯の如き興味を以て勞作を續けたる事無し
▲挿入五十個の寫眞は二千年前の彫刻を初め悉く古藝術の珍品

東京市神田區南神保町十六
尚文堂書店
電話本局四二五四
振替東京一九三四四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

増補三版

近代十四大家の十四英譯集

MOMENTS WITH MODERN GREAT WRITERS

(一名 英文近代文學)

—(脚註及作家略傳)—

文學士 野上臼川氏 校訂

四六 紙裝
二百二十二頁
定價四拾五錢
送料四錢

Andreyeff: Ben Tobit
Tolstoi: Where Love is, God s
Oscar Wilde: Model Millionaire
Strindberg: Half a Sheet of Paper
Mérimée: Taking of the Redoubt
Wedekind: Rabbi Ezra
Pierre Loti: Mme Chrysanthéme
Tchékhoff: Sleepyhead
Maupassant: Bertha
Gorki: Khan and His Son
Anatole France: Our Lad'y Juggler
Turgeneff: The Tryst
Bernard Shaw: How He Liedto Her Husband

東京市神田區南神保町十六 尚文堂書店 電話本局四二五四 振替東京一九三四四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四版

小説と脚本の飜譯集

邦譯近代文學

野上臼川氏譯

津田青楓氏裝釘
表紙鳥子六色刷
箱入四六版美本

萬朝報批評

凝りに凝つたる裝飾と相俟つて飜譯全盛時代の現文壇に一個の光彩を放下したる觀なくんばあらず。斯くの如き好譯文の盛んに出版されて貧弱なる我文壇の内容の日一日と豐富にされ行くを見ては吾人は歡喜の聲を禁ずる能はず

紙數五百三十頁
定價壹圓貳拾錢
内地小包料八錢

謎の女（オスカア・ワイルド）
氣味のわるい求婚者（ウェデキント）
ベルタ（モオパッサン）
マルセィユ歌（アンドレーエフ）
木乃伊の片足（ゴーチエー）
汗（カァン）父子（ゴーリキイ）
あひびき（ツルゲーネフ）
マダム・ピィルソン（ミユッセエ）
ねぼすけ（チェーホフ）
マリヤの手品師（フランス）
七人の姫（メエテルリンク）
母の愛（ストリンドベルヒ）
彼はなぜ彼女の亭主にうそをついたか（ショオ）

東京市神田區南神保町十六
尚文堂書店
電話本局四二五四
振替東京一九三四四

オスカア・ワイルド作
鶫沼直譯
島村抱月先生
馬場孤蝶先生序

最新刊

ウヰンダーミヤ夫人の扇

四六版二百頁
頗美本
定價六十錢

「妻は夫の眞生活の假面となり、夫の秘密を隱す外套とならねばならぬか」「妻は墮落せる夫に盲人の如く仕へねばならぬか」とは是善良なるウヰンダーミヤ夫人の面せる疑問であるばかりでなく結婚生活に於ける妻の疑問である

本書は結婚生活の秘密、結婚生活悲哀の暴露――ワイルドの男女觀、人生觀――ワイルドの警句結晶せる最高藝術品――現代人の心琴に最もよく共鳴するクラリネットの最高調

發賣所　東京市神田區南神保町十六番地　尚文堂書店

振替東京一九三四四

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みづゑは本部最古にして且唯一の水彩畫專問研究雜誌なり

月刊美術雜誌

みづゑ

第百拾

四月三日發兌送

送料共廿五錢

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸士は一日も本誌を座右に欠く可からず

□赤湯溫泉（水彩畫原色版）……中澤弘光
□家禽場の草原（同）……坂本繁次郎
□山の手（同）……舟木忠三郎
□行德（同）……大下藤次郎
□昆蟲應用圖案（チンク版）……織田一磨
□御宿海㈢岸（水彩畫寫眞版）……相田直彥
□其他水彩畫會員及春鳥會友作品數葉

□何の爲めに畫を描くか……中村不折
□水彩畫壇私議……中澤弘光
□昆蟲を應用したる圖案……織田一磨
□偶言……津田黄昏
□繪畫論……武田雨水
□春の寫生地……中川八郎
□朴の樹……丸山晩霞
□追憶の傳說……磯萍水
□臺灣旅行の所感……三宅克已
□雪の中より……南薫造
□大島の旅……赤城泰舒
□研究所たより……

發行所　東京小石川關口駒井町三番　振替口座東京六九六三番　春鳥會

創刊四月號

反響

定價十五錢 郵税一錢

○評論……阿部次郎
○評論……小宮豐隆
○評論……安倍能成
○評論……和辻哲郎
○評論……江部鴨村
○敎界時評……安藤枯山
○新刊批評の意義……生田長江
○三月の雜誌……生田長江
○評論……岡田耕三
○監獄改革……奥英一
○評論……堺枯川
○森田生田兩氏へ……伊藤證信
○評論……沼波瓊音

○小説一篇……鈴木三重吉
○永久の良人(ドストイフスキー)……中村古狹
○日記の一節……岩野泡鳴
○婚禮の詩……生田春月
○おもひで……植竹新月
○鳥の瞳の歌……藤井黎異
○闘鷄……大谷照耀
○小説一篇……佐藤春夫
○小説一篇……大平野虹
○小説一篇……萬造寺齋
○『サニン』『イフイゲラニイ』其他……森田草平
○小説一篇……森田草平
○漱石氏の『社會と自分』……德田秋江
○談話……夏目漱石

夏目漱石氏 森鷗外氏 小宮豐隆氏 序

森田草平氏著

縮刷 煤煙

四卷合册

新形袖珍本全六號活字組
總クロース極美本
定價八十錢 郵税八錢

盛春第一の好讀物
内容に於て草平先生の代表作。
價格に於て從來の四分の一の廉價。
裝幀に於て可憐に美しき册子。

編輯所 反響社
東京本郷西須賀町二番地

發行所 植竹書院
振替一二九五三 電話下谷三四一九
東京神田佐久間町四ノ二十三

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

内田魯庵先生新著

(『大正文庫』第十二編)

沈默の饒舌

三六判美本
定價八拾錢
郵稅八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈默の境中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を説き生活の難易を教ふその言の懇切なるその論の穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評して咄哉と云はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參ずる能はざるもの

『大正文庫』十二冊これにて全部完成す 書目進呈

東京小石川原町六 振替東京一六八六 丙午出版社
東京小石川原町六 振替東京一三五三 鷄聲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四月一日發行

アララギ

定價二十錢

第七卷　四月號　第四號

□茂(二)吉に與ふ……長塚節
□千樫に與ふ……長塚節
□愛蘭物語(イエーツ)……山宮允
□短歌雜論……齋藤茂吉
□愚人の偶語……赤木桁平
□偶感二則……平瀬泣崖
□目白にて(感想)……青君
□草木信念(詩)……室生犀星
□闇深く(短歌)……島木赤彦
□雜詠(短歌)……尾山篤二郎
□三崎客中作(短歌)……西村陽吉
□白楊の花(短歌)……土屋文明
□のひごろ(短歌)……原あさを
□山の春(短歌)……中原しづ子
□眠り(短歌)……中村憲吉
□桃の花(短歌)……古泉千樫
□アララギ歌壇……諸同人
□アララギ漫錄……同人

短歌

並木秋人　兩角七美雄　岡千里
都會詩人　飯山津淚男　守屋其翠
藤木誠　吉川かすみ　篠田群治
土田耕平　河野愼吾　筑波子
清水謙一郎　加藤雪腸　早川孝子
平沼ひさし　柳本城西　金原よしを

□同人募集□

東京本所南二葉町廿三
アララギ發行所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新刊發賣

平塚明序
伊藤野枝譯

婦人解放の悲劇

新形總洋布裝
挿畫肖像二葉
定價金六拾錢
送費金六錢

エンマ・ゴルドマン女史とエレン・ケイ女史の論文を集めたものです。「あらゆる偏見と傳説と習俗の覊絆を切斷し、自己心内の新生を創始」せんとする方々に、一讀を御勸めします。（譯者）

□卷末にエンマ・ゴルドマンとエレン・ケイ兩女史の傳を附す

發行所　東京市日本橋區檜物町九（振替口座五六一四一番）　東雲堂書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

番紅花

編輯同人

原信子　小林哥津

松井須磨子　神近市

小笠原貞　尾竹一枝

四月號内容

（定價金三十錢）（送費二錢）

■毫光（Melchior Lengyel）……森林太郎

■春の小曲（詩）……尾竹一枝

■レオナルドー・ダ・ヸンチの言葉……阿部次郎

■姉と妹（小說）……小笠原貞

■マカールの夢（Korolenko）……青山菊榮

■伊達虫子の紹介……岡田八千代

■さようなら（小說）……伊達虫子

■パルシファルに就て……原信子

■ワグネル、パルシファルの筋書……原信子

■さくらの花（小說）……尾竹ふくみ

■海外通信……O・P・Q

■いゝ小說家といゝ息子（Wide）……佐藤春夫

■影のかげ（詩）……八木澤

■「ピエールとジャン」を讀みて……八本麗

■苹果の木蔭（小說）……神近市

■米國の歌劇界……マリト

■編輯室にて……同人

挿畫

□ワグネル

□歌劇パルシファル第二幕舞臺面

□若い娘達……Mane Lauencin

□扇を持つた女……Mane Lauencin

□カット……恩地孝四郎

□表紙、扉、裏繪……富本憲吉

發行所　東京市日本橋區檜物町九（振替東京一五六一四番）　東雲堂書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

カフエープランタン

此度當プランタンは二階を擴げて食堂を新設致しました一度御來遊を願ひます、私の嗜好は私の店を街中と云ふ處から離し度思つてました、そして此度新設した食堂は多少成功したと存じます。

海邊の様な氣持のするヴエランダで日吉町の暗い通を見下ろしながら召上るコーヒーは趣味の無いものではありません。

階下は著名な文士書家の落書が壁の殆全部をうづめてます、不用意の間にそれ〳〵面目が表はれる所或は極端に皮肉なカリカチユアー一度では見つくせぬ程興味のあるものです。

ドーぞ御來遊の程祈ります、そしてプランタンは常に趣味の上に立つてる事を御覽下さい。

カフヱープランタン
松山省三

營業時間　午前十時頃ヨリ午前一時頃迄

テーブルドツト　金壹圓

ランチ　午前十一時ヨリ午後二時迄及午後五時ヨリ七時迄

A 三十錢　B 五十錢

ハンバクステキサンドウ井ツチ
カキフライサンドウ井ツチ　金十二錢

年末年始の御贈答になる様茶菓券を發賣致します

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

賜有功賞牌

最も優ぐれたる
御婦人用髪油ハ

寿美礼

本舗
東京市人形町通堺町
井筒屋香油店

御婦人向文房具

伊東屋の階上には進歩的な智識的な
御婦人向文房具が澤山陳列有之候
御高覧願はしく御待受申上候

銀座

伊東屋

電話京橋 三二九
七九六
振替口座五一一一

四月中の三越

四月一日より

第廿七回新柄陳列會

寄切見切反物賣出し

四大畫伯作品展覽會

懸賞裾模樣圖案陳列

懸賞寫眞『こども』陳列

四月十五日より

五月人形賣出し

■東京駿河町■

越 三越呉服店

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和45年2月28日発行　　【第8回配本】

青鞜第4巻　4月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.4
no.4

University of Colorado at Boulder
U18304 6745408

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER